闇に惑う

湯川翔子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇に惑う

【Ｎコード】
Ｎ４８５２Ｊ

【作者名】
湯川翔子

【あらすじ】
リュシエンヌの毎日は戦争である。王宮でメイドとして働いてはいるが、周りの壺や皿はとりあえず割る。割れる。怒り狂ったメイド長に怒られる。
怒られながらも一生懸命働く彼女だが、彼女には昔の記憶がなかった。それでもめげずに前を向き歩いていく。そんな何事も明るく考える彼女は、猫と聖なる騎士様を恐れていた。

序章

『彼の人は聖なる衣を纏い光の剣を掲げる』

「ねえ、兄さま。兄さまは聖なる騎士様にならないの？」

「うーん、それは難しいかな。聖なる騎士様はこの国でひとりだけだから」

「王子様がなるの？」

「いや、光の剣に選ばれた人がなるんだよ」

「ふーん」

「もしかしたら…いや何でもない」

「でも、私、聖なる騎士様じゃなくても、兄さまが大好き。大きくなったら兄さまと結婚するの」

「はは、そうだね。早く大きくおなり」

「うん、早く兄さまを支えてあげられるようになるから」

「…私も、必ず君を守るから」

「兄さま？」

「この運命は辛すぎる」

「兄さま？痛いよ」

「守るよ。私の愛しい…」

序章（後書き）

初めての連載です。なんとか…なんとか完結できるように（汗）

第1話　メイド、リュシエンヌ

甲高い音とともに床に叩きつけられたそれはあっけなく砕け散る。
サァ、と音がするかのごとく血の気が引いてくる。身体はその時の体勢のまま時が止まったかのように動かない。
呆然と床に砕け散った破片を見ていた少女は背後に感じた怒気にはっとした。
「リュシエンヌ！　…あんたまた…いくつ割れば気が済むんだい！！」
怒鳴られたリュシエンヌは身体を縮ませながらふるふると震えている。実にわざとらしく作られた仕草だった。
「メイド長…だって壺が勝手に手から離れたんです」
そう言ってしまってから後悔してもすでに遅い。リュシエンヌの言葉にメイド長のこめかみに青筋が浮き上がった。そしてリュシエンヌとは別の意味で身体を震わせる。
そして、息を大きく吸うと、
「このっ大馬鹿娘！！　あんたは今日夕飯抜きだよ」
リュシエンヌに怒声を浴びせかけたのだった。
「ひえええええええ、それだけはご勘弁を」

なんてこったい！今日は好きなゾーブ牛のワイン蒸しだって聞いたのに…

リュシエンヌは慌ててメイド長の服の裾にすがりつくが、振り払われる。
「早く片付けなさい！！」
そう言ってメイド長は、リュシエンヌに背を向ける。
「まったく、なんでこんな娘が城に勤めることができたのかしら」
ぶつぶつ言いながらメイド長は去っていく。その後ろ姿をよよよ

と倒れこみながらリュシエンヌは見送った。
「今日も料理長に残り物分けてもらおう」
ハンカチで涙を拭う仕草をする。食べないという選択肢はない、それがリュシエンヌという少女である。
「自業自得」
いきなり聞こえてきた声にも驚かず、リュシエンヌは困ったように笑う。そして傍らにいた金髪の美女の方に向いた。
「ベレニス」
リュシエンヌを見下ろすベレニスは呆れ顔だった。そして手を差し出す。
礼を言い、その手に捕まりながらリュシエンヌは立ち上がる。
「あなた、一体何個目の壺を割ったの？　あれ一体いくらすると思っているのよ。あなたがここで一生タダ働きしても弁償することはできないわよ」
ベレニスの言葉にリュシエンヌは眉を八の字にする。
そんなリュシエンヌを見て、ベレニスはさらに追い打ちをかけるように言う。
「確かにメイド長の言う通りだと思うわ。私、あなたがなんで城で仕えることができたのかわからない。平民出でしょう？　しかも、アレクシア様付きのメイドなんて。どうして？まさか実はどこかの貴族の令嬢とかいうのかしら」
疑問をはっきりと口にするベレニスの言葉にリュシエンヌは盛大に困った顔をした。それを言われると何も言えない。
自分の出自というのは、リュシエンヌ自身が知りたいことだった。

。・@。・@。・@。・@・。

リュシエンヌは今年１９歳になるらしい。らしいというのは自分の年齢を養母に聞かされたからである。それが本当かもよくわからない。

何故なら、リュシエンヌには5年前以前の記憶がまったくないのだ。

気づいたら養母にリュシエンヌと呼ばれており、世話をしてもらっていた。しかし、別に生活する分には記憶がなくても何も困らなかったのでリュシエンヌは、記憶を思い出したいと切望することはなかった。

養母に聞いた限りでは家族で北山に出かけたとき、野党に襲われ、家族の中でリュシエンヌただ一人だけ助かったらしい。何故養母がリュシエンヌを引き取ってくれたのか理由を聞いたがはぐらかされ教えてはもらえなかった。

『いつかわかるはずよ』

リュシエンヌが聞くと養母は、いつもそう言って微笑んでいたが、その養母は、昨年病で帰らぬ人となった。

たった4年と少しの間だったが、養母はリュシエンヌをとても大切にしてくれた。リュシエンヌも養母をとても好きだった。だから、養母が亡くなり、リュシエンヌはひどくふさぎこんだ。

しかし、何もせずにただ養母の残した財産を食いつぶすのは嫌だった。

だから、働き口を探したのだが、なかなか見つからなかった。

野菜屋や骨董品屋、酒場などいろいろな所を回ったが、どの店も「人出が足りてる」「今はいらない」など言って断られた。酒場の親父なんていつも人手が足りないとぼざいていたのに、リュシエンヌが言った時、酒場の親父は身体のいたるところから汗を流しながら「君はちょっと無理かな」と言ってきた。

買い物に行く時は優しくしてくれるのに。
さすがのリュシエンヌも少し落ち込んだ。
自分がドジでていろいろな物を壊すと知っていたからなのだろうか。だから　全部に断られたのだろうか。
しかし、彼女は何度断られてもめげずに職を探していた。
そして、いつものように職を探し歩いていたリュシエンヌに声をかけたのは、爽やかな笑みを浮かべた青年だった。

『君、職探してるんだよね？　あるよ』

そこからあれよあれよという間に王宮に連れてこられ、第3王女アレクシア付きのメイドになったのである。

その青年が王宮付きの騎士団の副団長だと知った時おったまげたが。

何故、副団長がリュシエンヌに声をかけたのかは王宮七不思議にされている。副団長もその理由を口にしないのでその謎は明かされるときは来ないのかもしれない。
アレクシア付きのメイドになってまだ日が浅いが、年の近いアレクシアとはとても気が合う。気が強く、物事をはっきりと言うアレクシアはドジな所をいかんなく発揮するリュシエンヌにはっきりと「トロい」「ドジ」「馬鹿」など言ってくるが、リュシエンヌにとっては、心地よかった。
アレクシアの方もリュシエンヌを気に入ってくれている。といっても玩具として扱われているような気がしなくもないのだが。
アレクシアに記憶がないということを告げても全く動じず、同情することもなく、ただ一言「そう」と言っただけであった。

そんなアレクシアは、自分の意思をはっきりと持ち、王女としては珍しく政略結婚に対して断固反対の態度をとっている。
そんな男勝りなところがある彼女は、未だに嫁ぎ先がない。
そういう点はベレニスにも似通った所がある。彼女もリュシエンヌと同じアレクシア付きのメイドである。侯爵家の令嬢で、その性格をアレクシアに気に入られ、彼女付きのメイドとなっている。アレクシアが気に入っただけのことはあり、口調は丁寧だがさらりときついことをはっきりと言ってくる。
きつい所もあるベレニスだが、リュシエンヌは、相手の前では何も言わずいい顔をし、影でこそこそと人の悪口をいうメイドとは、比べるまでもなくベレニスの方がよかった。
リュシエンヌは、二人が大好きだった。

頻繁に怒られ、飯を抜かれたりしているが、リュシエンヌは今の生活に大いに満足していた。

第1話　メイド、リュシエンヌ（後書き）

まだまだ、始まったばかりです。しかし、小説というのは何故、こんなに難しいのでしょうか？

第2話　苦手なもの

「リュシエンヌ」
自分を呼ぶ声に我に返った。

そういえば、ベレニスと話している途中だった。

「ベレニス」
かすれるようなリュシエンヌの声にベレニスは柳眉をひそめる。
「あなた、具合悪いの？」
愛想はあまりよくないが、ちゃんと心配してくれるベレニスにリュシエンヌは胸が暖かくなった。
「ううん、大丈夫なんでもない」
いらぬ心配をかけないようにすぐさまリュシエンヌは首を横に振る。
「あなたドジだからまたどこかで転んで頭でも打ったんじゃないの？　気をつけなさいよね」
「もう、危ないから早く片付けてしまうわよ」とベレニスは箒を取りに行ってくれる。本当は割ったリュシエンヌが取りに行くべきだったのだが。
「ありがと！　ベレニス」
聞こえるように言ったつもりだったが、リュシエンヌの言葉にベレニスは何も答えず、さっさとその場から立ち去ってしまった。

照れてるのねー。

そうリュシエンヌは解釈した。
残されたリュシエンヌはとりあえず床に飛び散った大きな破片を集めようと破片に近づく。近くに人がいなくてよかった安堵しなが

ら。

破片を拾い集めようとしゃがんだそのとき、何故かリュシエンヌは風を感じて、顔を上げる。

リュシエンヌの長い紺色の髪がなびいた。

「え？」

顔を上げたリュシエンヌの視界に飛び込んできたものにリュシエンヌは目を見開いた。

。・@。・@。・@。・@・。

ベレニスは、箒と集めるための板を持って歩いていた。

まったく、なんで私がこんなことを。

苛立ちながら心の中でリュシエンヌを罵る。リュシエンヌは大変アレクシアに気に入られている。ぱっと突然現れアレクシアの興味を惹いたリュシエンヌの存在が許せなかった。要するに嫉妬なのであるが。

だから、仕事も満足にできず、へらへらと笑っているリュシエンヌが余計憎らしい。

仕事はできないし、ドジですぐへまをするリュシエンヌであるが、いつも一生懸命なのをベレニスは、一緒に仕事をしているうちに知ってしまった。

だから、彼女に憎悪という感情は湧かない。

私は、あのこを知っているから。

リュシエンヌと出会ってまだ日は浅いが、彼女の飾らない性格だけは気に入っているかもしれない。　リュシエンヌを本当に心底嫌いだと思っているのは、リュシエンヌと交流しておらず、彼女の人となりを知らないメイドだけである。
その気持ちも分からなくもないが、本人がいないときにこそこそと悪口を言い合うのは実に陰湿で、そういうことをしているメイドたちにベレニスは辟易する。
でも、アレクシアのこともあってリュシエンヌが憎たらしいので、ついいじめてしまうのだ。
こう、ベレニスが何か言った時に、困った顔をするリュシエンヌに心を震わせる。もっと言いたい。もっと困らせたい。
ベレニスは、自分にかなりの嗜虐趣味があることを、本人はまだ気づいていない。

片付けてるかしら。まさか、破片で手を切ったとかないでしょうね。

不安に思い、急ぎ足で歩いていたベレニスは、突如聞こえてきた絹を引き裂くような悲鳴に走り出した。

。・@。・@。・@。・@・。

「リュシエンヌ！！どうしたの」
リュシエンヌはその場に倒れるようにうずくまっており、顔を上げない。
慌てたベレニスはリュシエンヌに駆け寄る。
「リュシエンヌ、何があったの？」
肩を掴んで、聞くがリュシエンヌは答えない。

身を丸めてカタカタと震えているリュシエンヌは、頭を抱えている。そんなリュシエンヌをベレニスは身をかがめ、下からのぞきこむ。

「落ち着きなさいリュシエンヌ。何か言わないとわからないわ。とりあえず、部屋に戻りましょう。片付けは他の人に頼んでおくから」

リュシエンヌの手を引いて立ちあがろうとしたベレニスは、その手を振り払われ驚いて、振り払ったリュシエンヌを見た。

「いや！」

「リュシエンヌ？」

「そっちに行きたくない」

とりあえず自分だけでも立ち上がろうとしたベレニスはリュシエンヌの伸びてきた手によって阻まれる。

幼子のように首を振りながら、いやいやとベレニスに懇願する。

お願い、行きたくない、まだ、リュシエンヌはそんな言葉を繰り返す。

「何？　どうしたの」

「ね、」

「ね？」

「猫が…」

その言葉に、ベレニスが顔を上げると通路の先にはちょこんと小さな愛らしい子猫が座っている。大きな瞳をこちらに向け、大人しくその場に座っているその様子からはとても害があるようには思えない。ベレニスが顔を歪ませた。

「あれ？猫が怖いの？」

こくこくとリュシエンヌは何度も頷く。

驚かせるな、と怒鳴りたい所だったが、尋常ではない怯え方をするリュシエンヌの様子にベレニスは「わかったわ」と言って立ち上がる。

「猫を王宮の外に連れていくから、あなたはここにいなさい」

「ご、ごめんなさい。猫だけは…」
泣きそうにリュシエンヌはベレニスを見る。
「わかったから、そしてあなたは落ち着いたら部屋に戻りなさい」
ベレニスの通常では考えられないほど優しい声が響く。リュシエンヌは、それに少し安心したように頷いた。
「ありがとう」
ベレニスが、その場から動かない猫の所に行こうとした時。

突如現れた青いマントによって猫は、ベレニスの視界から隠された。

第2話　苦手なもの（後書き）

誰にでも苦手なものってありますよね。

第3話　現れたその人

「リュ…リュファス・ブランヴィル様」
珍しく取り乱したベレニスの声を聞いたせいか、それともその名前に反応したのか、リュシエンヌの身体がピクリと揺れた。

そのリュファス・ブランヴィルという男は、リュシエンヌが王宮で働くきっかけとなった爽やか副団長の直属の上司に当たる。つまり、騎士団を束ねる騎士団長というわけである。
リュファスは緊急時や定期集会以外には、王宮へは滅多に参上しないので、この場所に何故彼がいるのかは、一介のメイドである二人にはわからない。

「何をしている」
低いが、よく通る声。深紅の髪の間から覗く、極寒の川のように冷たく澄んだ水色の瞳に射抜かれ、ベレニスは、しどろもどろになる。
「い、いえ。猫を」
リュファスは後ろにいた猫を振り返ると頷く。そして、その愛らしい猫の首根っこを掴み、何故か、マントの下に入れる。

何故に!?

ベレニスの心の声はかろうじて口から飛び出ることはなかった。
にゃん、と鳴き声がしたが、マントに隠れて子猫は二人からは見えない。
猫が見えなくなって少し落ち着いたのか、リュシエンヌはリュファスの方を向いた。
その時、リュシエンヌの茶色い瞳とリュファスの水色の瞳が交差

した。
リュシエンヌは怯えた表情になり、すぐにリュファスから視線をそらし、下を向く。そんなリュシエンヌを見つめていたリュファスであったが、その姿に眉を寄せる。
「怪我をしている、手当を」
その言葉にリュシエンヌは、自分の手を見る。猫に驚きその場に手をつきうずくまったせいか、割れた壺の破片で手から流血してしまっている。
リュファスは、変な表情で固まっているベレニスを一瞥する。そして、ゆっくりと言い聞かせるように言う。
「手当を」
「っ…はい」
我に返ったベレニスはリュシエンヌの所に駆け寄り、ハンカチで手を覆う。

。・@。・@。・@。・@・。

とりあえず応急手当てを終え、次に二人が気づいた時、リュファスと子猫の姿はそこにはなかった。
リュファスが去り、ベレニスはほっと息をつく。
「こ、怖かったわ。まさかリュファス様がいらっしゃるなんて。めったに王宮にはいらっしゃらないのに。あの方妙に威圧感があるのよね」
「本当ね」
未だに落ち込んだ声をするリュシエンヌをベレニスは心配そうに見る。
「どうしたの？　もう猫はいないわよ。リュファス様が連れて行ってくれたじゃない。なんで連れて行ったのかわからないけど。…

…リュファス様と子猫…似合わな！」
リュシエンヌが何も返事をしないので完全にベレニスの独り言になってしまっている。
返事しなさいよ、と思いリュシエンヌを見ると、顔をしかめている。

「あなた本当にどうしたの？」
「…ううん、なんでもないよ。そうだ！片付けしなきゃね」
猫やあの方もいなくなったことだし、と気を取り直してリュシエンヌは顔を笑顔になり、ガッツポーズを作る。
とたんに手に激痛が走った。
「はうあっ！！」
勢いよく両手を前に出して小刻みに震わせる。そんなリュシエンヌをベレニスは呆れたように見た。
「あんた、何やってるのよ。怪我してるのに手を握るなんて」
リュシエンヌの瞳には大粒の涙がたまっており今にもこぼれてきそうだった。そんなリュシエンヌを見てベレニスはため息をつく。
「ベレニス。いーたーいー」
「当たり前」
ぺしりと額を叩かれる。
「おでこも痛い」
「そんなに強く叩いてないわよ。嘘言わないで」
リュシエンヌは、おでこをスリスリとさすった。
「うん、もう痛くない！　ベレニス早く片付けよう。もうそろそろアレクシア様のお食事の時間だよ」
はっとしたようにベレニスはリュシエンヌを見た。
「そうじゃない、用意をしなきゃ！　リュシエンヌ、あなたは医務室に行ってちゃんと治療してきなさい」
「いいよ、大丈夫。それより片付けするから、ベレニスは食事の準備を…」

そう言ってベレニスを見たリュシエンヌは最後まで言えずに、冷や汗を流しながら後ずさった。そんなリュシエンヌを見つめるというか睨みつけるベレニスの顔はとても恐ろしかった。

「私は、あんたがいたら邪魔だって言っているの」

「べ…」

「口答えしない！　手の使えない役立たずは、手を治すことに努めなさい！」

あまりの剣幕にリュシエンヌは驚き、何も言えず口をぱくぱくと動かすだけだった。ベレニスは手を振り払う仕草をする。

「行きなさい！」

「はい！　行ってきます」

リュシエンヌは敬礼のポーズをとり、素早く方向転換して、その場から逃げだし…もとい医務室に治療してもらいに行った。

うん、心配して言ってくれているんだ。多分。

そう思いつつも、ほんのちょっぴりへこみながらリュシエンヌは走った。途中に置いてあったバケツをひっくり返しながら。

第3話　現れたその人（後書き）

何かあまり、リュシエンヌのポジティブさが、表現できていないですね；；
登場しました、リュファス騎士団長です。
とても無愛想な人っぽくなりました（笑）

第4話　わからない

何でこんなことになっているんだろう？

王宮の一角、木々が背高く伸び、草が青々と茂る庭にリュシエンヌはいた。

汗をだらだらと流しながらリュシエンヌは対峙している男を見る。ほんとはあまり見たくはないのだが、下を向いているのも失礼だろう。

リュファスはリュシエンヌの手を取り、その手の平を凝視している。

こ、怖い。

リュファスはじっとリュシエンヌの手を見ており、リュシエンヌの方には気がいっていないようだった。だからわからないだろう。リュシエンヌがこの世の終わりのような絶望的な顔をしていることなど。

手を取られたせいで、リュシエンヌは逃げることもかなわない。ここはあまり人の訪れない庭だが、もしも他のメイドに見つかったら血祭りにされてしまうだろう。それほどリュファスは人気なのである。

それに、アレクシアから仕事も任されており、本当は一刻も早く、この場から去ってしまいたかった。それ以上にリュシエンヌ個人的にリュファスの傍から離れたかった。

実は、リュシエンヌは、リュファスのことがとても苦手だった。

性格が苦手なわけではない。一介のメイドであるリュシエンヌが性格を苦手と思うほど、騎士団長であるリュファスと話す機会などそうそうないものだ。
ただ、リュファスの存在自体がリュシエンヌに違和感を持たせる。
リュファスを見ると頭が痛くなったり、息苦しくなったりする。
そんな理由でリュシエンヌはリュファスを初めて見たときからずっと避けていた。

そのリュファスが今リュシエンヌの目の前で、リュシエンヌの怪我の具合を見ている。
リュシエンヌにしては訳の分からない展開である。
「だいぶ傷は塞がったな。まだ痛いか？」
「いいいいえ、だだだ大丈夫ですから」

どどどどうか、その手を離してください。

そんなリュシエンヌの悲痛な心の叫びも届かず、傷の具合を見聞した後もリュファスはリュシエンヌの手を離さなかった。
何故にこんなに近いのか。
そうしている間にも先ほどから断続的に続いている頭痛はリュシエンヌを苦しめる。
その頭痛がだんだんと酷くなってきており、リュシエンヌは顔をしかめる。
「リュシエンヌ」
何故リュファスがリュシエンヌの名を呼ぶのか、それを考える余裕が今のリュシエンヌにはなかった。どんどん頭痛がひどくなり頭が割れそうである。

助けて、兄さま、聖騎士様！！

リュシエンヌはわけのわからない感覚に捕らわれた。兄さま？リュシエンヌには誰のことを言っているのかわからなかった。聖騎士様？目の前にリュファスがいるからだろうか。
オージュ王国の国宝『光の剣』に選ばれた者は『聖騎士』『聖なる騎士』などと呼ばれ国民からあがめられる。

『聖なる騎士』は闇を払い、魔族を滅すし、世界を光に包み込む。
『光の剣』は大国オージュのみに伝わる伝説の剣。それは自らの所有者を選び、力を与える。

その生きる伝説と呼ばれる男が今目の前にいる、５００年ぶりに選ばれた闇を払う聖なる者。騎士団長という肩書を兼任し、『光の剣』を扱う『聖なる騎士』という肩書から時には国王よりも権力を持つと云われる男、リュファス。
頭が痛い。
リュファスが嫌いなわけではない。ただリュシエンヌは『聖なる騎士』という言葉に激しい拒否反応を起こしていた。

違うの、あんなこと言ってても信じてたの。兄さまが…

兄さまが何？兄さまって誰？痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。
リュシエンヌは頭を抱える。通常とは比べられないほどの強い痛みにリュシエンヌは意識を手放しそうになった。
「リュシエンヌ！」
しかし、凛とした声によって意識は引き戻される。目を開けたそのすぐ近くには整った顔。サラサラとした深紅の髪が頬にあたり少しこそばゆい。
「ぶ…ブランヴィル様」
そこで初めて抱きしめられているような格好ということに気付い

た。リュシエンヌは痛みに気を取られながらもその体勢に慌てる。
リュファスはそんなリュシエンヌの様子も気にせず、額に手を添える。
「あっあの」
「静かに。頭が痛いのだろう？待っていろ」
混乱するリュシエンヌを黙らせ、リュファスは目を閉じる。
氷の瞳が隠れ、それと同時にリュシエンヌの中に何かが流れ来るような感覚。
とても温かかった。

リュファスが手を離すと、リュシエンヌを先ほどから悩ませていた頭痛は綺麗さっぱり消え去ってしまった。
「えっ…」
「治っただろう」
驚くリュシエンヌに落ち着いた声でリュファスは言う。
そういえばベレニスから聞いたことがあった。『聖なる騎士』は身体からほとばしる光で生物を癒す力を持つということを。嘘か本当かはわからないが。
「本当…です。ありがとうございます。ご迷惑をおかけしました」
未だに信じられないが、リュシエンヌはリュファスに頭を下げる。
「…仕方ないことだからな。また痛くなったら俺の所に来ればいい。大抵訓練場にいる」
リュシエンヌがその言葉に反応し、頭を上げると、リュファスはすでにリュシエンヌに背を向けていた。
「ありがとうございます！」
リュシエンヌは改めて礼を言った。聞こえているはずだがリュファスは振り返らなかった。

そのリュファスの背中を見てリュシエンヌは思った。

不思議な人……でも、いい人なんだろうな。

今まで『聖なる騎士』や頭痛といった理由で避けていた人だったが、今日のことで少し親しみが湧いた。

何故リュファスはリュシエンヌの頭痛のことを知っていたのか、ここまでしてくれるのか。そして、痛みに悶えていたときに浮かんだ『兄さま』の存在、自分には兄がいるのだろうか。多くの疑問も浮かんできた。

第４話　わからない（後書き）

何か展開が急すぎるような気もしますが…まあまあ。自分でもリュファスという男の性格がよく掴めませんね。うーん、小説って難しい…

第5話　王女

「で？」
「いえ、あの、そのぅ…」
鋭い眼差しを向けられ、リュシエンヌの語尾はどんどんしぼんでいく。
「リュファス団長に頭痛を治してもらって、私の頼んだ用事を忘れてのこのこと帰ってきたわけね」
あ、アレクシア様ぁ…ううう後ろに大量の蛇が見えます……あれっ髪の毛ですか？！それは！
「ふふ、おかげで焼きたてだったケーキが冷めてしまったわ」
はたから見れば優美な笑みだが、その笑みを向けられているリュシエンヌにはたまったものではない。凍えてしまいそうな冷たい笑みだった。
「この役立たず」
「すみませんでした」
リュシエンヌにしては素晴らしく俊敏な動きで土下座をする。土下座するリュシエンヌを見下ろすアレクシアの青い瞳は、冷たい。
しかし、ふぅとため息をつき苦笑した。
「まあ、いいわ。大したことじゃなかったし」
「アレクシア様」
がばっと顔を上げ感動にうるうると瞳を潤ませるリュシエンヌにアレクシアは笑顔で断罪の言葉を吐いた。
「罰としてお尻叩き１００回ね」
「どえええええええええっ」

後ろに控えていたベレニスはいつの間にか大きな扇のような物を持っている。その顔は心なしか笑いをこらえているようにも見える。
「もう少し他の罰があったんじゃないですか？！」
「あなたにはこれが最適だと気付いたのよ」
アレクシアはにっこりと笑う。
「掃除を任せても周りの物が壊れるのがおちだし。５時間耐久で正座させてもそんなに面白くないのよ」

面白くないって、この鬼畜！

そんなことは思っていても言葉には出せない。
「この特製のお尻叩きであなたのお尻を叩いてあげるわ。…とてもいい顔をするのでしょうね」
うっとりとした表情でアレクシアはリュシエンヌを見る。
「あわ、あわわわわわわわわっ」
リュシエンヌはお尻を擦らせながら後ろに後ずさる。はたから見ると実に無様な動作である。
「さ、覚悟なさい。ベレニス」
ベレニスが巨大な扇を構えながら、リュシエンヌの前に歩み寄る。アレクシア同様ベレニスも良い顔をしている。
「ベレニス！助けてぇ」
「情けないわよ。覚悟を決めなさい。基はと言えば、あんたがアレクシア様のお菓子を取りに行かなかったのが悪い」
「でも！痛いじゃない！そんなのでお尻を叩かれたら」
リュシエンヌが言うとベレニスが何を言っているのかという顔をした。
「それが罰じゃないの」
それはそうですけどね！

リュシエンヌはちらりと扇を見る。
巨大扇は柔らかそうな羽根などついておらず、堅い板で出来ており、ちょっとやそっとのことでは折れそうにない。持ち運びが出来るように従来の扇の様に折りたためる。まるでそれ用にしつらえたかの様な造りである。
「扇を広げたときに出来る隙間と板に空いている小さな丸い穴によって風圧を緩和させ、いい音をさせることができるのよ。いいでしょう？」
アレクシアが喜々として説明しているのをリュシエンヌはただ震えながら聞いている。
「ねえ、リュシエンヌ」
恐ろしく妖艶な表情でリュシエンヌに問いかける。
「痛そうでしょう」
その表情を見たベレニスは少し頬をひきつらせる。リュシエンヌにいたっては恐怖で声も出ない。

アレクシアの自室は異様な雰囲気に包まれていた。
リュシエンヌは壁際に座り込みべそべそとしており、ベレニスもアレクシアの発する空気に呑まれていた。
しばらくリュシエンヌを見つめていたアレクシアだが、ふっと短いため息をついて微笑んだ。

「しょうがない子ね」
とたんにその場の雰囲気は、一瞬で軽くなった。
リュシエンヌは恐る恐るアレクシアを見る。アレクシアはうなずいて見せた。
「今日はしないでいてあげるわ」
今日は？

リュシエンヌとベレニスの疑問が重なる。
「その代わりに、聞きたいことがあるのよ」
アレクシアがリュシエンヌの前に立つ。座ったままのリュシエンヌからは、アレクシアの着るシルクのドレスの裾が目に入った。
「あの男とのことよ」

第5話　王女（後書き）

王女アレクシア登場です。少しベレニスと性格が似ていますね。でもアレクシアの方がベレニスの数倍ドＳです。

第6話　かしましい

リュシエンヌが先ほどのことを話し終わった後アレクシアを見ると少し変な顔をして目の前の紅茶のカップを見つめていた。ついでに言うとベレニスとアレクシアは高級紅茶とケーキでリュシエンヌは水と角砂糖一個である。

「リュファス団長がねぇ。まあ、リュシエンヌだものね…でもイメージがねぇ」

ぶつぶつと独り言を言うアレクシア。

リュシエンヌはリュファスとの出来事を思い出しているのだろうか、遠い目になっている。そこまで昔のことでもないのだが。

「いい人だと思います。私の頭痛を治してくれましたし…すごい力ですね」

リュシエンヌが興奮しながらそう言うとアレクシアは厳しい表情で言った。

「訂正しておくわね。光の剣を持ったからって、治癒の力が使えるようになるわけではないわ。そこまで万能じゃないの」

「えっじゃあもともとの」

「私は、リュファス団長がそんな力を持っているなんて聞いたことはないわ。そういうことは安易に考えてはいけないわよ、危険だから」

そう言ってカップをテーブルに置く。リュシエンヌは訳が分からないという顔をしている。

「どういうことでしょう？私よく頭痛を起こすんですけど、ブランヴィル様に触れられたら一瞬で治ってしまったんですよ。すごく

ないですか？」
リュシエンヌの砕けた言い方に、ベレニスがリュシエンヌのわき腹を小突き無言の抗議をする。それには気にせずアレクシアは困った顔をして首を振る。

「それは、ねぇ…」

「あっでも、ブランヴィル様を見ると頭痛を引き起こすから、ブランヴィル様に原因はあるようなないような」
ぼそりと言うリュシエンヌにベレニスは鋭い眼差しを向ける。
「ちょっとリュファス様に責任転嫁するんじゃないの」
アレクシアが身を乗り出す。
「リュファス団長を見ると頭痛？」
興奮した様子を見せるアレクシアにベレニスが答える。
「ええ、そうみたいですわ。だから、リュシエンヌはリュファス様をずっと避けてましたの。この前までは」
「そうだったの」
アレクシアが顎に手を添え考え込むような動作をする。

「思い出すことを拒否しているのかしら…でもまさか…ああ、彼のこともあるし…うん…」

アレクシアは独りで考え納得している様子だが、他の二人には何のことだかわからない。ただ首をかしげるのみである。
「アレクシア様？」
アレクシアはリュシエンヌを見る。どことなくアレクシアの秀麗な眉が下がっているような気がした。いつも強気なアレクシアの意外な姿を見れたと、リュシエンヌは少し得した気持ちになる。

「リュシエンヌ、あなたの頭痛は病気ではないのよ…」

突如発せられた言葉にリュシエンヌだけでなくベレニスも首をひねった。

「え？じゃあ何なんでしょう。記憶喪失の後遺症とか？」

「アレクシア様、私にはよくわかりません。この子は頻繁に頭痛に悩まされていますが、それが病気ではないのなら何というのでしょうか？」

空気に沈黙が走った。

「記憶喪失の後遺症…それに近いかもしれないわね。リュファス団長だけが鎮めることができることは言っておくけど、それ以外は何も言えないわ」

そして真剣な顔でリュシエンヌを見る。

「リュシエンヌ、聞いて。あなたの立場は自分で思っているよりもずっと複雑なのよ。国の中でも、世界でも。とても不安定ですぐに崩れてしまいそうな…そんな」

リュシエンヌは怪訝そうな顔をしてアレクシアを見る。

「私には何を言ってるのか、さっぱりわかりません」

「今は分からなくてもいいの。きっとこれから嫌というほど身に降りかかってくるかもしれないのだから」

ただ、と呟いてアレクシアはリュシエンヌを見た。

「リュファス団長は、リュシエンヌのことをとても大切に思っているということは覚えておいて」

第6話　かしましい（後書き）

アレクシアは何か知っているみたいです。まあ、一国の王女なので何かしらの情報は入ってくるでしょう。自身でも調べていそうな気がしますが。

第7話　副団長現る

「私と、ブランヴィル様は知り合いだったのですか」
リュシエンヌは表情を驚愕に染めアレクシアに問うた。アレクシアは答えずにっこりと笑って紅茶をすする。
「それは、リュファス団長本人に聞いた方がいいのじゃなくて？」
リュシエンヌは眉を寄せ考え込む。
あの人と私が？どこに接点があるんだろう？
そんなリュシエンヌをアレクシアは楽しそうに見つめる。そんなアレクシアをベレニスは不安そうに見つめた。

。・@。・@。・@。・@。・@・。

「何故ここにいる？」
「私のことはお気になさらず」
リュシエンヌが首を横に振りながら言う。そんなリュシエンヌをリュファスは微妙な顔をして見た。
今リュシエンヌがいるのは騎士たちの訓練場で、周りにはリュファスの部下が大勢いる。むさ苦しい男たちの中でただ一人女性であ

るリュシエンヌが混じっているのは傍から見ればとても奇異な光景に映るだろう。
現に周りの多くの騎士たちは稽古よりもリュシエンヌを見る方に集中している。

リュシエンヌはアレクシアが言っていたことが気になりここに来た。
アレクシアの話しぶりをみるとリュファスはリュシエンヌについて何かを知っている。とても重要なことを。そして、何故かアレクシアも知っている。しかし、アレクシアは絶対にリュシエンヌに話はしないだろう。きっと聞いたとして笑顔ではぐらかすのだろう。

だから、リュファスに聞くことにしたのだ。

リュファスに近づくと頭痛が起こる隔間が途端に短くなる。これは記憶を思い出そうとしているせいなのだろうか。
現に今も前頭部がうずくリュシエンヌであるが、そこは気力である。

記憶を取り戻したい。彼と親しくなれば記憶の手がかりになるかもしれない。

そしてリュシエンヌは、リュファスが苦手という気持ちも克服したいと思ったのだ。
必死な表情で見つめてくるリュシエンヌにリュファスはため息をつく。
「とりあえず、来い。ここは目立つ」

引っ張ってこられた先は訓練場から少し離れた部屋の片隅である。
「…どうした。また頭痛か？」
「いいえ、ブランヴィル様。今日はブランヴィル様の観察です」
言わないつもりだったがリュシエンヌの口は馬鹿正直に目的を話してしまった。少し焦りながらリュファスを見ると、彼は目を見開いてリュシエンヌを見つめていた。

「それは何故」
「いえ、ブランヴィル様と私って知り合いだったのかなと思って。よければお聞かせ願いたいなぁ、あはははは…」
変に誤魔化してもリュファスは騙されないだろうと思いリュシエンヌは本当のことを話した。そして理由を聞けばリュファスも協力してくれるかもしれないと期待したからだ。
しかし、リュファスは複雑そうな顔をしてリュシエンヌを見るだけである。気まずい沈黙が流れる。

リュファスが沈黙を破り口を開こうとしたとき、爽やかな声が二人の間に割り込んできた。

「あれ？君は…」
リュシエンヌが声のした方を見ると見るからに人の良さそうな好青年がいた。リュシエンヌにはその青年に見覚えがあった。
「あなたは…」
青年はリュシエンヌの方を見てにっこりと笑った。むさ苦しい訓練場に似合わない爽やかな青年である。
その青年にリュファスは無愛想に問いかける。
「どうしてお前がここに来るんだ。あいつらの指導をしていたんじゃないのか？」
「いやね、君がいたいけな少女を部屋に連れ込んだって聞いたから驚いてね……まさか彼女だったとは、想像もつかなかった」

わざとらしく言う青年にリュファスは眉間にしわを寄せる。

リュシエンヌにはその青年に見覚えがあった。

うっすらと笑みを浮かべ、底の知れない空気を発しているその青年は身よりのないリュシエンヌをこの城に連れてきた副団長その人だった。

「こんにちは、リュシエンヌちゃん」

「リュシエンヌ…ちゃん」

「あの時はちゃんと挨拶できなかったからね」

青年はリュシエンヌの方を向き恭しく礼をした。

「私は王宮騎士団副隊長を務めるアベル・シンクレアと申します。改めてよろしくお願いします」

「シンクレア…様」

「そんなに畏まらなくていいよ。アベルと呼んで」

アベルの砕けた言い方にリュシエンヌはなんとなく調子が狂う。

「あっ…はい、アベル様」

その言葉にリュファスがピクリと反応したのをリュシエンヌは気が付かなかった。しかし、それに気付いたアベルは楽しそうに笑う。

「どうしたんですか？」

その様子を見てリュシエンヌが不思議そうに首を傾げる。

「何でもないよ。ね、リュファス」

リュファスはアベルの言葉に答えずため息をついた。

「いやぁ、お堅い団長様に女の子が訪ねて来たって、皆浮足立っちゃって訓練にならないから解散させちゃったよ」

リュファスは深くため息をつく。

「アベル…お前は勝手に」

リュファスの様子を気にせずアベルは笑う。

「まあ、いいじゃないか。いつも誰かさんに拷問のような訓練を受けているんだから、たまには早く帰らせてあげても、ね？」
「まったく」
あっけらかんと言うアベルにリュファスは怒る気配もなく、仕方なさそうに苦笑する。

あっ笑った。

苦笑とは言えど初めて見るリュファスの笑みにリュシエンヌはくぎ付けになった。出会って少しの時間しかたっていないが、リュシエンヌはリュファスが眉間にしわを寄せ、ため息をついている姿しか見たことがなかったからだ。

ところが、今見ているリュファスの笑みはとても温かかった。人を許し、包み込むような優しい表情。

リュシエンヌはアベルと親しそうに話すその姿に寂しさを覚え、同時に懐かしい気持ちにもなった。

第7話　副団長現る（後書き）

もう全然進まないし、リュファスも何を考えているやら…
この話の進まなさにいらいらしますね。
というかちゃんと書け私。

第8話　恐ろしい提案

「リュシエンヌ、どうした」
かけられた声にはっとなり、リュシエンヌは目の前のリュファスを見た。
どうやら、リュファスとアベルのやり取りを見ながらぼーっとしてしまったらしい。
リュシエンヌは慌てて首を振る。
「いえ、何でも」
「そうか」

あ、戻っちゃった。

リュファスの表情はアベルと話す時の柔らかい表情ではなく、いつものようむっつりとした表情に戻ってしまっていた。
リュシエンヌはそれがひどく残念に思った。

あれ？何で残念だって思ったんだろ。

自分の思考にうーむと首を傾げる。そんなリュシエンヌにリュファスは奇異なものを見るかのような眼差しを向ける。
「本当にどうした」
くねくねと首を左右に捻っていたリュシエンヌは、その声に反応しリュファスを見上げる。
リュシエンヌのまっすぐな視線にたじろいだリュファスだったが、ふっと眼を細める。そして、紺色の髪に優しい動作で触れる。
リュシエンヌはじっとリュファスを見つめる。一見すると無表情

に見えなくないリュシエンヌだが、心の方は荒れ狂っていた。
手手手！何やっちゃってるんですか？！しかも、動作が自然すぎるぞぉ！！ブランヴィル様！
しかし、心の中では好きなことを言えても実際は口には出来ず、リュシエンヌはリュファスの好きにさせていた。
傍から見ると二人の世界を作っているようにも見える。例え本人たちがそうでなかろうと。
突如咳ばらいの音が響いた。二人の意識はそちらに向く。
見るとわざとらしく口に手を当てているアベルがいた。リュシエンヌは完全に忘れていたがアベルもそこにいたのだ。
「どうした」
リュファスが尋ねる。
「どうしたって…ねぇ」
引きつった顔をしながらアベルは二人を見つめる。
「疎外感を覚えるんだよ」
訳が分からないという風な顔をした二人にアベルはやってられないな、と言いため息を吐き、そして、呆れ笑った。
しばらく面白そうな視線をリュシエンヌとリュファスに向けていたアベルは何かを思いついたように手をたたき、そして二人に意味深な顔を向ける。
「いいこと思いついた。ふたり、今日は出かけてきたらどうだい？」
唐突なアベルの提案に二人は、訳も分からず目の前の男を見つめる。

「どういうことだ」
「リュシエンヌちゃんはさ、城に来てから一回も外出していないだろうし、たまには外出したいだろう。リュファス、お前はいつも仕事しかしてないんだから息抜きは必要だと思うよ」
アベルは言葉を続ける。
「それに二人とも、一度はしっかり会話した方がいいと思うよ。リュシエンヌちゃんも安定してきたことだし」
アベルの言葉の意味を分からず、リュシエンヌはえ、と声を出す。リュファスはアベルを睨み付ける。
「アベル」
「悪い」
明らかに上辺だけの謝罪にリュファスは今日何度目かのため息をついた。

「でも、本当に息抜きは必要なんだよ。お前も…リュシエンヌちゃんも。少ししか時間はないけれど、その時間は必要だと思う」
アベルのその言葉に短く唸ったリュファスが納得しかけているのを横にいるリュシエンヌは気づいた。
「だが、俺がいなければ」
リュファスが眉を寄せて言おうとした言葉をアベルは遮る。
「少しくらい大丈夫だろう。あいつらは緊急の事態に対応できないほど柔じゃないし、それに何のために俺がいるのさ、ね？」
「……そうか」
たっぷりと時間をおいた後リュファスは短く返事をした。
戸惑いながらも納得したようにリュファスが返事をしたとき、アベルが口の端を上げたのをリュシエンヌは見てしまった。
リュファスも納得し、決まってしまいそうな雰囲気にリュシエンヌは慌てて口を挟む。
「すみません、私も仕事はあるんですけど」
アベルは何てこともないような顔をして言う。

「アレクシア様には俺から言っておくよ」

ちょっとー！アベル様、何血迷ったことを言っちゃってるんですか！

リュシエンヌの心の悲痛な叫び声はアベルに聞こえはしない。

「だが、お前何を考えている」

リュファスが鋭い眼差しをアベルに向けた。それを平然と受け止めアベルは笑みを浮かべる。

「お前の幸せについてだよ。リュファス」

尚も不審げな顔をするリュファスに爽やかな笑みを返した。それを見てリュファスはため息をついた。

「違うだろう、アベル。お前はそういうことを思いはしない」

リュファスが言い返すとアベルは一瞬驚いた顔をし、次にやれやれといった風に肩をすくめた。そして、薄笑いを浮かべる。

リュシエンヌには得体の知れないその表情がとても不気味に思えた。と同時にアベルに対して一抹の不安を覚えた。

アベルは二人に背を向けた。ひらひらと手を振りながら小さな声で言った。

「俺は常に国のことを考えて行動している」

第9話　城下での別れ

リュシエンヌは呆然としながら街を歩いていた。隣にはむっつりとした表情で押し黙るリュファスが歩いている。
騎士の服装ではなく普段の堅苦しさはないが、それでも発せられる威圧感はリュシエンヌを圧倒してやまない。

これはいったいどんな状況？

確かアベルが二人で出掛けてこいと言ったところまでは覚えている。そして、気付くとすでに城下街に出ていた。
ちらりと横のリュファスを見上げる。相変わらずのこの顔である。
へこんでいてもどうしようもないので、リュシエンヌは笑顔でリュファスに話しかけた。

「な、何か買い物とかあります？ブランヴィル様」
「いや、ない」
「賑やかですね」
「そうだな」
「アベル様、ちゃんとアレクシア様に説明してくれたんでしょうか？」
「しただろう」
「ベレニスにお土産とか買っていったら喜びますかね？」
「買っていけばいい」
「…空が青いですねぇ」
「ああ」
「……」
「……」

か…会話が続かない。

あまりの会話の続かなさにさすがのリュシエンヌもへこたれてきたところだった。

しょげたように俯くが、すぐに顔を上げる。周りには香ばしい匂いが漂っている。リュシエンヌは気付いていなかったがすでに昼時である。

リュシエンヌはリュファスに尋ねた。

「お腹すかないですか？」

「…すいたのか？」

初めて疑問形で返ってきた言葉にリュシエンヌは驚き、そして喜んだ。

続いた！

「そうですね、ちょっと腹ごしらえした方がいいと思うんですよ」

いつもの調子を取り戻してきたリュシエンヌは胸をはって言う。

「お城に上がる前まで城下に住んでいたので結構詳しいんですよ」

任せてください、とどんと胸を叩いたリュシエンヌにリュファスは表情を和らげて目の前の少女を見つめる。もっともリュシエンヌはリュファスの変化など気付いてはいないが。

何かを探すようにリュシエンヌはきょろきょろと周りを見回す。

「このあたりは確か…あっ」

リュシエンヌは小走りで店の方に駆けていく。

「ブランヴィル様っ！この店はどうですか？ここのヘモ鳥の照り焼きは本当においしいんですよ」

店の方を指さし、リュファスの方を向く。リュシエンヌの方を見たリュファスは軽く目を見開く。

「リュシエンヌっ」
名を呼ばれた次の瞬間、身体に衝撃を受けて吹き飛ばされる。思わず目を閉じたリュシエンヌだが、地面に激突することはなかった。軽い衝撃と共に暖かな温もりに包まれた。
恐る恐る目を開け、自分がリュファスに抱き込まれていることに気付き、リュシエンヌはピシリと固まる。

「お嬢ちゃん大丈夫か？悪かったな」
声をかけられ顔を上げると見知った顔がそこにあった。
「ギュイおじさん！」
相手もリュシエンヌに気付き驚いた顔をする。

「いやーリュシエンヌに会うとは思わなかったな。お前が働きに出て以来だな。元気にしてるか？どうせ城でも物壊したりして怒られてるんだろ」
うぐ、とリュシエンヌが変な声をして黙り込む。それを見てギュイは声を出して笑った。
大通りで話していると邪魔なので、三人は大通りから少し離れた人気のない道に場所を移した。
「それはそうと、リュシエンヌお前、ずいぶんな色男を連れてるな」
ギュイが隣のリュファスに視線を向ける。
「おじさん、紹介するね。この方は、リュファ……」
リュシエンヌがリュファスを紹介しようとすると大きな手に口を塞がれた。
「リュシエンヌと同じ城の下働きをしているリオネルです」
口を塞がれながらもリュシエンヌは、剣を所持しているのに下働きと紹介しても大丈夫なのかと思ったが、よくよく周りを注意深く見ると多くの人間が剣を所持している。目の前のギュイも大きな剣

を装備している。
「そうかそうか、こいつはドジだが悪い奴じゃねぇんだ。どうか仲良くしてやってくれ」
リュファスは無言でうなづく。手から解放されたリュシエンヌはギュイの傍らに置いてある大きな荷物が気になった。
「おじさん、その荷物は？」
ギュイの表情が暗くなった。
「この国を出て行こうと思ってな」
リュシエンヌが目を瞠る。
「えっ…」
しばらく黙っていたが、胸の奥に溜まっていたものを吐き出すかのようにギュイは話し始める。
「アランが死んでな…魔物に殺されたんだ」
その言葉を聞いてリュシエンヌは驚愕した。
アランとは確か、ギュイの一人息子だったはずである。母親を早くに亡くしていたのでギュイが大層可愛がっていたのを覚えている。
「仕事でな、西の森の近くに行くことになったんだ。その時に限って、アランは俺の仕事している様子を見たいと言ってな。アランが滅多に言わないわがままだったから、つい俺も了承しちまったんだ…一瞬だったよ。気が付いたらアランは魔物に切り裂かれて、身体も持って行かれた」
拳を握りしめ壁に打ち付ける。

「この大陸は聖騎士様の力で守られているかと思ってたが、そうじゃないと思い知らされたよ」
ギュイの話を悲しそうに聞いていたリュシエンヌは、思わず隣のリュファスを見た。普段と同じ表情だが眉間に刻まれた皺は深い。
「いや、決して聖騎士様のせいじゃないんだ。聖騎士様は、ちゃんと守ってくれている。だが、その力の届かない所もあるってことだ」

ギュイは荷物を背負った。

「他の大陸に行くのは死にに行くようなもんだって分かってる。でもダメなんだ。この国で妻も子も失った。辛すぎていられない。だから俺は行く。リュシエンヌ、お前も達者でな。仲良くやれよ…」

リュシエンヌは、去っていくギュイに声をかけることが出来なかった。

第１０話　穏やかな一時

「ブランヴィル様…」
ギュイが去った後、リュシエンヌは躊躇いがちにギュイを見送っていたリュファスの後ろ姿へ声をかけた。
あのような話を聞いてしまい、その当事者であるリュファスをほっておける訳がなかった。
しかし、声をかけたのはいいが、その後に続く言葉が見つからず、リュシエンヌは黙ってしまった。
しばらくするとリュファスが一言言った。
「分かっている。聖なる騎士と名のついた男も万能ではない」
リュファスが振り向く。その瞳は揺れていた。

リュシエンヌはその姿に何も言えなくなり、口をつぐんだ。

食欲も失せてしまい、リュシエンヌらは賑やかな城下を無言で進む。帰ろうかとも思ったが、アベルが手を回してくれたのにこんなに早く帰るのはいささか体裁が悪い。リュシエンヌ自身は体裁を気にしているわけではないのだが。

リュシエンヌがぽつりと言った。
「ブランヴィル様のせいじゃないです」
リュファスの視線を感じたが、気にせずリュシエンヌは続けた。
「ギュイ叔父さんも言ってたじゃないですか。聖騎士様は悪くないって」
そして憎悪を込めた声で低く言った。
「悪いのは魔物。魔がいるから皆が悲しむ」
その語尾は微かに震えていた。

憎悪と恐怖がない交ぜになり、新しい感情を生み出す。リュシエンヌは何故こんなにも自分が魔物を恐れるのか分からなかった。ただ、魔物に対しては絶対に好意的に見ることが出来ない。

リュシエンヌがそう言うと、リュファスはその表情に微かな感情を込めながら返事をした。

「そうか」

しかし、リュシエンヌにその感情が何なのか掴むことは出来なかった。

リュシエンヌの口調も減り、二人の間に再び会話がなくなった。太陽の日差しは暖かく大地を照らすが、二人の周りは何故か寒々しい。

しばらく歩いているとリュシエンヌは足を止めリュファスに向き直った。

「ブランヴィル様、少し買い物していいですか？」

「ああ」

リュファスは怪訝そうな顔をしたが、すぐに了承した。

花屋に行き、小さな袋を持って出てきたリュシエンヌにリュファスは当然尋ねる。

「それは」

「アシテの花の種です…」

アシテの花は地中の少ない水分でも育つので水をやる必要もない。純白の花を咲かせる。

「これを、ギュイおじさんの息子さんの……西の森の入口にでも植えられればと…」

アシテの花言葉は「安らぎ」。肉体をも魔物に支配されたアランにせめて魂だけでも安らかな眠りを与えてあげてほしい。

いつか芽吹き、花を咲かせ、種が森に広がればいい、そうリュシエンヌは思った。魔物への恐怖で森の中に入れないリュシエンヌにできる精一杯の追悼である。

リュシエンヌの思いをくみ取ったのか、リュファスは優しく微笑み、リュシエンヌの頭を撫でる。

再び二人の間に暖かな空気が舞い戻った。

しかし、今、リュシエンヌは買い物をしていた。

横にいるリュファスが問いかける。

「後ででもいいと思うが」

「いいえ、私のインスピレーションが働いているうちに選んでおきたいんです！」

視界の隅でリュファスがため息をつくのが見えたがリュシエンヌは気にしなかった。

あの後、すぐに種をまきに行こうとしていたリュシエンヌだったが、雑貨屋の外に飾ってある熊の置物を見て、彼女の頭の中で何かが弾けた。

唐突にベレニスとアレクシアに土産を買わなければと思ったのであった。

そして今に至る。

「えーと、これはベレニスに…」
そして、ベレニスには水色のストールを買った。アレクシアには手作りの木の熊の置物を選んだリュシエンヌである。
アシテの種のことは忘れては…いない。
商品を買い、包装してもらっている間、リュシエンヌはあたりに視線をさまよわせる。
「あ」
視界に薄黄色のワンピースが入る。とても可愛らしかった。ラメがあしらっているらしく、光にあたると金色の光を帯びているようにも見える。
思わずリュシエンヌは自分の財布を見る…しかし、服が買える金額が入っていないのは一目瞭然だった。
ため息をついて店を出る。

外を出てリュファスがいないことに気付いた。周りを探すが見当たらない。
「ブランヴィル様？」
リュファス少し遅れて雑貨屋から出てきた。
驚くリュシエンヌに紙袋を差し出した。
それを受け取り、わけも分からずリュシエンヌは包みを開ける。
そして驚愕した。
リュシエンヌが一目惚れし、しかし金が足りず諦めたワンピースが入っていた。リュファスを見ると目を合わさずに一言、
「着ればいい」
言った。
遠慮よりも喜びでリュシエンヌの心はいっぱいになる。それほどリュシエンヌはこのワンピースが欲しかったのだ。

「ありがとう！リュー様」

リュファスが瞠目し、リュシエンヌを見る。言葉を発したリュシエンヌ自身も驚愕している。

「リュシエンヌ…お前」

「えっ？いや…あのっすみません！何か言葉が勝手にというかあまりに自然に出てくるものだから、私も自然に言ってしまって…つまり…えーと」

支離滅裂なことを言いながら弁解を試みるリュシエンヌにリュファスは目を細めた。

「いや、いい……お前に言われるのは…」

リュファスは何かを言いかけて、口を閉ざした。

そして、未だに混乱しているリュシエンヌに柔らかな笑顔を向けて言った。

「行こうか、種を撒きに」

歩いているときリュシエンヌは、リュファスの胸元から見えるペンダントに気付いた。青い石のついた何の変哲もないペンダントである。しかし、リュシエンヌには何故かそれが何故が気になった。

リュファスの深紅の髪とは反対色を持つ鮮やかな青い石、それがリュファスの胸元で異様な存在感を発している。

「ブランヴィル様…それは」

尋ねかけたリュシエンヌの背筋に悪寒が走る。

第１１話　深き森

リュファスの方を見るといつの間にか腰の剣に手をかけており、鋭い眼光を放っていた。

リュファスが視線を向ける先をリュシエンヌも見る。

森の手前に猫がごろりと横になっていた。漆黒の艶やかな毛並みをしている。

リュシエンヌは猫が苦手だが、何故か黒い猫にことさら拒否反応を起こしてしまう。突然の黒猫の出現にリュシエンヌは恐怖で身体を震わせる。

「リュシエンヌ」

リュファスがリュシエンヌを引き寄せ、守るように抱き込む。その温もりに少し震えは収まった。しかし、黒猫への恐怖は消えない。

リュシエンヌはリュファスを見た。その表情に驚いた。

恐ろしく険しい顔をして黒猫を見ている。

寝ていた黒猫はこちらのことなど気にした様子も見せず、あくびを一つし、森の中に消えていった。

黒猫が踵を返す瞬間その金色の瞳と目が合ったような気がした。

黒猫が消えてもリュシエンヌの震えは収まらない。さらに強く抱きしめられた。

突然甲高い鳴き声が響き渡った。

猫の方にばかり意識が向かっていて気付かなかったが、そこには黒い鳥がいた。最初はカラスかと思ったが、長い嘴の中には鋭い牙が生え、その丸い眼は濁った赤をしており、カラスにはあり得ない

外見を持っていた。
小柄な成人女性ほどの大きさで、その大きな足は幼い少女の肩を掴んでいた。
少女は気を失っており、鳥の魔物はさして苦労せずに少女を森の中へ引きずり込んでいく。

リュファスはリュシエンヌを離し、魔物を凝視した。
「あれは…」
剣を鞘から引き抜き、魔物を追って森の方へ駆けだす。
「ブランヴィル様！」
リュシエンヌは叫んだ。しかし、返って来たのは拒絶だった。
「来るな！帰ってろ」
来るなと言われても、リュシエンヌの足は地面に縫い付けられてしまったかのように動かない。
動かない足がもどかしく、動けない自分が憎らしい。

どんだけ弱虫なの！私は。

自分が情けなくて、涙が出そうだった。
森の前にいると、ざわざわと木々の不気味な囁きが聞こえてくる。
呆然と目の前の森を見る。森は今が昼間だということも忘れさせてしまうくらい、深い闇をその身に宿している。
その闇に呑まれれば二度と戻ってはこれないと錯覚させられる。
リュシエンヌはその中に自ら呑まれていったリュファスを思う。

あの人までいなくなったら、私は…

そう思ったリュシエンヌはわけも分からず駆けだした。
何故そう考えたのかは分からない。ただ、リュファスと離れてはいけない、失ってはいけない、そう思ったのだ。

絶対に入ることが出来ないと思っていた森へリュシエンヌは入った。がむしゃらにリュファスを追いかける。

無謀だと分かっていた。リュシエンヌが行っても足手まといだということも。

リュシエンヌの震えは止まらない。走る足も止まらない。もしかしたらあの魔物以外の魔物がいるかも知れない、しかし追いかけずにはいられなかった。

魔物を恐れる思いよりもリュファスを失う恐怖が勝ったのだ。

息を切らせながら、リュシエンヌは走る。道筋は魔物が少女を引きずった跡があったので辿るのは簡単だった。

しかし、いかんせん足が痛い。

こんなことならもう少し動きやすい靴を履いてくるのだったと後悔しながらリュシエンヌは全速力で走った。

着いた時リュファスはカラスと対峙していた。リュファスが切ったのだろう、カラスの足を肩に付けた小さな少女が芝の上に力なく倒れている。

「来るなと言ったというのに」

リュシエンヌの方を向かずにリュファスは言った。その視線は魔物だけを捉えている。

「すみません、でもブランヴィル様が心配だったんです」

もちろん少女も。

リュシエンヌは倒れている少女が巻き込まれてしまわないように、その小さな身体を抱え、木の下に移動させる。

魔物が威嚇するように鳴くがそれを遮るようにリュファスを持ち上げる。剣はまるで魔物を威嚇するように青白い光を放ち始める。

魔物の足を取ってやり、血の滲んだ肩にハンカチを当て、持っていたリボンでハンカチを固定するように巻く。
そして、再びリュシエンヌが振り向いたとき決着はついていた。

リュファスが黒い塊を引き裂く。
一介の魔物風情が王国の騎士の頂に鎮座する聖なる騎士に勝てるはずがなかった。耳をつんざく断末魔の叫びを残し、魔物は絶命した。
剣がそのまま魔物を浄化し、魔物の身体は気化する。
しかし、浄化を免れた一部は周りに飛散する。
グロテスクな破片がリュシエンヌの方に飛び散り足を汚した。

それを見て衝撃を受け、リュシエンヌの意識は急激に遠のいていった。やっぱり足手まといだったと後悔しながら。

第１１話　深き森（後書き）

２３日に誤字修正しました！
教えていただきありがとうございます。

第１２話　夕日が見ている

気付いた時、目に飛び込んできたのは見慣れない赤い天井だった。
誰の部屋かとリュシエンヌは思いぼんやりと考えていると、今までのことを思い出し慌てて飛び起きようとした。
しかし、身体は大きな手によって阻まれる。
「もう少し寝ていろ」
気付かなかったが、隣にはリュファスが座っていた。

見知らぬ部屋かと思ったが、それは沈みゆく陽の光によって赤く染まった自分の部屋であることを知った。
「すみません…気絶してしまって」
気まずそうにリュシエンヌは言った。自分のわがままでついて行ったのに、気絶し足手まといになってしまったので、かなり情けなく思っていた。
「いや」
リュファスは特に気にしていないように言った。
「あの女の子は」
「医者に連れて行った」
そうですか…とリュシエンヌは呟いた。

しばらく無言が続いたとき、リュシエンヌは静かに言った。
「いい加減教えてくれませんか？」
リュシエンヌは身体の上半身を起こしリュファスを見つめる。
尋ねられたリュファスは無言だった。そして、リュシエンヌの問

いかけている内容を分かっているように苦しそうに目を閉じた。
「私の記憶のことです」
念を押すようにリュシエンヌは言う。
「ああ」
しかしリュファスは、返事をしたきり口を閉ざしてしまった。
リュシエンヌも何も言わずリュファスが口を開くのを待った。

しばらくして、リュファスが言った。
「ずっと、言えなかった。お前が尋ねてこなければこれかも言うことはなかっただろう」
顔の前で両手を合わせため息をつく。

「確かに俺は記憶を失う前のお前も、そして、お前が記憶を失った原因も知っている」

リュシエンヌはリュファスの言葉に激しく動揺した。記憶を失う前の自分を知っているかも知れないと思っていたが、まさか自分が記憶を失った理由も知っているとは思わなかったからだ。
しかし、よくよく考えてみると、リュファスがリュシエンヌに近い人間ならば、記憶を失った理由を知っていてもおかしくないと思った。

今までのリュファスの態度を思いだしてみる。リュファスは確かに自分から言う気はなかったのだろうが、リュシエンヌに聞かれれば答える気でいたのだろう。そうしなければリュシエンヌの記憶のカギを持つ自分を決してリュシエンヌに近づけなかったはずである。
あのような親しい人間に対する態度などしなかったはずである。
「お前の昔を知っている。ただ、詳しいことは何も言えない…」

「私が記憶を失った理由も…ですか？」
無言でうなづいた。
「ただ、お前は自分が思っている以上に重要で、そして複雑な立場にいるんだ」
アレクシアにも言われた言葉である。ただその言葉だけを言われてもリュシエンヌには連想しようにもできない。リュシエンヌは首を傾げたが、リュファスはそれ以上言うつもりはないらしい。椅子に背をもたれかけさせる。

「じゃあ、私の過去を教えてはくれませんか？」
「それもあまり詳しいことは言えない」
リュシエンヌは落胆した。
自分は過去に、言えないようなことをしでかしてしまったのだろうか、と少しへこんだ。しかし、よくよく考えてみると本当にしでかしていそうで怖い。

リュファスの頑なな態度に困った顔をしていたリュシエンヌだが、ポツリと呟いた。
「でも、よかったです」
リュファスがリュシエンヌを不思議そうに見る。
「昔の私を知っていてくれている人がいて……私自身が覚えていなくても、それだけで私が存在していた証になりますから」
リュシエンヌは微笑んだ。
記憶がなくとも今を一生懸命生きればいいと思っていたが、やはり過去の自分を知っている人間がいるのは嬉しいことである。
驚いたようにリュファスがリュシエンヌを見る。
そして切なそうな顔をした。
「お前は…」
リュファスがベッドの上に腰かける。その重みでベッドがギシリ

と軋んだ。
リュファスの真剣な瞳とぶつかりリュシエンヌはドキリとする。
「昔から本当に強くて…真っ直ぐだった。だから俺はお前を…」
最後の方は声が小さくてあまり聞き取れなかった。
「アイツの分まで…俺が」
「ブランヴィル様？」
問いかけるとハッとしたような顔をし、そしてその端正な顔を歪ませた。

「名を…名を呼んでくれないか」
「え？ブランヴィル様…」
「…俺の名前を」
切ない顔での懇願にリュシエンヌは戸惑い、そして一言。

「リュファス様」

いきなり腕を強い力で引っ張られた。気付くとリュファスの腕の中に。驚いたリュシエンヌはリュファスの腕の中で縮こまる。

この人には驚かされてばっかりだ。

のんきにそう思いながら、しかし心臓は早鐘を打っている。
「ああ…リュシエンヌ、もっと呼んでくれ」
その声に愛しさを含んでいると思ったのは勘違いなのか。
「リュファス様」
噛みしめるようにその名を口にする。
リュファスはリュシエンヌの肩に顔を埋めた。
驚いてしばらく固まっていたリュシエンヌは、夕日の中でも赤い輝きを放つ深紅の髪を躊躇いがちに撫でた。まるで壊れ物を扱うかのように繊細に優しく。

やがて、ゆっくりと逞しい背に腕を伸ばした。

夕日が支配するその部屋の中で二人はしばらくの間、互いの温もりを感じていた。

第１３話　優雅に寛ぐ

リュシエンヌは朝起きていつものように支度をした。昨日のことがまるで夢の中の出来事のように思えた。
あの後リュシエンヌは眠ってしまったようで気付いたらリュファスの姿はなくなっていた。

今日もしリュファスと出会っても、普通の態度で接することが出来ないかもしれない。というか、リュシエンヌは、普段リュファスにどんな態度で接していたのかさえ分からなくなっていた。

しかし、自分の気持ちの変化に困惑しつつも、今日もいつも通りリュシエンヌは自分の真価を発揮していた。
皿をブーメランの如く飛ばし、かろうじて避けたものの皿の上に盛り付けてあったゾーブ牛のステーキが頬に直撃した女官長に、烈火の如く怒られた。

罰として昼飯を抜かれたリュシエンヌは、絶えず襲いくる空腹に耐えながら、アレクシアとの茶会を首を長くして待っていた。

ベレニスに呼ばれた時は、すぐさま準備をして転ばずにアレクシアの部屋に駆けて行ったリュシエンヌである。

ベレニスが優雅な動作でお茶を入れる。

その間、リュシエンヌはよだれを垂らしながら目の前のケーキを凝視している。
アレクシアはリュシエンヌが買ってきた土産の熊の置物を見て固まっていた。

紅茶をテーブルの上に置き、自分も椅子に座ったベレニスは眉をひそめてリュシエンヌを見る。
「あんたねえ、これを買う時アレクシア様に失礼だと思わなかったの？」
「何が？」
ベレニスが言葉に微かな怒りを乗せて言うが、それを気にした様子もなく、クリームがたっぷり乗ったケーキを頬張りながらリュシエンヌは聞く。
「熊…木彫りはないわよねえ。ぬいぐるみだったら可愛かったのに…なんだか妙にいかめしいわ」
アレクシアの手の中の置物を見てため息をつく。ベレニスの土産については何も触れないのでどうやら特に文句がないようである。
「あら？じゃあベレニスがもらったストールと交換してくれないかしら？とても可愛らしいわ」
「いえ、こんな安物のストールなんてアレクシア様には似合いませんわ。私が責任もって着用させていただきます」
王女であるアレクシアに対して笑顔で断るその姿も、ベレニスらしいとリュシエンヌは思った。
アレクシアはベレニスの答えを分かっていたかのようで、落胆した様子も見せず、頷いた。
「まあ、この熊の置物もストレス発散にちょうどいいから、ありがたくいただくわ」
言いながら熊の置物を手の中で弄ぶアレクシアに、二人は何も追求することが出来なかった。

「そういえば、最近、近隣諸国では魔物が頻繁に出没するらしいわ」
リュシエンヌのお茶をすする手が止まった。構わずアレクシアは続ける。
「どうしたのかしら…リュファス団長の力でこの国には近づけないはずなのに」
「どういうことなんでしょうね」

「西の森にも出現したらしいわね」

リュシエンヌの身体が硬直する。それを静かな瞳で見据えながらアレクシアは言葉を続ける。
「一介の魔物ではこの国周辺には近づくことが出来ず、近づいたとしても結界に阻まれて消滅するはずなのにね」
アレクシアはがちゃんと音を立ててカップを置いた。
「西の森は確かにリュファス団長の力の届きにくくて、城からもっとも遠い所にあるけれども…でも」
最後の方はアレクシアの独白のような形になっていった。
「もしかして」
「アレクシア様？」
心配そうにベレニスが話しかける。
「いえ、そんなはずはないわ」
首をふり、自分に言い聞かせるようにアレクシアは言う。
「まあ、心配にするにこしたことはないわ。ベレニス、リュシエンヌ、ひとりではあまり城下に出ないようにね」
あまりにもアレクシアが真剣に言うので、リュシエンヌもベレニスも二つ返事で了承した。

話している中でベレニスがふと思い出したかのようにリュシエンヌに言った。
「そう言えばリュシエンヌ、体調は大丈夫なの？昨日はずっと休みを取っていたようだけれど。ドアをノックしても返事がなかったから酷いのかと」
リュシエンヌの顔があからさまに歪む。
ベレニスの微かに心配したような声にリュシエンヌが答えられないでいると、アレクシアがコロコロと笑う。
「返事できるはずがないわよね。昨日はずっと城下にいたんですもの、リュファス団長と」
リュシエンヌはお茶を噴き出した。
「しかも帰りなんて寝ているリュシエンヌをリュファス団長が抱えて帰って来たのよ、とても大事そうに……その後長時間部屋で何してたことやら」

「え」

リュシエンヌとベレニスの声が重なる。しかし、その驚きは大きく違う。
ベレニスは、自身の知らないところでリュファスとリュシエンヌの仲が大きく進展していたことに驚き、リュシエンヌは何故アレクシアがそんな細かい所まで把握していることに驚いたのだ。

「信じられない…私の知らないところで」
呆然と呟くベレニスにアレクシアは微笑む。
「ベレニスもまだまだね。リュファス団長も見つからないように帰って来たつもりなんでしょうけども、この城の中で、人の目から逃れることは不可能よ」

不敵に笑みを浮かべるアレクシアにリュシエンヌ、ベレニスまでもが青くなる。
「大丈夫よ、昨日のことを知っている人間はごく一部だから。それに、このことが城内に知れ渡れば、あなた暗殺されるわよ」
さらりと恐ろしいことを言ってのけるアレクシアにリュシエンヌはさらに顔を青くする。
いくらリュシエンヌが能天気であろうとリュファスを慕う女性が多くいるのを知っている。その熱狂的ぶりを見ていると暗殺もあながち嘘ではないと思うリュシエンヌだった。

その後、ベレニスとアレクシアに昨日の出来事を根掘り葉掘り聞かれた。
リュシエンヌはしどろもどろになりながらも、大抵のことを話したが、昨日部屋で起こったことはさすがに言うことはなかった。

第１４話　不穏な会話

今日はリュファスを見ることはないだろうと安心して仕事をしていたリュシエンヌだったが、見つけてしまった。
リュファスとアベルがいた。彼らは話をしているようだった。

リュファス様はあんまり王宮に来ないんじゃなかったの？

リュシエンヌは、自分がリュファスと遭遇する確率の高さに嘆く。
二人の存在を見つけて動揺したリュシエンヌだったは、何故か慌てて壁に身を隠す。
嬉しいことに彼らはまだリュシエンヌの存在に気付いてはいないようだった。
これ幸いとさっさとその場から立ち去ろうとしたリュシエンヌだったが、足を止めてしまう。自分の名前を呼ばれたからである。

「お前は、この騎士団を率いる団長、そして、この国を魔から守ることができる聖騎士なんだ。自覚、しているだろう」
離れているので少し聞き取りにくかったが、それでもリュシエンヌは好奇心で必死でアベルの言葉を拾おうとする。
いつもとは違うアベルの声。その声色にはどことなくリュファスを責めるような色合いを含んでいるように感じた。

リュシエンヌの位置からはリュファスの後ろ姿しか見えないので、リュファスがどういう顔をしているのかは分からない。
内容は理解できない。しかし何故かリュシエンヌの胸にじんわりと切なさが広がる。

「魔物の力が増してきている」

その言葉ははっきりと聞き取ることができた。むしろ、耳にまとわりついてくるくらい、その声が耳に反響する。

「陛下も不安がられていらっしゃるんだ」

これは本当にアベルの声なのだろうか。いつもの穏やかな雰囲気はなく、緊迫している。

「魔族の出現も確認されている。これはお前の方がよく知っているはずだ」

「ああ」

「そして、犠牲も出ている」

リュシエンヌは思った、ギュイの息子アランのことを。

「分かっているだろう？もう、お前たちだけの問題じゃないんだ」

お前たちとはリュファスと誰だろうか。

「また5年前のようなことが起こるかもしれない」

リュファスは沈黙を守っている。しかしアベルの言葉は止まらない。

「あの惨事がまた…」

5年前、何が起きたのか、きっとリュシエンヌがわからないということは、リュシエンヌが記憶を失う前の出来事だろう。リュシエンヌはちょうど5年前に記憶を失ったから。

アベルの声は人気のない回廊に暗く響く。

もう少しはっきりと聞こうと思いリュシエンヌは壁から身を乗り出す。

「あの時は、数人で済んだが、今回は」
「黙れ」
なお言い募ろうとしたアベルの言葉をリュファスは低い声で遮る。
離れていてもリュファスの声に怒気が籠っているのがわかった。
「それ以上言うな。お前には」
「わかる。だからこそだ！」
アベルは悲痛な声で叫んだ。リュシエンヌの位置からはアベルの顔も見えない。それ故に、アベルの悲痛な声だけが耳にこだまする。
「お前があのこを心底大切に思っていることは知っている。しかし…」
アベルの声が不意に止んだ。
それを不思議に思いリュシエンヌはもう少し近づこうとする。

「リュシエンヌちゃん、盗み聞きとは趣味が悪いね」
いつの間にかアベルがリュシエンヌの前にいた。
すぐ傍までアベルが迫っていたのでリュシエンヌは驚き後ずさろうとしたが、腕を掴まれてしまい身動きが取れなくなる。
「逃がさないよ」
リュシエンヌは恐る恐るアベルを見る。
「さあ、どうしてくれようかな」
口元には笑みを浮かべているがその瞳は冷たくリュシエンヌを射抜いていた。
リュシエンヌは追いつめられた小動物のごとく壁に身を寄せふるふると身体を震わせる。
「アベル、いい加減にしろ」
制止する声に、救世主とばかりにリュシエンヌは目を輝かせ、ア

ベルは舌打ちをしてつまらなそうにリュシエンヌの手を離す。
リュシエンヌは感謝の眼差しでリュファスを見たが、身体を硬直させる。自分に向かって、真冬の川を思い起こす瞳が冷徹に細められたからだ。
「お前もこんな所で立ち聞きなどくだらないことをしていないで仕事をしろ。行くぞアベル」

リュファスはリュシエンヌを冷たく一瞥しさっさと背を向けて行ってしまった。
目を見開き、リュファスの後ろ姿を見つめる。リュファスの冷たすぎる態度にさすがのリュシエンヌも少し傷ついた。
リュシエンヌが落ち込んでいると隣でため息が聞こえた。隣を見るとアベルが去って行くリュファスを呆れたように見ていた。
「リュファスも冷たいなあ。リュシエンヌちゃん、今日リュファスちょっと機嫌が悪いだけだから気にしない方がいいよ。それじゃ」
しゅたっと手を上げてにこやかな笑みを残して去っていくアベルに先ほどの冷酷な面影はすでになかった。
リュシエンヌに向けた冷たい態度など忘れてしまったかのような今のアベルの柔らかな態度にリュシエンヌは、混乱した。

しかし、リュシエンヌは、アベルの不可思議な態度よりも昨日とは打って変わって自分に冷たい態度を取ったリュファスの方が気になった。
ただ、盗み聞きをしていたリュシエンヌを咎めただけかも知れないのだが。

第15話　新しい出会い

あの一件からリュファスの姿を見ることはなかった。王宮にいる方が、稀といわれるリュファスなのでこれが当たり前なのだろう。リュファスを見かけることが珍しいことだったのだ。

しかし、なんとなく避けられているような気がするのはリュシエンヌの気のせいなのだろうか。

リュシエンヌはリュファスのいない平穏な時を過ごしているはずだった。

「あなた、どうしたの」

しかし、ベレニスの目には、リュシエンヌの調子はおかしく映ったらしい。

「ここ最近全くお皿も割らなくなったし、転びもしなくなったわ。メイド長は、あなたの皮を被った別人じゃないかって気味悪がっていたわよ」

普段そんなに酷いことしてたっけ？

普段自分がしでかしていることをあまり自覚していないリュシエンヌだった。

「元気ないのねえ」

いつものお茶の時間、アレクシアがテーブルに肘を付きながらリュシエンヌに言った。

「アレクシア様お行儀が悪いです」
リュシエンヌが注意をするとアレクシアは、あからさまに驚いたような顔をした。
「あらリュシエンヌの口からそんな言葉が出てくるなんて…これは重傷ね。ねえベレニス」
「まったくです」
二人のあまりの言い草にリュシエンヌは頬を膨らませる。
「子供っぽいことしないの」
ベレニスがため息をつく。
「本当にどうしたの？普段は、これでもかってくらいあなたの真価を発揮してお皿を四方に飛ばしてたじゃない」
「私がわざと飛ばしてるように言わないでよー」
「あらっ違ったの？」
本当に驚いたようにリュシエンヌを見る。

ベレニス酷い。

心の中でぶつぶつと言っていると、アレクシアが言う。
「本当に辛かったら私たちに言ってみるもいいかもしれないわよ。ベレニスが心配しているのがわかるでしょう？ベレニスったらこう見えてリュシエンヌに甘いのだからね」
「アレクシア様、私別に心配なんて」
「あら、あなた最近のリュシエンヌを見てどうしたのか、どうしたのかって繰り返し言ってるじゃないの」
アレクシアに暴露されてベレニスは黙る。
「ありがとうございます…ベレニスもありがと」
「知らないわよ」
明後日の方を向くベレニス、その頬は微かに染まっていた。
知っている。ベレニスやアレクシアがリュシエンヌを我がことのように心配してくれていることを。

そうだよ。私にはベレニスやアレクシア様がいる。リュファス様にそっけなくされてるくらいなんだ。

リュシエンヌは握りこぶしを作る。

打倒リュファス様！

。・@・。@・。@・。@・。

しかし、それでも落ち込むものは落ち込む。

珍しく、王宮でリュファスを見かけたリュシエンヌだが、目が合ったと思ったら一瞬で目をそらされた。

私が何をした。

思わずその場で叫びそうになった。いつ何をしたのかリュシエンヌには覚えがない。しいて言うならアベルとの会話を盗み聞きしたくらいである。

しかし、その程度でリュファスは怒るのだろうか。

その時のリュファスと同様の立場にいたアベルは全くの普通で、リュシエンヌに絡んでくる。むしろあのときのアベルが別人だったのではないかと思うくらいの勢いである。

リュシエンヌは俯きながら歩いた。落ち込んでいる顔を誰にも見せたくなかった。

「いてっ」
歩いていると変な声が聞こえた。
顔を上げると近くには顔を歪めた男性が立っていた。
「どうしたんですか」
リュシエンヌが尋ねると男性は眉を寄せてリュシエンヌを見つめた。
「どうって、歩いてきた君が俺の足を踏んだんじゃないか」
何と！まったく気がつかなかった。下を向いていたのに視界に入っていないとは。
「ごめんなさい、気付きませんでした」
「そうだと思った」
男性は仕方なさそうに笑った。何故笑われているのか分からずリュシエンヌは目の前の男性を凝視する。
「俺、マテューって言うんだ」
「ええと、私は」
「知ってる。リュシエンヌだよね」
いきなり名乗って来た青年に戸惑いながらも自分も名乗ろうとしたリュシエンヌの言葉を遮り、マテューは言った。
「え」
「君のことは知ってるよ。君が転んだら世界がひっくり返るって言われてるくらいドジで有名な女の子」
笑いながら男性が言うのでリュシエンヌは彼に向って抗議の眼差しを向けた。
「失礼な！」
「ごめん、でも君って面白い女の子だよね」
今だに笑っているが馬鹿にした笑いではないので、リュシエンヌは放っておくことにした。

改めてマテューを観察する。
従者なのだろうか、マテューは短剣を腰に差しているだけの簡素な格好だが服の生地は質がいいものを使っている。
王宮内で帯剣が認められているのは、国を守る騎士と、従者の中でも主人を守るべく使命を持ち、主人である貴族に選ばれた特別な従者だけである。もっとも、従者は、短剣しかもつことを許されていない。それ故に貴族は、自分の身を守るために技術をもった精鋭を選ぶ。
きっと王宮に自由に出入りできる上流貴族の従者なのだろうとリュシエンヌは見当をつけた。
見た目は、笑顔が似合う好青年である。

そんな彼が屈託のない笑顔をリュシエンヌに向ける。
「これから、よろしくリュシエンヌ」
手を差し出され、つられて手を出すと堅く握手をされる。

リュシエンヌは、なんとなくマテューと仲良くなった気がした。
「よろしく、マテュー」

第１６話　衝撃的な光景

ある日リュシエンヌは回廊で、主人であるアレクシアを部屋の外で見かけた。
アレクシアは、勝気な性格に似合わず身体が弱いので滅多に部屋の外にでないのでかなり珍しいことであった。
視線をそらしたリュシエンヌは、そのアレクシアと一緒にいる人物にたまげた。
「え」
そして、無意識に声が零れおちた。

遠目からでも目立つ深紅の髪に目が奪われる。

話をしているのか、二人の距離は近い。その光景にリュシエンヌの心臓が大きく脈打った。

「リュファス様じゃない」
リュシエンヌが呆然としていると、近くにはうっとりとリュファスの名前を呟くメイドがいた。その瞳からは彼女がリュファスを慕っているのが見て取れた。
「近くで見るとなお素敵だわ。お近づきになりたいわあ」
「やめときなさいって、あんただとあの眼光にさらされて終わりだから」
一緒にいたメイドに冷静に諭され彼女はため息をついた。
「そうよねえ、あらっアレクシア様もいらっしゃるわ」
メイドはアレクシアに気付いたようで目をしばたたかせた。

「王族であるアレクシア様ならリュファス様とお似合いよね。だって聖騎士様だもの。私たちメイドのことなんて気にも留めないわよ」
「そうよねえ」
メイドはまた、ため息をついた。
そこからどうやって部屋に戻って来たかわからない。

しばらく部屋に籠っていると部屋のドアを叩く音が聞こえた。ドアを開けるとベレニスがいた。その顔を少し、怒っているようでもある。
「あなた、何しているのよ。仕事もしないで」
かなりの御立腹である。
「ごめんなさい」
リュシエンヌはうなだれながらも謝った。
いつもは言い訳ばかり言うリュシエンヌが素直に謝ったので逆にベレニスの方が戸惑いの表情を見せた。
「あなた、本当にどうしたのよ」
「ううん、何でもない」

リュシエンヌはベレニスを部屋に促し、椅子をすすめた。というかベレニスが部屋の前から動こうとしなかったので、仕方なく部屋に入れたのだが。
「そう言えば今日珍しく部屋の外でアレクシア様を見たよ」
沈黙が続きなんとか会話を絞り出したリュシエンヌだが、一番触れたくない話題を口を滑らせ、自分から振ってしまい、顔を引きつらせた。それだけ気になっていたということである。
内心汗を流したリュシエンヌに気付きもせず、ベレニスは何とい

うこともない風に言う。
「ああ、アレクシア様がウラジミール様にお会いしたいと言われたからお連れしたのよ」
ウラジミールはアレクシアの異母兄にあたり、皇太子である。母親は違うが兄弟の仲は良好で、よく互いの部屋を行き来している。アレクシアから他の兄弟の部屋に行くのは稀であるのだが。
ベレニスの言い方にリュシエンヌは引っ掛かった。
「あれ、あの時ベレニスもいたの？」
そう尋ねると呆れたような目を返された。
「それは私たちは、アレクシア様付きのメイドなんだから主人の傍に控えているのは、当たり前じゃない、むしろその場にいなかったあなたがおかしいわよ」
ずいっと恐ろしい顔でベレニスにすごまれ、リュシエンヌはのけぞり椅子から落ちそうになった。
「何していたの？」
顔から冷や汗を大量にかき、目線をそらす。
「リュシエンヌ」
「いやね、あのね、今日もドジして、メイド長にお昼抜かれてね。あのっお茶の時間まで待ち切れなかったから…」
「料理長におこぼれをもらっていたわけね」
しどろもどろに言うリュシエンヌの理由を言い当て、ベレニスはため息をついた。
「あの人も、リュシエンヌには甘いんだから」

「私が見たときはアレクシア様、リュファス様とお話してた。でも、ベレニスは近くにいなかったよね」
近くにいたらリュシエンヌは多分気付いていたはずである。
「ああ、リュファス様と鉢合わせたときね。そのとき私は少し離れて控えていたの」

そう言うとベレニスは、その美しい顔を歪めた。
「どうしたの？」
「いえね、少し思いだしてしまって…」

しばらく黙っていたベレニスは、唐突に言った。
「あなたに聞かせるのを躊躇わせるような会話の内容だったわ」
その言葉にリュシエンヌは苦しそうに眉を歪めた。自分には聞かせられないということは、かなり親密な話をしていたということだろうか。
「楽しそうにお話してたもんね…」
ついポロリと言葉をこぼしてしまった。しかし、何故二人が親密になるとリュシエンヌが苦しくなるのかリュシエンヌ自身分からなかった。
「楽しそう？」
ベレニスはリュシエンヌを、信じられないどこに目をつけてんだという顔で見た。しかし、少し考え、自分の言葉を否定するように首を振る。
「ああ、でもアレクシア様は楽しかったかも知れないわね。あのリュファス様に対して言いたい放題なさっていたのだから」

「どういうこと？」
リュシエンヌが尋ねてもベレニスはため息をついて、首を横に振るだけだった。そのときのことはあまり思いだしたくないようだった。
「リュファス様もよくアレクシア様の毒にたえていらっしゃって…思わず涙ぐんでしまったわよ」
その言葉に、リュシエンヌは自分が少し思い違いをしていたことに気付いた。あのとき確かにアレクシアは楽しそうに話をしていたが、リュファスの方は少し顔を引きつらせていたのを思い出した。
内容は分からないが、あのときのリュファスはアレクシアの可憐

な唇から吐き出される毒をずっと聞いていたのだろうか。
リュシエンヌはアレクシアの毒の餌食になったリュファスを気の毒に思う。

しかし、自分が思い違いをしたと知ってもこの胸のもやもやが晴れることはなかった。

アレクシアの夕飯の準備をしようと厨房へ向かっていた。今日はリュシエンヌが食事を運ぶ係でベレニスは部屋での準備を担当している。
自分の気持ちが分からず、しょげながら歩いていたせいか、何もない所で滑って転んだ。リュシエンヌがなんとなく起き上がれないでいると、
「あれ、リュシエンヌじゃないか。大丈夫かい？」

そこには、前回出会ったときと同じ笑顔を浮かべたマテューが立っていた。
馬鹿にしているのではない、わかっている。
でも、

笑ってないで手を差し伸べてほしい。

第17話　急展開

ずっと床にへばりついていても埒があかないのでリュシエンヌは自分で立ちあがった。
「まったく、リュシエンヌは」
マテューは呆れたように言いながらも、リュシエンヌのスカートについた埃を両手でパタパタと払ってくれる。

「ねえ、マテューは私と合うとき、ひとりでいるけど、ご主人様は大丈夫なの？」
「ああ、大丈夫だよ、あの方には俺よりもずっと強い従者がついているからね。だから、俺はこうやってのんびり自由にさせてもらってるんだ」
朗らかに笑いつつ、マテューは明るめの茶色の髪をがしがしと掻いた。
「ふーん」
「君こそ、こんな所で床にへばりついててよかったのかい？」
「いやいや、好きでしてたわけじゃないんだけど…あ！そう、アレクシア様の食事をもって行こうとしてたんだ」
自分の使命を思い出したリュシエンヌはマテューにおざなりに別れを告げ、さっさと厨房の方へ歩き出す。

「って何でついてくるの？」
リュシエンヌは思わずつっこんだ。
横を見ると何故か当たり前のようにマテューがリュシエンヌの横を歩いていた。小走りのリュシエンヌに対し、余裕をもった歩き方をしているマテューが憎たらしい。

「いやね、リュシエンヌが転ばないか、食事をトレーごとひっくり返さないか心配でね」

昨日今日会ったばかりの人間に心配される私って。

と少し落ち込みつつ、すぐに今日の夕飯のことを考える。アレクシアの食事を運び終えたら、自分たちメイドの夕食の時間である。

本当は、礼儀として主人であるアレクシアが食べ終わるまで、メイドの自分たちは食べてはいけないのだが、アレクシアが、自分がゆっくり食事をしたいということで、アレクシア本人から許しを得ている。

今日は何だろう。やっぱりメインはお肉だよね。この前に食べたヘモ鳥のワイン蒸しとか美味しかったなーまたでないかな？そのときは、野菜スープがあった方が喉の通りがよくなって食べやすいし。

「ねえ、涎はみ出てるよ」

自分で献立を考えながら歩いているうちに涎が出てしまったらしい。慌てて拭いマテューをちらりと窺うように見る。

マテューはニコニコとリュシエンヌを見ている。そのマテューの笑顔を見ているとなんとなく気が抜けてくる。

「マテューって、面白いよね」

「リュシエンヌには負けるよ」

二人で顔を合わせ、笑った。

マテューが唐突に歩みを止め、顔を上げる。

「どうしたの？」

リュシエンヌも足を止め、急に止まったマテューを不思議そうに見つめた。

「いや…ちょっと。何か向こうから危険な空気が漂ってきたから」

マテューが視線を向ける方向を見ても何もない、そこにはただ大きな柱があるだけだった。
「王宮の中で危険なことなんてあるわけないじゃない、変なマテュー。私、行くよ」
「そういう意味じゃないんだけどね。何か、まずい所見られたかな」
そう呟きマテューはリュシエンヌの後を追った。

「ありがとう、マテュー」
結局アレクシアの部屋の前まで食事を運んでもらった。最初はリュシエンヌが持って行こうとしたのだが、危なっかしかったらしく途中ひったくられる形でマテューに任せてしまった。
「いいや、豪華な料理が台無しになるよりはいいよ」
ちくりと嫌味を言われながらもリュシエンヌは再度礼を言い、笑顔でマテューを見送った。

今日の毒味役はリュシエンヌだったので、手早く毒味を済ませてから、リュシエンヌは自分の部屋に帰ろうとしたとき、アレクシアに呼びとめられた。
なんとなくアレクシアの顔を見づらかったので早く出て行こうとしたのだが。
「リュシエンヌ、今日私たちが話しているところを見ていたそうね」
リュシエンヌが困った顔をした。
「えと、リュファス様とお話していたときですよね」
「そう」
「はい…見ましたけど」
何故そう言うことを聞くのか分からず、リュシエンヌは不思議そうにアレクシアを見つめた。珍しくベレニスは口を挟まず、この状

況を静観している。
「どう思った？」
「どう思ったって…」
「そのとき、自分が思った気持を素直に言えばいいのよ」
アレクシアが求めていることはなんとなくわかる。
しかし、あのときの切ない気持をアレクシアに話すのは何故か躊躇われた。普段は、何でもアレクシアに言うリュシエンヌだったがそのことに自分でも戸惑った。
だが、誤魔化してもアレクシアに隠せるわけがないので、自分の思いをたどたどしく声にする。

「アレクシア様とリュファス様がお話をしているのを見て、何だかとても胸が苦しくなったんです。近くにいた人がお似合いだって言ってたのを聞いて次は胸が痛くなったんです。今もずっと胸にもやがかかっているような感じで…うまくはいえないですけど、変なんです」

上手に言葉にすることは失敗したが、アレクシアはリュシエンヌの話を真剣な顔で聞いてくれた。そして、一言言った。
「あなたはその切ない感情の名前を知っているはずだわ」
「え」
「リュファス団長と私が一緒にいって苦しかったのは何故？リュファス団長が私以外の女性といてもあなたはきっと胸が苦しくなっていたはず。わかるわよね？あなたは。記憶を失っていたとしても子供ではないのだから」
驚愕した顔をするリュシエンヌにアレクシアはなおも言い募った。
「わかるわよね？」
「あ…私」

アレクシアに言われてリュシエンヌは気付いた。多分、認めたく

なくて自分の気持ちから目を逸らしていた。

リュファスの笑った顔が見たい。リュファスといると楽しいし、無性に胸が苦しくなる。でも、リュファスの傍にいたい。最初に出会ったときには彼の存在が恐ろしく、芽生えることのないと思っていた感情。リュシエンヌはその感情を知っている。

しばらく考えるように俯いていたリュシエンヌだが、やがて決意を秘めた眼差しでアレクシアを見る。アレクシアは、そんなリュシエンヌを静かに見返した。

「リュファス様、さっきウラジミール様のお部屋に入られたのを見たわよ」

ベレニスが食器を並べながら独り言のように言う。そっけない仕草だが、その心は情で溢れているとリュシエンヌは感じた。

「ベレニス…」

リュシエンヌは胸が熱くなり震える声で言う。

「ありがとう…行ってきます」

「リュファス様！」

ウラジミールの部屋の周辺で目当ての人物を見つけリュシエンヌは周りも気にせず、大きな声で名を呼ぶ。

リュファスはリュシエンヌを一瞥したはずなのだが、すぐに背を向け、去っていく。

無視されたと分かってもリュシエンヌはリュファスを追いかける。

「リュファス様」

振り向かない背に声をかける。走れば追いつけるはずだった。

しかし、突如リュシエンヌの足から力が抜けた。

「えっ」

均衡を失い、膝から崩れ落ちたリュシエンヌの身体は、自分の意思とは関係なく床に倒れこむ。

薄れゆく意識の中で見たのは、凄まじい表情で駆け寄ってくるリュファスの姿だった。

第１８話　倒れた理由

深く、深く、底に沈んでいくような感覚。
まるで海の底にいるようだった。ゆらゆらと揺れながらも身体を照らしていた光はもはや届かない。
身体は冷たく、そして本当に水の中にいるような息苦しさを感じ、咄嗟にがむしゃらにもがくが、手は虚しく周りを掻きまわすだけでどうしようもできない。

頭に酸素が回らず、目の前がだんだん霞んでいく感覚が襲ってくる。夢なのか、現実なのか、しかし、どちらでも自分はこのまま沈み朽ち果てるのだろうと諦め、もがくのをやめたとき、突如眼前が輝きだした。

その光がやがて一筋の道を作り出していく。

いつの間にか楽になっている呼吸を整え、リュシエンヌは吸い寄せられるように光の筋に触れる。その光はリュシエンヌを上へ上へと誘う。

生きる。

昇っていくとき、ふと後ろを振り返ったリュシエンヌが見たのは騎士の姿をした男だった。

「兄さま？」
自分の出した声に驚いたのだろう、リュシエンヌはぱちりと目を開いた。

「リュシエンヌ！」
ふと声をした方を見る。すぐ近くにリュファスの顔があり、思わずのけぞった。
「苦しくは…ないか？」
「へ？」
リュファスに問われ、自分の置かれている状況を理解しようとしたリュシエンヌだが、一向に理解できない。あれほど自分を避けていたリュファスが今目の前で、心配そうな顔をして、リュシエンヌの手を握っている。

リュシエンヌは呆然とリュファスを見る。
こんなに不安そうな顔をしたリュファスを見るのは初めてだった。

「もう大丈夫ですよ」
その声でこの部屋の中にもうひとり人間がいることに気付いた。
目が合うと優しそうな顔をした初老の男はにっこりと笑ってリュシエンヌに笑いかける。

「身体が丈夫だったことが幸いしましたね。本当によかったです。しかし、完治するまでには時間がかかります。薬を置いていきますので毎朝必ずお飲みください」

男の言葉にリュシエンヌは首を盛大に傾げる。
「後は俺が説明する。下がってくれ」

リュファスが言うと男は了承し、頭を下げた。
それでは失礼します、と言い男は部屋を出ていく。男が出て行ったことで部屋の中にふたりっきりにされてしまった。

リュシエンヌはわけも分からず、男の出ていった扉を見つめる。状況がまったくつかめない。

「無事で、よかった」
再びリュファスはリュシエンヌの手を力強く握る。そして、手を持ち上げ額に付ける。まるで、リュシエンヌがそこにいることを確認するような仕草だった。
「リュファス様…えっと」
まったく事態が読み込めないリュシエンヌは、リュファスらしからぬ行動にただ戸惑うしかなかった。

しばらくして落ち着いたのか、リュファスは顔を上げ、躊躇いながらも語りだした。リュシエンヌの手は握ったままで。
「アレクシア王女の御膳に毒が仕込まれていたのだ」
「えっ…」
リュシエンヌは驚愕に目を見開く。
「そのときの毒味役がお前だったので、お前が毒にあたった。遅効性の毒だったからな、しばらくして毒が身体に回って倒れた…俺のすぐ傍で」
リュシエンヌの手を握る大きな手が微かに震えている。

しかし、それには気付かず、リュシエンヌはその皿を本来食すべき主を思い、瞳を震わせた。
「アレクシア様は！」
リュシエンヌが飛び起きようとすると、リュファスがそれを押しとどめた。

「アレクシア王女はその皿に手を付けられなかったから無事だ。今は、騎士達に警備をさせている」
「よかった」
リュシエンヌは安心して、リュファスに促されるまま再び身体を横たえた。
アレクシアの無事が分かり安堵したリュシエンヌは、周りを見る余裕ができ、ずっと自分の手を握っているリュファスを戸惑いがちに見つめた。

いつも険しい表情をしていることが多いリュファスだが、今はその顔に疲労を色濃く滲ませ、心なしか青ざめてもいる。
「リュファス様」
「お前が倒れたとき心臓が止まるかと思った…本当に無事でよかった」

「リュファス様は…」
毒に倒れる前のあの決意など忘れてしまったかのようにリュシエンヌは、リュファスを目の前にして何も言えなくなってしまった。
リュファスの正反対ともいえるこの態度に、リュシエンヌは混乱し、リュファスに怯えてしまった。
「リュシエンヌ？」

「よくわかんないんです」
リュファスが眉を顰めた。こんな仕草もかっこいいと思ってしまった自分をリュシエンヌは手遅れだと思いつつ、何とか今の思いを吐露しようと努力する、がうまくいかなかった。
「だって…私をいきなり避けだしたと思ったら、今、こんなに私を心配するような様子をしたり…」
いきなり自分は何を言っているのだろう、話しだしている今がリュシエンヌの混乱の極致だった。

しかし、そんなリュシエンヌに対してリュファスは、リュシエンヌから零れた言葉を一字一句聞き逃さないように真剣に聞き入っている。

「リュファス様が何を考えて私に接しているのか分からないんです」

冷たくしたり、優しくしたり、気まぐれにしか思えない態度。それに振りまわされている自分の恨みを込めて言葉を続ける。

「リュファス様は何をしたいんですか？」

最後の方はこらえ切れなくなり、涙目になりながら言った。

言い終わったあと襲ってきたのは、喪失感だった。リュファスを責めてしまった自分。一介のメイドが尊い方にこんな言い方をしたら、ただでは済まないだろうということは重々理解していたつもりだった。

終わった。何かが終わった。

語り終えて何もかも終わった気分でいるリュシエンヌの心はやつれ果てていた。もはや、リュファスの顔を見る気も起きない。

このまま出て行ってくれないかな。

罰は後で受けるから、そんなリュシエンヌの思いも虚しく、リュファスは微動だりしない。

しばらくして、あまりにも動かなさ過ぎて不気味なリュファスの様子を窺おうとしたとき、腕を引かれた。

気付いたときは、リュファスの腕の中。

「…はっ…」

強く抱きしめられすぎて息をするものままならない。
体温が急激に上昇する。
前にもこうやって抱きしめられドキドキしたことがあるが、自分の気持ちを自覚している今の心臓の動きとは比にならない。
手をがっちりと拘束され、もがくこともできない。

きっと今、自分の顔は自分を抱きしめている人の髪と同じくらい真っ赤になっているのだろう。

ああ、この心臓の音が聞こえませんように。

「すまない」
しばらくリュシエンヌの肩に頭を預けていたリュファスはやがて一言、言った。

第19話　推理

「リュシエンヌが目を覚ましたそうです」
ベレニスの報告を聞き、アレクシアは張り詰めていた気を緩め、息をついた。
「そう」
「…今は」
「聞かなくても分かっているわ」
ベレニスの声を遮り、アレクシアは呆れたように言った。椅子の背に体重をかけ、腕を組む。

「しばらくはふたりだけにしてあげましょう」
「そうですね」
ベレニスも同意した。

「あの人も気付いたんでしょう、自分の気持ちに」
「そうだといいのですが」
「大丈夫よ」
心配そうに言うベレニスにアレクシアはあっけらかんと言った。
「すごかったらしいわよ。あの人、みっともなく取り乱しちゃって。傍でずっとリュシエンヌの名前を呼び続けていたんですって……国を守る聖騎士が聞いて呆れるわね」

くすくすと笑いながらもリュファスに対する辛辣な言い方に、実はずっといた周囲の護衛騎士たちは冷や汗をかいて口を噤む。全ての騎士が尊敬すべく、聖騎士の悪口を言われているのだが、王女相手に何も言うことができない。
アレクシアの毒殺未遂事件が起こってから、護衛騎士は部屋の中にまでつけられることになった。しかし、アレクシアは周囲の護衛

騎士を気にせずに話す。
「馬鹿みたい。気になっているのが分かってるくせに、リュシエンヌを突き放して」
「しかも、リュシエンヌの方が先に自覚したなんて笑い話にもならないわよね」
自覚させたのはあなたですけどね。ベレニスは心の中でぽそりと呟く。
「まあ、これであの人も自覚したと思うのだけれど」
アレクシアはため息をついた。
「それがわかるのが毒のせいなんて皮肉よね…」
ベレニスは答えない。アレクシアが自分に語りかけているわけではないと気付いているからである。
「リュファス団長としっかり話してみて分かったことだけど」
それは、今まで見せていた嘲るような眼差しではない、我が子を見守るような眼差しで、
「とんでもなく不器用な人だわ」
アレクシアは、言った。

しばらくして、ベレニスが小声で言う。
「アレクシア様、実は私、あのときの食事のことで気になることがあるのですけども」
「あら、偶然ね私もよ」
アレクシアも同意する。

アレクシアは悠然と足を組みながら言う。
「今調べさせに行っているところよ」
あまりの行動の早さにベレニスは目を瞠る。
優雅に足を組み豪華な椅子に座るその姿はさながら女帝のように傲慢であり、また神々しくもあった。

「アレクシア様」
闇の底から響く、暗い声がした。
「あら、もう戻って来たの」
傍らを見ると全身黒ずくめの男が立っていた。周りにいた騎士たちは驚愕したまま、手を剣の柄に手を添えているだけで、男が誰にも気配を悟らせずに部屋に入って来たことを証明していた。
護衛騎士たちは突如現れた黒ずくめの男を警戒している。男は身体だけでなく、顔も黒い布を巻き、素顔を隠している。最初の声を聞かなければ男だということも分からなかっただろう。
「そんな警戒しないで。私の側近だから」

「私たちこれから話があるから、部屋の外にいてもらってもよろしくて？」
アレクシアは疑問形で言ったが、決定権は騎士たちにはない。戸惑いつつも、部屋から出て行こうとした騎士たちの間を縫って、ひとりの護衛騎士がアレクシアの前に歩み出た。
そして、恐れ多くも王女であるアレクシアに対して諭すように言う。
「アレクシア王女、危険すぎます。我々騎士を部屋の外に出すなど。今、あなたは御自分がいかに危うい立場だということを理解しておられるのですか？」
護衛騎士の過ぎた言葉に周りの同僚たちは恐怖に慄いた。護衛騎

士を見つめるアレクシアの瞳が妖しく光る。
「あら、あなた。私直属の護衛の腕を疑うのかしら？」
「そういう意味ではありません！護衛ひとりだけなど危険すぎると申しているのです。どこから狙われるかわからないのですよ。もしも多勢に狙われたとき、護衛ひとりと戦えないメイドだけであなたはどうするのですか」
護衛騎士の言葉にベレニスは柳眉を眉間にきゅっと寄せて護衛騎士を見た。

「王女の周りには多くの騎士を配置するべきです。また狙われたらどうなされますか！今回はメイドひとりだけが犠牲になったからよかったものの…」

「へえ…」
しんとアレクシアの周りの空気が冷える。ベレニスも黒ずくめの男も背中に緊張が走る。遠巻きに見ている他の護衛騎士もアレクシアの様子に気付き、青ざめているというのに、それに気付かずアレクシアに対して熱弁を振るう護衛騎士にベレニスはついに嘲りの眼差しを向けた。

尚も言い募ろうとする護衛騎士の言葉をアレクシアはぴしゃりと遮った。
「今の言葉、私の前でよかったわね。護衛騎士をを外されるだけで済むのだから」
「は？」
アレクシアの言葉の意味が分からず、護衛騎士は眉を眉間に寄せる。
「リュファス団長の前でおっしゃってみなさいな。あなた、切り捨てられるかもよ？まあ、あの人にそんな度胸はないとは思うけどね、ふふ」

微笑みながら言うアレクシアの瞳は口元とは裏腹に冷たく射抜くような眼差しだった。
「民を守るべく存在する騎士の中にあなたのような身分で人を判断する者がいるというのは非常に嘆かわしいことだわ」
「わ、私は！」
その言葉に護衛騎士は慌てて言い繕うとするが、アレクシアに睥睨され、口を噤む。
「そんなに身分を気にして貴族だけを守りたいのなら、貴族の従者になれるようにあなたを斡旋してあげるわ」
騎士から従者、それは、事実上の降格である。
「王女っ」
「さがりなさい」
護衛騎士の言葉を遮り、退出を促す。
それ以上の言葉は聞かないというアレクシアの態度に、護衛騎士は力なく膝をついた。その護衛騎士を周りの者が引きずるようにして連れ出していく。
誰も何も言わなかった。

護衛騎士たちが出て行った後、邪魔者は去ったとすがすがしい顔でアレクシアは、横の側近に語りかける。
「それでオーギュスト、情報は仕入れてきてくれたかしら？」
「はっ」
アレクシアの豹変に気にした様子はなく、その前にオーギュストは跪き、傍から見ても分かるほど敬愛の情を込めてアレクシアを見上げる。
椅子にゆったりと腰掛けるアレクシア、そのアレクシアに跪くオーギュスト、その光景はさながら女王陛下に忠誠を誓う騎士の絵画のように美しかった。

ふたりの様子を見惚れていたベレニスだが、始められた話に首を振って気を引き締めた。
「毒の入っていた料理ですが、料理長も副料理長も作った覚えはないと」
「やはりね」

王族の食事を作るのは、料理長か副料理長かに決まっている。それ以外の者には食材にさえ触れることはできない。
お互い分担して王族の料理を作っているのである。
あの日、料理長が少しその場を離れ戻って来た時には料理がすでに皿に盛り付けてあった。副料理長が用意したのだろうと思い、副料理長を探したが姿が見えない。
結局、副料理長が戻って来ないまま、リュシエンヌ達が食事を取りに来たので慌てて渡してしまったというのが料理長の証言である。

そして、副料理長だが、これは情けないことに愛人に会っていたそうな。少々の料理を作った副料理長は、料理長が調理場を離れた隙に抜け出し、愛人と密会していたというのが副料理長の証言である。後、数品作るだけだったので、料理長に任せてしまったというのが副料理長の証言である。
副料理長は隠し通すはずだったが、その場面を愛人のメイド仲間に見られてしまって不承不承証言をしたらしい。
余談だが、そのことで烈火の如く激怒した料理長に副料理長は、副料理長の位を剥奪され、普通の料理人から始めることになってしまったらしい。

当然のことだとアレクシアは思った。
むしろ追放でもいいくらいだ。仕事意識がなさすぎる。

次に、アレクシアの食事を持ってきたのはマテューという青年だが、オーギュストが調べた結果、彼が毒を入れていないのは確かである。彼にはリュシエンヌと会う前のアリバイもあるし、リュシエンヌの隙をついて、皿に毒を入れることもできない。
その毒は、食べ物の隅々まで浸食しており、よっぽどしっかり混ぜなければそこまで毒は浸みわたらないらしい。その動作を、いくらリュシエンヌが迂闊でも彼女に気付かれないですることは不可能であるという。

オーギュストのもたらした情報を聞きながらアレクシアの瞳は確信に満ちたものに変わっていく。

実は、アレクシアは、ルコの実という食べ物が嫌いだ。視界に入れることもしたくないほど嫌っている。それは昔ルコの実を食べ、喉に詰まらせ死にかけた幼少の頃の経験からきている。
故に、ルコの実が入った料理には手を付けることはない。それが大粒で料理に入っていたものなので、すぐに視界からはじき出した。
そのときは、料理長を呼び出しオーギュストに拷問させようと思ったくらい憤っていた。
すぐにリュシエンヌが毒を盛られ倒れたと聞き、うやむやになってしまっていたのだが。

急にリュシエンヌ達が来たことで、慌てていた料理長がルコの実が入っていることに気付かずリュシエンヌたちに渡してしまったのだろう。
しかし、アレクシアがルコの実を食べないことは、料理長も副料理長も知っている。

あのとき、毒はルコの実を使った料理に入っていた。
アレクシアを殺すつもりなら、アレクシアが手を付けない料理に毒を入れるだろうか。そして、アレクシアを殺そうとする者が、殺す相手の好みも調べないというそんなへまをするだろうか。

別の方向から考えてみることにする。
もしも、その毒を入れた者の狙いがアレクシアではなかったら？
毒味の者は必ず全ての皿に手を付ける。例え、アレクシアの嫌いなルコの実が入っていた皿だとしても、疑問を持ちながらも毒味役だったリュシエンヌは手を付けたのだろう。

狙われていたのは、アレクシアではない。

アレクシアは確信といくばくかの不安を持って重い言葉を可憐な唇から吐き出す。
「本当に狙われているのは…」

第２０話　想い通じる

どれくらいの時間が経ったか分からないが、やっとリュファスの腕から解放されたリュシエンヌは枕に寄りかかり荒い息を整える。

「ああ、すまない。苦しかったか？」

微笑みながら言って優しく頬を撫でる。

笑顔の大量サービス期間中ですか？それとも頭ぶっけましたか？ていうか何故笑う？

ここまで、態度を豹変されるとさすがのリュシエンヌもうすら寒さを覚えた。

「リュ…リュファス様？」

呼びかけると微笑みつきの顔が近寄ってくる。

怖くなったリュシエンヌはじりじりと後ずさる。が、すぐに背中に壁の感触。ここから逃げるにはリュファスの横を通っていかなければいけない。逃げ道は断たれた。

どう見てもリュファスが意図して追いつめたわけではない。しかし、リュシエンヌは自分がリュファスに言った言葉も忘れ、ベッドの片隅で縮こまり、追いつめられた小動物のように怯えていた。

「すまなかった」

何度目かの謝罪、しかしリュシエンヌには謝られている意味が分からなかった。

突然、リュファスが椅子から立ち上がったと思ったら、その鍛え

抜かれた腕を伸ばしてリュシエンヌの身体を引き寄せる。抵抗する間もなくリュシエンヌは元のリュファスの傍に戻されてしまった。

「逃げないでくれ」

リュファスは、懇願するように言う。しかし、それでも消えないリュシエンヌの瞳の奥にある微かな怯えの色を鋭く感じ取り、手を離し、姿勢を正すことで少し距離を取った。

「王女にも飽きるくらい注意されたんだったけれどな…」

リュファスが自嘲するような笑みを浮かべる。俯いてしまったので、サラサラとした赤い前髪が瞳を隠してしまう。

そこには疲労して座り込む男がひとりいるだけだった。

普段のような覇気をもたないリュファスは、リュシエンヌにとって不思議な存在に感じた。

ただ、リュシエンヌは氷を連想させる綺麗な瞳を見せてほしくて、自らリュファスに近付き、前髪を撫でるように優しく掻きあげる。

見えた瞳はゆらゆらと泉の如く揺れていた。

リュシエンヌは見惚れるかたちでまじまじとリュファスを見つめる。すると、リュファスは目を細めて言う。

「お前の近くにいると自分の感情が制御できない」

リュファスの前髪を上げていた手を取られた。驚いて見ると髪の間から見えるぎらぎらと光る氷の瞳に射抜かれる。

「自分が何かしでかしてしまいそうだったから、お前を避けてしまった。すまない」

そして、疲れたように言う。

「5年という…いや、5年も満たない年月でお前は変わりすぎた」

そんなことを言われてもリュシエンヌには何も答えようがない。

リュシエンヌは比較する対象を失ってしまっているのだから。
それに、リュファスの言うことは意味がわからな過ぎて困る。
そのような不満を込めた眼差しを向けてみるが、普通に受け流されてしまった。
「お前は妹のような存在で、傍にいるだけで穏やかな気持ちになれたあの頃にはもう戻れない」
ふとリュファスが苦悶の表情を浮かべる。それに気付いたリュシエンヌがリュファスに問いかける前に再びリュファスは語りだす。
「お前を思う俺の感情は理性を焼き尽くし、ただ思いのままにお前を傷つけようとする…自分の気持ちが分かっていなかった。これがどういう感情なのか。しかし、今なら分かる」

ふたりがいる部屋は、リュファスが語る内容とは反対で窓から暖かい日差しが差し込みとても穏やかな空気に包まれていた。
その部屋にいることで、リュシエンヌの心もだんだん静まっていき、リュファスの語る彼の心の声にただ耳を傾ける。

「多分これが人を好きになるということなのだろうと」
言葉と共に見つめられリュシエンヌの呼吸は止まる。
冗談ではない、真摯な瞳に射抜かれる。
「お前と出会った当初は、ただ大きくなったという思いだけだった。そうだろう？お前はあのときまだ１４だったのだから。だが、お前と触れ合っていくと徐々に不可解な感情が胸の内を渦巻き始めた」
リュファスは自分の心臓のある位置に手を当てる。
「嬉しくなるくらい暖かいような、涙が出るほど切ないような、そんな想いだ」

「共にいたら、それ以上の距離を求める……だが、お前が他の男

といたら」
そこで言葉を切る。
暖かい部屋は一瞬で零下になる。リュシエンヌも凍ってしまったかのように固まった。
「殺したくなるほどの」
微かな笑みを浮かべる。
「もちろん、お前をだ」
彼の中に聖騎士にあるまじき姿を見出し、リュシエンヌは、自分がもはや戻ることのできない道まで進んでしまったことを悟った。

「だが、きっとお前が死んでしまったら俺は生きてはいけないのだろうな」
ため息をつくように言うリュファスは確信を持って言っているようだった。
「リュファス様…」
「お前が倒れたとき、心臓が止まるかと思った」
肩を引き寄せられる。リュシエンヌは肩を抱く手が微かに震えているのに気付いた。

「俺は、お前を失うのが恐ろしくて仕方ない」
そのときのことを思い出しているのだろう、目を見開き遠くを見ている。
「あのときは、自分の気持ちから逃げるためにお前を避けていた俺自身を切り殺したくなった」
「そんな…リュファス様のせいじゃ」
ゆっくりと首を振る。

「いや…俺は、お前を守り切れなかった」
「でも、私が毒を盛られたのはアレクシア様の身代わりだったんですから」
もう心配はいらないと元気づけるように言ってもリュファスの表情は晴れない。逆に余計暗くなった。
「……それでも…心配なんだ」

リュシエンヌの身体はまだ全快していないので、リュファスはあまり長居はしないつもりだったらしい。
リュファスがどうしてもベッドから出ることを許してくれなかったために、ベッドの上から見送るはめになったリュシエンヌがずっと長身の後ろ姿を見つめていると、扉に向かっていた足は突如止まり、リュシエンヌの方を振り向いた。
「出来る限り時間を作る。だから、そのときは傍にいてほしい」
「私も…リュファス様ともっと一緒にいたいです」
はっきりと言うことができなかった自分に内心悔んだリュシエンヌだがリュファスには伝わったようで、笑みを浮かべ頷いた。
「俺はお前を守る」
そう言葉を残してリュファスは出て行った。

残されたリュシエンヌは上気している頬に手を当てた。
「うわー」
ベッドの上をゴロゴロと転がり、意味不明な言葉を発しながら悶える。だが、案の定頭を壁に強打する。

しかし、そんな痛みも感じないくらい今のリュシエンヌは幸せに包まれていた。

先ほどの出来事が夢じゃないか確かめることもできずにリュシエンヌは、うっとりとしながら彼が出て言った扉をずっと見つめていた。

しかし、突如頭に鋭い痛みが走る。震える手で頭に手を添える。久しく忘れていた痛みのはずだったが、その痛みを忘れていたことを咎めるかのように痛みは絶え間なくリュシエンヌに襲いくる。

割れそうになるほどの痛みに頭を抱えたリュシエンヌは、焦点の合わない瞳で扉を見た。

「痛いよ…兄さま」

第２１話　優しさの溢れる

足を止め、リュシエンヌは後ろを振り返り怪訝そうな顔をした。
「ベレニス、何か用？ずっと私の後歩いてるけど」
「別に、何でもないわ」
ベレニスはそっけなく言うが、このやり取りは先ほどからずっとしている。
「ねえっベレニス！いったいどうしたの？」
「私もこちらに用事があるの。気にしないでちょうだい」
我慢できなくなってリュシエンヌは聞くが、そう言ったきりベレニスは黙ってしまった。

なら一緒に行けばいいのに。なんで後ろをついてくるんだろ？

訳の分からないベレニスの行動に首を捻ったリュシエンヌだった。

後ろにいるベレニスを気にしないようにして歩いているとベレニスの方からリュシエンヌに話しかけてきた。
「リュファス様のところに行くの？」
「う、うん」
いきなり確信を突かれ、顔を赤くしどもったリュシエンヌの様子を気にすることなく、安心したようにベレニスは息をついた。
「…そう」

まだそんなには近付いてはいないはずなのに熱気が伝わってくる。騎士たちの訓練場である。
リュファスはこの中にいるはずである。リュシエンヌは後ろにいるはずであろうベレニスに振り向いたが、ベレニスはいなくなって

いた。
「ベレニス？」
「どうした？」
いつの間にかすぐ傍にいたリュファスが不思議そうに問いかけてきた。
「いえ、なんでもないです」

二人は訓練場から少し離れた、庭にあるベンチに座って話をする。
リュファスは聖騎士であるとともに騎士団の団長という重要な役割を担っている。故に、リュシエンヌに対して多くの時間を割くことはできない。それでもリュファスは忙しい時間の合間を縫ってリュシエンヌのための時間を作ってくれている。
そうしてくれるだけで嬉しかった。
「それでまたメイド長に叱られて罰として花壇の手入れをさせられたんですよ。爪の中が泥だらけ」
「お前は、昔から少し抜けているところがあったからな。…そう言えば、こんなこともあったな。何もない所でつまづいたお前の前にちょうど子犬がいたんだ。お前は避けようとして咄嗟に身体を捻った。避けたまではよかったが、坂になっているところだったのが悪かったのか、転んでそのまま身体を回転させながら下にあった湖につっこんだ」
何もない所でつまづいたり、坂の途中で止まらずそのまま勢いよく転がっていく人間がいたんだと驚き呆れつつ思ったリュシエンヌだが、自分のことだと思いだし「はは…」と乾いた笑い声を出した。
「だが、湖から上がったあとお前は真っ先に子犬の心配をして、子犬が無事なら別にいいと笑って流してしまった。身体はずぶ濡れで、くしゃみもしていたのにな」
そのときのことを思い出しているのだろう、リュファスはリュシエンヌがわかるほど優しい顔で話した。

そんなリュファスをリュシエンヌは切ない気持ちになって見つめる。
今のリュシエンヌではリュファスと記憶を共有することはできないが、それでもリュファスの中に自分が存在しているのが嬉しかった。
しかし、最近になってやっと自分は、救いようのないドジなのだということを自覚してきたリュシエンヌだが、リュファスの口から直接言われるとなんとなく恥ずかしい。

「それでリュファス様、私が池に落ちたあと…っ痛」
質問しようとしたリュシエンヌだが、突然警鐘を鳴らすかの如く頭の中で痛みが広がる。
心が霧に包まれているかのような不快感も同時に広がり、リュシエンヌは頭を抱えた。

「どうしたリュシエンヌ」
「い、いえ。ちょっと頭が痛くて…でもすぐ治るんで」
リュファスは、頭に手をあてたリュシエンヌの姿と言葉に眉を寄せた。
「頭が…もしかして、あのときから頻繁に痛むのか？」
「いえ、そんなにしょっちゅうではないんですけど…」

リュファスは無言でリュシエンヌの額に手をかざす。リュシエンヌの中にあのときと同じように暖かい何かが流れ込んでくる。しばらくすると痛みは嘘のように消えてしまった。
そして、痛みが消えたせいか気分の方もすっきりした。
またリュファスが治してくれたのだろうとリュシエンヌは感謝の気持ちを込めてリュファスを見る。
「ありがとうございます、リュファス様」
リュファスはそれには答えず、何故か苦しそうな顔をしただけだ

った。

「リュファス様、どうしたんですか？」
「いや、なんでもない」
再度なんでもないと首を振った後、リュファスは真剣な顔で考えるように俯く。
「リュファス様？」
返事も帰ってこなくなったので、暇になったリュシエンヌは足をぶらぶらさせながらリュファスを見ていた。

しばらく考えていたリュファスだったが、おもむろに顔を上げ自身の首の後ろに手を回し、その手を差し出してきた。
「リュシエンヌ、これを」
その手には青い石のついたペンダントが乗っていた。
リュシエンヌにはそれに見覚えがあった。リュファスと初めて城下に出かけたとき、リュシエンヌが気になったペンダントだった。
「これは」
リュシエンヌが何か言う前に、リュファスはリュシエンヌの首に手を回し、素早くペンダントをつける。
「そんな、もらえないです」
リュシエンヌは困惑した顔で遠慮するが、リュファスは首を振る。
「いいんだ。これはお前が持っていなければならなかったんだ」

「これがきっとお前を守ってくれる」
リュファスは青い石を持ち念を込めるようにして、額をつけた。
そのときに、リュファスの髪がリュシエンヌの頬をくすぐり、リュシエンヌは少し笑ってしまった。
それを見て、リュファスも微笑む。
最後に石に口づけ、リュシエンヌの胸元に石を戻す。

「お前に返そう」
「え？」
リュファスの言葉に驚いたリュシエンヌは目を見開いてリュファスを見る。

「リュファス様、それは」
「あっれ？お堅い団長様がこんな所で逢引きかい」
リュシエンヌの声に被さるようにして笑いを含んだ声が頭上から落ちてきた。
顔を上げると、にこやかな笑みを浮かべた、アベルと目が合った。その笑いはどこかからかいを含んでいるようにリュシエンヌには見えた。
「俺に気にせず、ささっ話を続けて」
笑顔のアベルとは対照的にリュファスは嫌な顔をする。
「続けられるか。…何だ？」
「何だとは失敬な。俺はただ休憩からなかなか戻ってこない団長を迎えに来ただけなんですよ」
話している間は気付かなかったが、リュファスが訓練場から出てきてからしばらくの時間が経過していた。
「分かった。先に戻っていろ。言っておくが、このことを広めたら明日の朝を迎えられないと思え」
「怖っ」
リュファスの威圧感にアベルは気押されたように後ずさる。
好奇心に目を輝かせつつもアベルは先に戻って行った。

「俺も行く」
リュファスが立ちあがり、リュシエンヌもついでに立ち上がる。
頭の上に温もりを感じ、リュファスを見上げる。リュシエンヌの頭を優しく撫でるリュファスの氷の瞳は暖かい色を浮かべ、リュシ

エンヌの視線をくぎ付けにした。
「また、話をしよう」
そう言ったリュファスは自然な動作でリュシエンヌの頬に唇を押しあて、去って行った。

残されたリュシエンヌは呆然とリュファスの後ろ姿を見つめ、頬に手をあてると赤面した。

第２２話　護衛と一緒

「あら？リュシエンヌ、どこへ行くの？」
アレクシアは、出かける荷物をもったリュシエンヌを不思議そうに見る。今日リュシエンヌは、昼からはアレクシアの傍にいるはずだったのである。
「すみません、アレクシア様。そういえばメイド長にお使いを頼まれていたことを今思い出しまして、すぐに行こうと思っているんですよ。ベレニスに声をかけておいたのですぐ来ると思います」
納得したようにアレクシアは頷いた。
「そう。それでは、オーギュスト」
「ぎょっ」
アレクシアが呼びかけると、突如黒一色に身を包まれた男が姿を現した。あまりにも突然過ぎたのでリュシエンヌは驚きでのけ反ってしまった。

「リュシエンヌ、オーギュストを連れて行きなさい。護衛として」
「えっいいですよ！オーギュストさんがいなくなったらアレクシア様を守る人がいなくなっちゃいます」
自分が城下に使いで出るくらいでオーギュストの護衛というのは何とも大袈裟すぎであるし、第一オーギュストを付けられても何を話していいか分からない。
「いいのよ…いいのよ私を守ってくれるのはオーギュストだけじゃないから」
アレクシアの言葉に部屋の外に待機している護衛騎士のことかと思ったリュシエンヌだが、彼らではオーギュストに比べると頼りなく感じてしまう。
「でも…」
「いいから行っておいでなさいな。帰ってきたらお茶にしましょ

うね」
有無を言わせない笑顔だった。
結局オーギュストと一緒に行くことになってしまった。
「暑くないですか？」
無言。
「メイド長も人使い荒いんですよね」
無言。
「それにしても疲れませんか？」
無言。
「……」

全部無視だ！最初の頃のリュファス様みたい。でも、リュファスの様の方がもう少しましだった気がする！

自分の言葉を全て無視するオーギュストにたいして悶々とした思いを抱えながらリュシエンヌは歩く。黒い布が巻かれているせいでどんな表情を浮かべているのかもわからない。
しかも、目立つ。
賑わう城下では人がひしめき合っているが、リュシエンヌ達の周りだけ人波が割れている。少し離れて歩く人々の好奇の目が二人に突き刺さる。気にしているのはリュシエンヌだけのようだが。

「すみません、すぐ買ってきますから」
リュシエンヌは悪いと思いながらも目立つオーギュストを店の前で待たせて買い物をしてこようと思い店の中に入ったリュシエンヌだが、何となく後ろを向くとすぐ傍にオーギュストがいた。
首を傾げるリュシエンヌだが、オーギュストはリュシエンヌの傍から離れない。

その行動にいぶかしく思いながらも考えることを放棄しリュシエンヌはオーギュストの自由にさせた。

目的のものを買いオーギュストを見ると目が合ったような気がした。

「それだけか？」

一瞬誰が言葉を発しているのか分からなかった。しかし、こんな所でリュシエンヌに話しかける人間なんてひとりしかおらず。

「えっえっと、これだけです。オーギュストさん」

「いつもこのようなことを頼まれているのか？」

「いえ？滅多にないんですけど…多分、私がメイド長が字を書いていた羊皮紙にお茶をぶっかけたせいだと思います」

オーギュストはまた無言になった。

改めて思うとリュシエンヌがオーギュストの声を聞いたのはこれが初めてだった。そのことに少し感動したリュシエンヌはオーギュストをキラキラとした眼差しで見つめた。

それ以上発してくれることはなかったが。

思った通り低くてかっこいい声だったなぁ。

オーギュストの声を聞けたということで意気揚々と帰って来たリュシエンヌは、城の門をくぐったところで王宮の方から歩いてきたリュファスと鉢合わせした。

「あ、リュファス様」

いつ見てもかっこいいなと見惚れているリュシエンヌにリュファスは眉をひそめる。

「リュシエンヌ、城下に出ていたのか？ひとりでは危険だ」

「大丈夫ですよ。今回はオーギュストさんに付いてきてもらったので」

リュシエンヌに言われて初めて気付いたというような顔でリュファスは後ろにいるオーギュストを見た。
「王女のところの護衛か…」
そして、鋭い眼差しで見つめる。見つめられたオーギュストもどこかピリピリとした空気を纏っている。
「え…え？」
睨みあっているだろう二人の間でリュシエンヌはおろおろとしながら二人を交互に見ていた。
周りに人もいるのだが、二人の醸し出す雰囲気が恐ろしすぎて三人に近付く者などいやしない。
ただその二人の間に挟まれているリュシエンヌに憐みの視線を飛ばすだけだった。

睨みあっているさなか、ふと視線を逸らしたリュファスは、オーギュストが見ているというのにリュファスはその身を屈め、リュシエンヌの耳に唇を寄せて呟いた。周りがわっと沸く。
「リュシエンヌ、王宮の外に出るときは俺に一言言ってからにしろ。可能な限り俺が付いていく」
そう言うとリュファスは、もう一度オーギュストをひと睨みしてから背を向けた。
「リュファス様どうしたんでしょうか？」
不思議そうにリュファスの後ろ姿を見ていたリュシエンヌだが、後ろで笑った気配を感じて振り向いた。
「さすが聖騎士といったところだ」
くつくつと低く笑った。
「え？え？…もう、何ですかこれ」
訳が分からずリュシエンヌはひとりぼやいた。

たくさんいる護衛騎士をかきわけて部屋に入ったリュシエンヌと

オーギュストは、その部屋の主に笑顔で迎えられた。
「お帰りなさい。もうそろそろ帰ってくるころだと思ってお茶の準備をしておいたわ」
言われて見ると、テーブルの上にはまだ暖かい焼き菓子が用意されており、リュシエンヌの目はくぎ付けになった。
しかし、その中で見慣れぬ灰色を視界に捉えてリュシエンヌは顔を上げる。
部屋の中には部屋の主であるアレクシア、アレクシア付きのメイドであるベレニス、そして見知らぬ女性がいた。
灰色のローブに身を包んでおり顔もフードで見えないがその身体のなだらかな曲線は確かに女性のものだった。
「ジェルトリュド、オーギュストも帰って来たしもういいわ。ありがとう」
アレクシアが言うと女性は優雅な動作で一礼して瞬く間にその姿を消した。
ベレニスも女性を気にした様子もなく淡々とポットのお茶をカップに入れている。
後ろを見るとすでにオーギュストの姿はなかった。
リュシエンヌは変な顔をした。それを見たアレクシアが不思議そうにリュシエンヌを見る。

「どうしたの？リュシエンヌ」

「なんでもないです」
もしかして自分だけが何も知らないのだろうかと思い、不安な気持ちになったリュシエンヌだった。。

第２３話　悪意にさらされる

青い青い空の下、リュシエンヌは何故がびしょ濡れだった。これは雨でも、リュシエンヌがバケツをひっくり返した訳ではない。
上にいる人の悪そうな笑みを浮かべている彼女たちが原因である。窓から顔を出した彼女たちは身を寄せ合って笑みを浮かべている。
「…お似合いよね」
そう言ってまたクスクス笑う。
「あ…」
どこかで見覚えのある顔だと思ったら、その真ん中にいる彼女はリュファスに憧れていたメイドだった。リュファスを見ている時のキラキラとした目はどこに隠されたのか、その顔は醜い顔に染まっていた。目の前にいる人物によってこうも変わるのかとリュシエンヌは驚く。
しばらく彼女たちの様子を見ていたリュシエンヌだが、興味を失ったかのように彼女たちから視線を逸らしてモップを持ちつつその場から立ち去った。

「リュシエンヌ！どうしたんだ」
ご飯を分けてもらおうと厨房へ行くと仲のいい料理長がリュシエンヌの姿を見て目を丸くした。
「えへへ、ちょっと水かぶっちゃって」
照れ笑いをするといつものことかと料理長は頷く。
「いいけど、身体が冷えるから。風邪はひくなよ」
そう言いつつ、残り物の料理をリュシエンヌの為に皿に綺麗に盛り付けて出してくれた。
リュシエンヌの表情が輝き手を合わせすぐに料理にかぶりつく。
「いほつけへるほー」

食べながらしゃべるリュシエンヌ、何を言っているか分からないが離しながらでも食べこぼしをしないその技術は素晴らしかった。
「何言ってるかわからん」
「ほうひほうあはひふへふへ？」
「ああ、もういい食べることに集中しろ。…しっかし、こんなに食べてもなんで太らないんだ」
呆れたようにリュシエンヌを見た後、料理長はそっとため息をついた。しかし、それでも微笑ましそうに懸命に料理にかぶりつくリュシエンヌを見ていた。

「あなた、何してたの」
アレクシアの部屋に入っていきなりベレニスに両頬を左右に引っ張られた。
「ひーっ！いひゃい、いひゃい」
リュシエンヌは涙目になりながらベレニスに痛みを訴えるが冷たい視線が帰って来ただけだった。
やっと解放されたリュシエンヌは赤くなった頬を押さえる。
「痛いよ…」
「今までどこに行っていたの！アレクシア様が帰ってきてしまうじゃないの！」
そう言うリュシエンヌと同じくベレニスの手にも箒が握られていた。
「もう部屋は掃き終わったわ。後はモップをかけるだけよ」
「はぁい」
「くれぐれも散らかしはしないでね」
「はあい」
「あら？あなた髪の毛湿ってるわよ」
ベレニスの声にリュシエンヌの肩が揺れた。
「ああ、これさっき噴水に飛びこんじゃって」

そう言って笑うリュシエンヌにベレニスは微妙な顔をしたがすぐに呆れた顔をしてため息をつく。

「まったく」

「ははは」

「よく集めたなあ」

突如渡された桶、その中にはうごめく虫、虫、虫。渡してきたメイドはすでにいなかった。このありきたりな虫、足引っ掛け（リュシエンヌが転ぶと周りがえらいことになる）などの色々な嫌がらせはなかなか止まなかった。

それが起こり始めたのはこの前の一件からだった。オーギュストと買い物に行ったリュシエンヌは帰りにリュファスと出くわしてしまった。そのときリュシエンヌがリュファスと親しげに話していたところをメイドに見られたのがことの始まりだった。

最初は些細ない嫌がらせ程度だったが、リュシエンヌが堪えていないと知るとその手口はだんだんと大胆になっていった。

嫌がらせは頻繁に起こっているのできっとあの彼女だけではないのだろう。多くの女性たちがリュシエンヌに嫉妬しているのが分かる。

それだけリュファスの人気は絶大で、それだけリュシエンヌは周りから認められていないということを理解できる。

「別に虫は嫌いじゃないけど」

そう呟いて桶いっぱいに入った虫を庭に逃がしてやった。

桶を返しに行き、戻って来たリュシエンヌは部屋に入るとさすがに唖然とした。

「これは…」

部屋の中がえらいことになっとる。

部屋の中にまでは入られはしないと思っていたが、それは甘い考えだったらしい。

おびただしいほどの泥と引き裂かれたベッドやカーテン、自分の部屋の惨状を見た。さすがにここまでやるとは思わなかった。

リュファス様の魅力恐るべし！…悪化させないで掃除することができるかな？

悪戦苦闘しながら何とか部屋の泥を綺麗にしたリュシエンヌは泥だらけになってしまったベッドのシーツを洗いに洗濯場にやってきた。

カーテンもベッドのシーツもかなり酷く引き裂かれていた。カーテンはただ引き裂かれていただけだったので部屋に置いてきて後で縫い合わせることにした。しかしシーツの方は泥で汚れていたのでまず洗ってから縫うことにした。

しかし、なかなか落ちない。

「あれ？リュシエンヌ何やってるんだい」

シーツを洗っている時に声をした方を見るとそこにはマテューがいた。いつものように簡素な格好で、とても貴族の従者とは思えない。

「マテュー」

呆れたようにマテューを見る。

「マテュー、仕事はした方がいいよ」

「リュシエンヌにそれを言われるとは思わなかったよ。…何かすっごく泥が付いてるよね」

マテューが問いかけるとリュシエンヌは曖昧な顔をして答える。

「まあ、ちょっと汚しちゃって」
「そっか、それじゃあこれ」
マテューから渡されたものを見てリュシエンヌは驚く。
小さいが確かにこれは石鹸だった。
「…いいの？」
「うん、主人が要らないからってくれたんだけど、俺は使わないから」
「嬉しい、いい匂いがする。こんなの使えて私役得だよ」

マテューは黙り込んだ。そして笑顔を消して言う。
「リュシエンヌって意外と優しいんだよね」
マテューの突然の言葉にリュシエンヌは目を見開く。
「こんなにひどいことをされても誰にも言わない。リュファス騎士団長にすら言う気はないんだろう？」
リュシエンヌの現状を理解しているとしかいえないマテューの今の言葉にリュシエンヌは盛大に驚いた表情をした。
濁すことはできたはずだが、マテューが確信を持って話しかけているのが分かるのでリュシエンヌには素直に答えるほかは出来なかった。
「いいよ、別に私自身が傷ついてるわけじゃないし…それに洗濯の練習ができていいしね。石鹸ももらえたし」
「傷つけられてからは遅いんだよ」
諭すようなマテューの言い方に、リュシエンヌは戸惑った。いつものマテューからは考えられないほど静かでそして感情のない言い方だったからだ。
リュシエンヌの耳から聞こえる周りの音が遠くなる。
「ただ許すだけだというなら、ただ甘いだけだよ。それはリュシエンヌの為にも相手の為にもならない」
マテューの言葉にリュシエンヌは何も言えず困った顔をした。

しばらくリュシエンヌを見ていたマテューはやがてため息をついた。
「まあ、お人よしリュシエンヌのいいところだと思うけどね。……意外と冷酷なリュファス騎士団長とお似合いだよ」
「…うん」
小さく付けたされた言葉を聞き取ることができずリュシエンヌは頷くだけにしておいた。
そして綺麗になったシーツを広げ満足そうに頷く。
「綺麗になったし、干しに行くね」
「うん、それじゃあね」
「あっマテュー」
「ん？」
「石鹸ありがとう」

リュシエンヌの後ろ姿を見ながらマテューはぽつりと呟いた。
「まあ、リュシエンヌが言わなくても周りが勝手に嗅ぎつけてくるだろうけどね…」

第２４話　憎悪と愛情（前書き）

ほんの少しですが流血表現があります。
苦手な方はご注意ください。

第２４話　憎悪と愛情

「いたっ」
好物のナレの葉のバターソテーを咀嚼していたときだった。突如、口の中に痛みを覚えてリュシエンヌは思わず異物を吐き出す。

よくよく見てみるとそれは硝子の破片のようだった。透明だったので気付かなかったが、その破片は決して小さくはなかった。もしもリュシエンヌが途中で気付かずに飲みこんでいたら生死に関わる事態になっていただろう。
「りゅっリュシエンヌ！」
リュシエンヌはあっけにとられて破片を凝視しているとベレニスの慌てた声を聞いた。
「ヘレニス…？」
ベレニス、と呼んだつもりだったがうまく名前を口にすることができなかった。
じんわりと生温かいものが口の中に広がっていく。そしてそれはすぐさま口の中でかさを増やし唇の端から伝った。
「血が！」
「え？」
「しゃべらないで！……口をそっと開けて」
ハンカチを持ったベレニスに言われたとおり口を開ける。口の中を見てベレニスが顔を盛大に歪めたがリュシエンヌは気付かなかった。
「っ……医務室へ行きましょう、リュシエンヌ？」
ベレニスの声を遠くに聞きながらリュシエンヌは、そう言えば今日は見慣れぬメイドから食事を受け取ったなあ、とぼんやりとした頭で思った。

あの出血量の割にはそこまで大したことのない傷だったが、それでも小さな破片は口の中に無数の小さな傷を作り、その痛みがリュシエンヌを苦しめる。
その痛みのせいでせっかくの茶会の支度もなかなか集中して出来ない。
作業をしながら時々顔をしかめるリュシエンヌにアレクシアは気付く。
「リュシエンヌどうしたの？」
リュシエンヌの代わりにベレニスが答える。
「昼食の時食事に何かの破片が入っていたらしくて口の中を切ってしまったんですわ」
「破片なんて滅多に入る物ではないわ。リュシエンヌ、あなた心当たりある？」
アレクシアの何かを探るような問いかけにリュシエンヌは黙ってゆるゆると首を振った。その姿にアレクシアはため息をついて肩を落とした。
「リュシエンヌ、今日はもういいわ。自分の部屋で休みなさい…ベレニス、リュシエンヌを部屋に」
「はい」

リュシエンヌがベレニスと共に部屋を出て行ったあとアレクシアはぽつりと呟いた。
「本当に馬鹿なことをしでかしてくれたわ」

もうひとりで帰れるから、と渋るベレニスと説き伏せ部屋の近くで別れた。
とぼとぼと部屋に戻っていると部屋の前にリュファスを見つけた。

リュシエンヌは慌てて壁の影に隠れる。
リュファスが扉から離れるまでリュシエンヌはずっと様子を窺っていた。姿が見えなくなったのを確認してリュシエンヌは息をついて部屋に戻る。
いじめと呼ばれるものを受けるようになってからリュシエンヌは何となくリュファスと距離を置いていた。訓練場にも近付かなくなり、就寝時以外は部屋に帰らないようにしていた。
しかし、それはリュファスと一緒にいることでメイド達の報復を恐れてのことではない。
ただ、いじめを受けている自分の姿はリュシエンヌ本人が堪えてなくても傍から見れば情けない姿だと理解していたので、その情けない姿をリュファスに見られたくなかったのである。
リュシエンヌはベッドに座り深いため息をついた。

次の日アレクシアの元へ行くとしばらくの間部屋からの外出禁止を言い渡された。
驚いたリュシエンヌがアレクシアに理由を聞いたところまずアレクシアに謝られた。
どうやらアレクシアやベレニスはいじめに気付いていたらしい。
たいしたことはしないと思い泳がせていたのだがこんな行動をとるとは思っていなかったと言われリュシエンヌは今日、仕えてから初めてアレクシアに謝られたのだ。
アレクシアは何とかすると言い、それまで極力部屋から出ないように注意された。

しかし、部屋にいてもすることがなく退屈で仕方がない。
普段部屋にいることがないので暇つぶし用の道具もない。口の中も痛くて仕方がない。
落ち着かないリュシエンヌがベッドの上でゴロゴロとしていると

お腹が鳴った。動きを止めて自分のお腹を見る。
時計を見る、しかしまだ夕食の時間にはだいぶ早い。
どうしようかとリュシエンヌが逡巡しているとまた鳴った。駄々をこね始めたお腹はリュシエンヌでさえなだめることはできない。
我慢できなくなったのでこっそりと誰にも見つからないように厨房へ食べ物を分けてもらおうとリュシエンヌは部屋を出た。

後で空腹を我慢して部屋で大人しくしていればよかったと後悔してももう遅い。
リュシエンヌは厨房へ向かう途中の階段でひとりのメイドと対峙していた。
見覚えがある、リュシエンヌに水をかけたメイドだ。そして、リュファスに想いを寄せていた彼女だった。
メイドは憎悪の籠った眼差しでリュシエンヌを射抜く。階段の上から見下ろす形で向けられるその眼差しにひるんで後ずさろうとしたが自分のいる場所が階段の途中だということを思い出し、踏みとどまる。
「……んで」
「え？」
「何であんたなのよ！」
悲痛な叫びだった。

「リュファス様はっ……なんでなのよ！！あんたじゃなくてアレクシア王女だったらよかったのに」
自分たちの関係を知っているような口ぶりのメイドにリュシエンヌは目を見開く。リュファスと二人で話しているところでも見られたのだろうか。何にしろこのメイドは自分たちの近しい仲を確信し

ている。
あのときリュシエンヌが見た彼女のリュファスに向けていたキラキラとした眼差しは身をひそめ、その瞳は暗く淀んでいる。
「死ねばよかったのに！！……本当にしぶとい女」
血反吐をはくような声にリュシエンヌは直感した。

ああ、今までのことは全てこの人が関わっていたことなんだろう。
確かに今回のリュファスとのことでリュシエンヌを気に食わなく思った他のメイドも多少なりとも関わっていただろう。しかし、このメイドは全てにおいて率先してリュシエンヌを陥れようとしていたのだろう。そう、感じた。
他のメイドに比べると瞳の中に映る憎しみの桁が違う。
狂ったようにメイドは言う。
「消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ。…私とリュファス様の前から消えろ」
（怖い…）
自分に向けられる混じりけのない純粋な憎悪にリュシエンヌは恐怖を覚えた。
メイドが近づいてくる。メイドの身体から溢れだす悪意と憎悪に、足がすくんでリュシエンヌはその場から動くことができなかった。

メイドが笑みで顔を歪める。
「死ねよ」

胸を勢いよく押される。足場を失った身体は宙に投げ出された。
一瞬浮いた身体は重力に逆らうこともできずそのまま落下していく。
リュシエンヌは強く目を瞑った。しかし、叩きつけられるような

衝撃は来なかった。

身を包み込む暖かな感触、最近やっと慣れてきた優しい匂いにリュシエンヌは思わず泣きそうになった。

ゆっくりと目を開けると凍りついた表情のメイドの顔が見えた。

頬を撫でる感触に見上げてみると思い浮かんでいたとおりの赤い髪が視界に入る。

「リュファス様…」

呼びかけるといつも微笑んでくれていたリュファスだが、今は厳しい眼差しで前を見つめていた。

第２５話　恋に戸惑う

その場を沈黙が支配する。
凍てついた空気の中、普段気にも留めないはずの自分の息遣いが妙に目立つ。
リュシエンヌは動くことができなかった。
リュファスに身体を抱き込まれているせいもあるが、リュファスから溢れるように発せられる鋭い空気で身体が動かなくなってしまったのだ。
永遠に続くかと思われた沈黙を破ったのは、メイドだった。
「りゅ、リュファス様」
どこか懇願するような、許しを乞うような声。突然のリュファスの登場で動揺したせいなのか潤んだその瞳にはリュシエンヌに向けたあの凄まじいほどの憎悪はもうない。
あのときと同じ恋する女の目をしていた。
しかし、リュファスはそんな彼女のことなど気にせず、顔を歪める。

「胸糞が悪くなる気配だ」

地の底から響いてくるような低い声、ただ言葉を発しているだけのはずなのに、傍にいたリュシエンヌはその底の知れない声が鮮明に聞こえ身体を震わせたが、階段の上部にいる彼女には聞こえなかったらしく軽く眉をひそめる。
「憎しみに染まった心を魔に付け入られたか」
「え？」
メイドの言葉には答えず、リュファスは腕の中のリュシエンヌを覗き込む。

「大丈夫だったか、リュシエンヌ」
「へっ？…あ、はい。大丈夫です」
「よかった」
抱きしめる力を強められリュシエンヌは顔を赤くする。
リュファスがあまりにも愛おしそうにリュシエンヌの髪を撫でるのでリュファスと目が合ってしまったリュシエンヌは音がリュファスに聞こえてしまうのではないかというくらい心臓が脈打つ。
「あっ…あの」
リュシエンヌが何も言うことができずどもっていると、
「リュファス様っ」
悲痛な声だった。
はっとしてリュシエンヌは声のした方を見る。その瞳は傷ついた様子がありありと浮かんでおり、リュシエンヌを通り越してリュファスを見つめていた。
しかし、リュファスの彼女に向ける眼差しは射るように鋭く冷たかった。
「闇の気配がまとわりついている…リュシエンヌ、俺の後ろに」
リュファスはリュシエンヌをそっと床に下ろし、背に庇うようにメイドに向き直った。
「私をっ…見てください！」
リュファスが自分を見たことで微かな自信を持ったのか、大きく手を広げて自分の存在を主張する。彼女の視界にはリュシエンヌなどもはや映ってはいなかった。
彼女にとってはリュシエンヌを落とそうとしたことなどとうに忘れ去っていることだろう。彼女にとってリュファスという存在はそれほどまでに強大で尊きものなのだろうと、リュファスを前にしたメイドを見てリュシエンヌは推測した。
「簡単に闇に心を捕らわれるお前など見たりはしない」
今度はメイドにも聞こえるようにはっきりと言った。言われた彼

女の瞳が絶望に染まる。
メイドの嘆願を冷酷に切り捨てたリュファス。その姿を見て何故かリュシエンヌはちくりと胸が痛み軽く胸を押さえた。
後ろにいるリュシエンヌの様子など知りようもなく、リュファスはメイドに向かって手をかざす。

「悪しきものよ、消えろ」
風もないのにマントがはためき始めた。リュファスの近くにいたリュシエンヌにはリュファスの身体が光を帯びていることに気付く。
突如現れた小さな光が爆発となってその場にいた三人を包み込む。

リュファスのマントで隠れてはいたが、あまりにも強烈な光で視界を奪われたリュシエンヌが目を開けるとメイドが力なくへたり込んでいた。
その瞳は虚空を見つめ、意識があるのかどうかはリュシエンヌの場所からでは確認することができなかった。
「リュファス様っ…あの人は」
「心配するな。身体と心に巣くっていた闇をはらっただけだ。その影響でしばらくはあの調子だろうが、じき元に戻る」
様子がおかしいメイドに慌てるリュシエンヌにリュファスは何事もないように言った。

「とりあえず、あの女を連れて行こう。ギデオン」
名を呼ばれた男はすぐに姿を現した。リュファスの部下なのだろう、ギデオンと呼ばれた男は礼儀正しく起立しリュファスの次の言葉を待っている。
「連れて行け」
「はっ」
ギデオンは一礼し、座り込んでいるメイドを乱暴に立たせ連れて

行った。
一連の流れるような一部始終をリュシエンヌは呆然と見守るしかなかった。

「リュファス様…あの人はどこへ」
「アレクシア王女の所へ」
思いもよらなかった人物の名前がリュファスの口から飛び出し、リュシエンヌは目を瞠った。
「彼女のしでかしたことは罪だ。追ってお前の主人であるアレクシア王女よりしかるべき罰が与えられる」
「そんな」
悲鳴のような声を上げたリュシエンヌにリュファスは厳しい目を向ける。
「お前は、あのような仕打ちをされてもなお、あれらを許すのか？」
リュファスから咎めるような眼差しを向けられリュシエンヌは身を竦ませる。そして、少し困ったように言う。
「でも、あの人はただリュファス様が好きで…だから私が嫌いで」
「その好き嫌いでお前は二度も殺されかけたんだぞ」
空気が止まった。
「どうしてそれを…」
「俺が知らないとでも思ったのか？」
驚くリュシエンヌにリュファスの氷の瞳が諌められる。
「お前が怪我をしたと人づてに聞いて俺がどんな思いだったか分かるか？もしかしたら、死んでいたかもしれないと聞いた」
肩を強く掴まれる。
「今回もそうだ。もし俺が受け止めなかったらお前はどうなっていた？お前の身体が投げ出されたとき…心臓が凍りついたあのときの感覚…お前にはわからないだろう」

肩を掴んでいる手が小刻みに震えている。いつも鮮烈な輝きを放っている瞳は今は力なく伏せられており見ることができない。
その姿を見てリュシエンヌは激しく後悔した。
何故リュファスに言わなかったのだろうと。何故避けてしまったのだろうと。
リュシエンヌの後先も考えていなかった愚かな行動でリュファスは傷ついている。
どうすればいいか分からなかった。

「ごめんなさい」
悩んだリュシエンヌはリュファスの首に手を回し抱きついた。言葉で何も言うことはできなかったのでリュシエンヌは行動することにした。
リュファスが驚いた気配がしたが、リュシエンヌは離さなかった。感謝と謝罪を込めてリュシエンヌは力いっぱい抱きしめる。
やがて、リュファスの手がリュシエンヌの腰に回る。

温もりを感じる。互いが生きている証拠としてふたりは感じている。
「身の危険を感じたらすぐに知らせてくれ……どうか自分を軽んじないでくれ」
懇願するような声にリュシエンヌは無言で頷いた。

リュファスはリュシエンヌを離し、手を取る。
「久しぶりなんだ。ゆっくり話をしよう」
その微笑みはいつもリュシエンヌに向けてくれる笑みだった。その笑みを見れたことにリュシエンヌは安心した。
「はい」
リュファスの笑顔を見ただけでもうメイドのことを忘れしまいそ

うな自分を残酷だと思いながらリュシエンヌは笑顔で返事をした。

第２６話　引き裂かれる

突然、訓練場の扉が乱暴に開かれた。そしてその扉からひとりの騎士が現れた。
騎士の格好は酷いもので鎧は割れ、服は破け、所々に大量の出血をしていた。
「カロン？」
騎士に気付いた同僚騎士が叫ぶ。
「その傷はいったいっ？」
傷だらけの騎士が何かを言う前にその身体が傾いた。同僚騎士は慌てて駆け寄り、崩れ落ちる騎士を慌てて抱きとめる。
「カロン…いったい…」
「どうした」
ひしめき合っていた騎士の人波が割れる。
アベルを伴ってリュファスが現れた。今にも意識を失いそうな騎士はリュファスの姿を視界に留め叫んだ。
「ひ、東の森に魔物の大群発生！警備にあたっていた騎士隊は壊滅しました」
リュファスの眉間に深い皺が寄った。

魔物が出現したのは、魔物が多く徘徊するとされている西の森ではなく、隣国との国境に近い比較的安全とされていた東の森である。
安全とされていたが故に警備の方もそれほど厳重ではなく魔物の大群に襲われたとき対処できなかったのであろう。
そのせいで多くの騎士の命が失われた。
リュファスは目を瞑る。
周りの喧騒が止む。
見えなくとも周りがリュファスの団長としての言葉を待っているのが手に取るように分かる。

「二日後、東の森へ魔物討伐に向かう。第一から第四部隊は俺と共に討伐に向かう。残りは副団長アベルの下で城の警備にあたれ」

ひと段落ついてやっとリュファスの近くにいられると思った矢先のことだった。

しばらく王宮は騒がしかった。

東の森に出没した魔物の大群を団長リュファス・フランヴィル率いる騎士団が討伐に向かうことはすぐさま王宮内に知れ渡ったからだ。

「リュファス様、忙しいみたいね」

「そうだね、団長だもん。今のリュファス様には恐ろしくて近づけないよ」

リュシエンヌはもきゅもきゅとパンを頬張りながら笑う。

そのリュシエンヌの様子に動いていた手を止めてベレニスは顔をしかめた。

「あ、ベレニス食べないの？私もらってもいい？」

「いいけど」

しばらく手を動かさなかったせいで勘違いしたリュシエンヌに対して何も言う気が起こらずベレニスは了承した。

リュシエンヌは行儀悪くフォークを突き刺し、ベレニスのものだった肉を奪っていく。

ベレニスはその様子を観察するように見つめる。

ベレニスから見てリュシエンヌは特に変わった様子はなく、行動にも変わりはない。リュファスが遠征すると分かっていても、だ。

だから、たまらずにベレニスは聞いてしまった。

「リュシエンヌ、あなたリュファス様のことが心配じゃないの？」

リュファスが魔物討伐に向かうと知っていてもいつもの態度を崩

さないリュシエンヌに耐えきれなくなってベレニスは言った。
そんなベレニスをきょとんとした目で見た後リュシエンヌは微笑んだ。
それは同性であるベレニスもどきりとするような穏やかで切ない笑みだった。
「リュファス様は絶対に帰ってくるって、言ってくれたの」
ベレニスは息を飲んでリュシエンヌを見つめる。
「だから私は信じる」
そう言ってまたリュシエンヌは肉にかぶりついた。
リュシエンヌを見てベレニスは自分の言ったことを後悔した。
騎士団出発前日の会話だった。

討伐の日程が決まってからリュファスはリュシエンヌの部屋を訪れて静かに言った。
『魔物の討伐に向かうことになった。いつ帰れるかはわからない』
リュシエンヌは驚くわけでもなく少し笑みを浮かべながら言う。
『はい、ずっと待ってますから』
微笑みを浮かべているのにどこか泣きそうなリュシエンヌの歪んだ笑顔を見てリュファスは苦しそうな顔をしてリュシエンヌを抱きしめた。
『すまない』
お前にそんな顔をさせて。

リュファスの出発が明後日に迫った夜のことだ。
リュシエンヌはベランダに出ていた。いつもは人通りの多い傍の回廊も今は人気もなく静まっている。
月のない夜だった。あたりは深い闇でリュシエンヌ自身も闇に呑まれてしまうような錯覚をするほどだった。

漆黒の闇を保つ空を見上げる。

リュファスは遠征の準備でかなり忙しかったらしくなかなか会えなかった。会えてもほんの数分会話するくらいで終わってしまっていた。

仕方ないと思ったがやはり少し寂しい。

明日夜を迎えたらリュファスは出発してしまうのだ。

そう考えて落ち込む。

皆口々に危険だと言う。

魔物が蔓延る場所へ聖なる騎士を行かせていいものか、とい言う人間もいる。

例えリュファスが聖なる騎士といえども危険なことには変わりない。

魔物は危険。

いくらリュシエンヌが世間に疎かろうがそれくらいは知っている。

しかし、リュファスは聖なる騎士であり、王国の騎士を束ねる騎士団長でもある。団長であるリュファスが率先して行かねば誰が行くというのだ。

リュファスは強い。しかし、もしも、という気持ちもあった。

リュファスを失ってしまったら自分はこの先どう生きていけばいいのか分からなくなるくらいリュファスという存在はリュシエンヌにとって大きなものになってしまった。

考えると苦しくて苦しくて仕方がない。

らしくもなく暗い考えに浸っていると急に後ろから身体をマントで包みこまれる。

最初は驚いたリュシエンヌだったが、慣れた匂いと青いマントが後ろにいる存在を示し、すぐさま安心したように少し体重を預けた。

「身体が冷たい」

「今はあったかいです」
リュファスの体温が冷えたリュシエンヌの身体を心地よく温める。
「明後日東の森へ行く」
「はい」
リュシエンヌはリュファスを見ずに答えたが、顎を取られ上を向かされる。慌てて顔を逸らそうとするが、顎が固定され動かすことができない。
氷の瞳に見つめられリュシエンヌの身体はわけもわからず硬直する。
リュファスは自分の顔をリュシエンヌの顔に近づける。そして吐息のあたるくらいになってそっと言う。
「必ず帰ってくる。お前の元へ」
そしてゆっくりと唇を重ねる。リュシエンヌは驚き目の前にあるリュファスの顔を凝視する。
「約束だ」
確信を持って紡がれるその言葉にリュシエンヌは顔をくしゃっと歪めて頷いた。

大丈夫、リュファス様はきっと無事帰ってきてくれる。

かくして、リュファス・フランヴィル率いるオージュ王国騎士団は大勢の民衆の見守る視線を背にして魔物討伐へと出発したのである。

第27話　去っていく人

薄いカーテンで太陽の刺すような光は柔らかな日差しへと変わる。それでも差し込む日差しにリュシエンヌは目を細めながら窓際に立つ。

そして花瓶の水を取り換えながら彼女に話しかけた。

「ノエル見て、花が綺麗だよ」

リュシエンヌの言葉に彼女はベッドに座り虚空を見つめている。

「でも、やっぱり地面に生えてる花の方がいいかな…今度見に行こうね」

ベッドの傍らに座って返事をしない彼女。

リュシエンヌを殺そうとした彼女。

彼女はあのときからずっとこの状態だった。ひとりで動くことはもちろん話すこともできない。ただ虚ろな瞳で前を見ているだけだった。

リュシエンヌは仕事の合間を縫って彼女の部屋に彼女の世話をしに来ている。

本当は同室のメイドがやればいいのだが、同室のメイドは事件が起こった日からしばらくして出て行ってしまったのだ。

だからリュシエンヌはノエルの世話をしている。

「もう一週間経つのにね」

彼女はずっとこのままだった。

三日前、リュシエンヌは彼女の部屋の扉をノックしようとして彼女と同室のメイドとはち合わせた。

メイドもリュシエンヌも驚いた顔をしたが、メイドはリュシエンヌの顔をまじまじと見て、それからぽつりと言った。

「あなた、リュシエンヌ？」

名を言い当てられさらに驚いた表情をしたリュシエンヌにメイドは納得がいったように頷いた。
「ノエルに会いに来たの？」
それがあのメイドの名前なのだろう。リュシエンヌは軽く頷く。
メイドを見ると苦い顔をしていた。
何故そんな顔をするのだろうかと思ったリュシエンヌにメイドは言う。
「あの子に会うのならやめておけば？何の返事もしないし、ベッドの上からまったく動かないから」
そう聞いてまだあの調子なのかとリュシエンヌは驚いた。リュファス曰く二、三日で元に戻るということだったので日をおいて尋ねてみたのだが、まだ元に戻ってはいないらしい。どうしてだろうと頭を悩ませた。
心配しているリュシエンヌの様子を知ってか知らずかメイドは軽く、まあ当然の報いよね、と言った。
リュシエンヌが訳が分からず首を傾げるとメイドは少し眉間に皺を寄せてリュシエンヌを見る。
「あなたに手を出したんだから。罰が下ったんだわ…リュファス様はあなたを大事にしているって噂を信じないであなたに危害を加えたあの子の罪ね」
平然と言う彼女の言い草にリュシエンヌは驚く。それを当然のように言い放ったメイド自身に驚いた。
そしてメイドは自嘲したように言う。
「私も最初は噂なんて信じてなかったし、なんであなたが？って気持ちだったわ。だからあの子たちのやってること止めなかった」
メイドは一度俯いておもむろに顔を上げ言った。
「だから私がここを出て行かなきゃならないのも当然の報い」
メイドの最後の言葉にリュシエンヌは絶句した。
「……出て行く？」
「ええ、あの子のことをただ静観していた私は許されなかった。

だから王宮から追放。なんでそんなこと知られていたのかわからないけど、当然よね」
リュシエンヌの頭に黒ずくめの背の高い男が思い浮かんだ。
「でも、そんなのは…」
「いいのよ。どうせこのままいても罪の意識で苛まれることになっていただろし。逆に罰を与えてもらった方がよかったわ。逃げかもしれないけどね」

「でも、問題はノエルなのよ…」
晴れ晴れとしていた顔が途端に深刻そうになる。
「まったく動けない状態だし、家族も受け取りを拒否しているし、正気に戻るまでしばらくはここに置いておくつもりらしいけど、動けないこの子の世話をする人がいないの。私はもう出ていかなければいけないし」
メイドはリュシエンヌの手を握る。
「こんなことあなたに頼むのは間違っているのは分かってる。でも、お願い。この子の世話をしてあげて」
そして苦しそうな声で呻くように言う。
「あの子にはもう誰もいないのよ」
このメイドを見ていると心からノエルのことを心配しているように見える。
貶すような言葉を向けても同室の彼女のことを心配するメイドにリュシエンヌは好感を持った。彼女の願いに応えるようにリュシエンヌはメイドの手を握り返し大きく首を縦に振った。
「そんな、私ができることだったら何でもするよ」
やるぞっと意気込むリュシエンヌの姿を見て、メイドは悲しそうな顔をした。
「そうだったのよね…私も、あの子もあなたと話していればこんなことは起こらなかったかもしれないのに」
ぽつりと呟いた言葉はリュシエンヌには届かなかった。

「もう行くわ。すぐに出ていかなければいけないから」
メイドは床に置いてあった荷物を抱えて歩きだす。
外に向かっていた足を止め、ゆっくりとリュシエンヌを振り返り、
「本当にごめんなさい」
最後に彼女はぽつりと一言言った。
去っていくメイドの真っ直ぐな後ろ姿をリュシエンヌは目に焼き付けるように見続けた。

彼女とは良い友達になれたかもしれない。

それからリュシエンヌは仕事の合間を縫ってノエルの世話をしに来ている。
話しかけても彼女は何も答えないがそれでも根気よく話し続けた。
今日もリュシエンヌだけが話し続けて夜が来た。

ノエルを寝かせて部屋の扉を開けたとき、マテューがいたときは悲鳴を上げそうになった。
「ななな」
動揺しているリュシエンヌを見て呆れたような顔をする。
「本当、リュシエンヌって甘ちゃんだよね」
全て知っているかのような口ぶりだった。
「いいの、私が自分で考えてしてることだから」
つんと顔を背けリュシエンヌが言うとため息が聞こえた。
窺うようにマテューを見ると彼は微笑んでいた。包み込むような柔らかい笑顔をリュシエンヌは呆然と見つめる。
「まあ、別に嫌いじゃないけど」
からかうような言い方に我に返ったリュシエンヌはむくれながら言う。

「て、何でマテューが知ってるの？しかも、また勝手に独り歩きして」
「ぶらぶらしてると色々と情報が入ってくるものなんだよ」
リュシエンヌはさらに膨れた。そんなリュシエンヌを見てマテューはさらに笑う。
「リュシエンヌがそんなんじゃリュファス様も心配で城から離れるときは大層迷っただろうね」
マテューの言葉にリュシエンヌは首を傾げた。
マテューはリュファスを知っているような口ぶりだった。しかし、従者と騎士とは基本接点がない。それならばどこで知り合ったのだろうか。
「マテュー、リュファス様知ってるの？」
リュシエンヌの言葉に視線を遠くに向けていたマテューがはっとなる。そしてリュシエンヌを見て曖昧に笑う。
「昔、ちょっとお世話になったんだ」
ふーん、とリュシエンヌは頷いた。
あっとマテューが声を上げた。
「俺、もう行くよ。こんな所で話してる場合じゃなかった。リュシエンヌ、くれぐれも無茶なまねはしないようにね」
そう言い残すとマテューはいそいそと去って行った。
残されたリュシエンヌは変な顔をしてマテューの去って行った方向を見た。
「マテューから話しかけてきたのに」

第２８話　花見に行こう

花が弾けた。衝撃で散った花弁はひらりらりゆっくりと地面に舞い落ちる。客観的に見るとそれは美しい光景なのかも知れないが、その花をぶつけられた身としてはいただけない。

リュシエンヌは、唖然として目の前を見た。視線の先には強い眼差し。

花瓶を投げられなかったのは幸いと思ったのはリュシエンヌだけだろうか。

しかし、身体は痛くなくても心がちくりと痛んだ。

リュシエンヌは、混乱しながら目の前の存在に話しかける。

「ノエル…」

「気安く呼ばないで」

初めて正面から対峙したときと同様に射るような眼差しを向けられる。

ノエルは、厳しい顔つきで吐き捨てるように言った。

「出て行って」

リュシエンヌは何も言うことができずその場を後にするしかなかった。

後に残った無残に散った花がそのときのリュシエンヌの心情を表しているかのようだった。

その日はいきなりのことでリュシエンヌも動揺してしまい大人しく引き下がってしまったが、元々はそれを覚悟で来ていたのだ。

ノエルが元に戻ったのは喜ばしいことなのだから。

次の日は扉の前で両頬をはたいて気合を入れなおし扉を叩いた。

きっと入れてはくれないので勝手に扉を開け部屋に入る。
出迎えたのは、昨日と同じような歪んだノエルの顔。
「ノエル、こんにちは。今日もいい天気だよ」
リュシエンヌは床を見た。そこには昨日と全く同じ状態で残された花が落ちていた。心なしか萎れている。
「ああ、枯れちゃったね」
「昨日ので分からなかった？私は、あんたの顔を見たくないんだけど」
散った花を拾うリュシエンヌにノエルは冷たい言葉を投げかける。
ノエルの言葉にリュシエンヌの心のどこかが痛む気がしたが、それでも笑顔をノエルに向けた。
「でも、わたしはノエルに会いたかったよ」
再びノエルは顔を歪め、俯いた。そしてぽつりと呟く。
「分からない。どうしてあんたは私にそこまで構うの？あんたを殺そうとしたのよ」
歯に衣を着せぬ言い方だったがもっともな質問だった。
「それなのにあんたは廃人みたいになった私の世話をしに来てたわよね、確か…本当に分からない」
意識がないと思っていたが、微かにはあったらしい。それが嬉しくてリュシエンヌは思わず微笑んでいた。
「そんな、ほっとけるわけないよ」
リュシエンヌの言葉にノエルは唖然とした顔をし、そして口を引き結んだ。その表情を見てリュシエンヌは苦笑した。
「長くなっちゃったね。ノエルはまだ病み上がりなのに…また来るね」
ノエルの返事も聞かずにリュシエンヌは部屋を出て行った。
次の日もリュシエンヌはノエルの部屋に来ていた。新しい花を持って。

持ってきた花を花瓶に挿しながらリュシエンヌはノエルを見た。
「何よ」
ノエルはリュシエンヌを睨むように見る。
「綺麗だよね、花を見ていると心が穏やかになるんだよ」
そう言ってノエルに微笑んだ。

「今度、外に一緒に見に行こう」

そう言ったリュシエンヌだったが彼女を見てぎょっとした。はらはらと涙を流していたからだ。
「ノエル？」
邪険にされる以外の初めてのノエルの反応にリュシエンヌは戸惑いを隠せなかった。
ノエルは苦しそうな顔をして俯く。ノエルの様子を心配したリュシエンヌが近づいて手を伸ばした。
しかし、その手は振り払われる。
「近寄らないで！出て行って」
うずくまる様な体勢で耳を塞いだノエルはリュシエンヌを完全に拒絶していた。
「ノエル、また来るから」
刺激してはいけない、そう思いリュシエンヌはノエルに聞こえるように少し大きめに呼びかけ部屋を出て行った。

次の日仕事の合間を縫ってノエルを訪ねたリュシエンヌは目を瞠った。昨日の混乱した様子を微塵も感じさせず、驚くほど平静にノエルはリュシエンヌを迎えたからだ。
その日からノエルはぽつりぽつりとリュシエンヌと会話をするようになった。
リュシエンヌが

「なんで私に構うのよ」
「同じ人を好きになったからかな…なんか思いを共有できるよね。仲間って感じがするの、自分勝手な解釈だけどね」
「仲間じゃない、私とあんたは違う。あんたは選ばれたんだから」
それを言われるとリュシエンヌは何も言えなくなる。きっとノエルの悲しみはリュシエンヌには想像もつかないほど深い。
今日は少し落ち込みながらノエルの部屋を出て行った。

何度も来ているとノエルは呆れたような目を向けだした。
「私のことよりリュファス様のことを心配していた方がいいんじゃないの？もう一週間以上経つんでしょう。出発してから」
何故ノエルがそのことを知っているのかとリュシエンヌは疑問に思った。
しかし、さして深く考えずにリュシエンヌは頷いた。
「うん、でもリュファス様は帰ってくるって約束したから。心配はするけど、落ち込んだりしたくない」
いつもの自分で待っていたいの、と言うリュシエンヌをノエルは唖然としたように見つめた。そして、深くため息を吐く。
「選ばれなかったのは当然ね…」
「ノエル？」
「なんでもないわ…疲れちゃった。悪いけど、今日は帰ってもらえる？」
リュシエンヌは、ノエルから拒絶するような雰囲気が消えたのを嬉しく思い素直にその言葉に従った。

「わかったよ！ノエル…明日はアレクシア様が社交界に出られるから忙しくて来れないけど、また来るから…そのときは一緒に花を見に行こう。今ちょうどイリスが咲き誇ってるだろうしね」
ノエルは、微かにだが頷いた。

ノエルが頷くのを見届けてリュシエンヌは意気揚々と出て行った。
「知らなければよかった」
リュシエンヌが出て行ったあとノエルは流れる涙を拭いもせず震える唇で呟いた。

リュシエンヌは、いつものようにノエルの部屋の扉を叩いた、何も返事はなかった。
最初のころは返事をしてくれなかったので勝手に入っていたリュシエンヌだったが、最近は小さいながらも返事をしてくれるようになったのでその声が聞こえてから入るようになっていたのだが、今日は返事も聞こえず何の音もしなかったのでリュシエンヌは首を傾げた。
「リュシエンヌ…」
見るとベレニスが俯きながら立っていた。
「ベレニス、どうしたの？」

ノエルは流刑地に送られたと聞いたのはそのときだった。愕然とし取り乱すリュシエンヌにベレニスは諭すように言った。
流刑地は殺人など重罪を引き起こした者が送られる場所だ。そこでは最悪の条件で働かされる。誰もが罪人である彼らに容赦などしない。罪人によって期間は決められているが、期限まで生き残っている者は少ないと聞く。
ノエルはそのような場所へ送られたのだ。
「ど…して」
リュシエンヌの問う声がかすれた。喉がカラカラに乾いている。
確かにリュシエンヌを殺そうとしたノエルだったが、実際は殺人を犯してなどいないし、せいぜい十日ほどの投獄で許される罪だ。
「確かに未遂に終わったにしては重すぎる罰だけど…彼女が自分

から行きたいと願い出たらしいわ」
「どうして」
震える声でリュシエンヌはベレニスを縋るように見る。
「『自分が犯した罪の重さを知ったから行かなければいけない』
…彼女はそう言ったそうよ」

リュシエンヌは暗い部屋の壁にもたれていた。
もう誰もいない部屋。この数日でこの部屋に通うことが日課となってしまっていたのだが、もう来る必要はなくなってしまった。
すでに日常と化していたことがなくなってしまい、そしてノエルのことを思い、リュシエンヌは混乱していた。
人気のない部屋を無意味に見ているとリュシエンヌは目を見開いた。そして、彼女が寝ていたベッドに近寄り、テーブルに置かれた鉢を見てリュシエンヌは目を細める。
イリスの花。
ノエルはリュシエンヌを殺そうとしたことについての謝罪を一切口に出して言わなかった。しかし、これこそが彼女の謝罪の気持ちだとリュシエンヌは直感的に思った。
薄暗い部屋の中でも浮かび上がる優しい色合い。
その優しい色合いを見てもリュシエンヌは癒されはしなかった。
その花を見てリュシエンヌは唇を噛んだ。取り残された気分だった。
「なんで……これからだと思ったのに。離れちゃったら意味ないよ」
どうしようもなく悲しかった。
「一緒に行こうって言ったのに」
その言葉を実行したかった。

第２９話　呑まれゆく日常

しかし、周りはそう簡単にはリュシエンヌを落ち込ませてはくれないらしい。

「最近大人しくしてたと思ったら…またあんたかい！」

メイド長の怒声がリュシエンヌの耳につんざく。メイド長の大きすぎる声に体を竦ませるリュシエンヌの足元には倒れたバケツと大量の水、水、水。

「ひいいいっ！ごめんなさいっわざとじゃないんです」

そして、前髪から雫を滴らせたメイド長が壮絶な表情でリュシエンヌの前に立っていた。

「わざとだったらとっととあんたをクビにしているよ！王女付きのメイドだって構うもんか」

恐ろしい剣幕でメイド長すごまれたリュシエンヌは壁にもたれかかりながらしおしおと小さくなる。

「罰として今日一日食事抜きだよ」

そんな、とリュシエンヌは、悲痛な叫び声をあげた。

「そんなことされたら死んじゃいます！」

リュシエンヌの必死の懇願をメイド長は鼻で笑う。

「あんたがそのくらいで死ぬたまかい…少しでも何か腹に入れたら明日も食事抜きだからね」

収まりきらない怒りを床にぶつけながらメイド長は去って行った。

「リュシエンヌ…あなたってまた」

通りすがりのベレニスが呆れ果てたようにリュシエンヌを見つめる。しかし、その呆れた表情のどこかに安堵しているように見えたのはリュシエンヌの気のせいだったのか。

「とりあえず、ここは私が片づけておくからあなたはこの壷を図書室に持って行ってくれないかしら」

リュシエンヌに任せるとこの水で滑って転んでさらに大惨事を引き起こしそうだし、と呟いたのはこの際気にしないでおこうとリュシエンヌは思いつつ、壷を受け取った。
壷を持っていこうとしたリュシエンヌにベレニスは声をかける。
「いい？ちゃんと下を見てゆっくり歩くのよ。後、回廊の中心を歩きなさい。横から誰が飛び出してくるかわからないから」
念に念を押されて壷を持って行く。

そんなに信用ない？

そのことにちょっぴり落ち込みつつリュシエンヌはベレニスに礼を言って歩き始めた。

「リュシエンヌちゃん、ちょっといい？」
振り向くとそこには笑顔のアベルが立っていた。片手に小さな荷物を抱えて。
「リュシエンヌちゃんに頼みたいことがあるんだ」
そう言って持っていた包みをリュシエンヌに認識させるように軽く掲げる。
「それは？」
「王宮のとある場所にしか生殖していない特別な薬草さ。ここのお抱えの医者がこいつを研究するために毎月取りに来てるんだけど、運悪く足を痛めてしまったらしくてね…今月は取りに来れないんだよ。研究命の医者だからね、這ってでもくるって言ってるのを弟子が取り押さえているらしい。何するかわからないので目が離せないって弟子から書きなぐったような文書が来たよ」
手紙の内容を思い浮かべているのか、おかしそうにアベルは、笑った。
「はあ…？」

「だからリュシエンヌちゃんこいつをその医者に届けて安心させてやってほしいんだ」
訪ねるような言い方ではなかった。行って来いということらしい。
アベルはそう言うとリュシエンヌからまず壷を奪い取った。リュシエンヌは、あからさま嫌そうな顔をする。それを見てアベルは微笑みを浮かべた。
「普段なら部下にでも渡せばいいんだけど今はほぼ休みなしで城の警備にあたっているから難しくてね…ごめんね？」
言葉とは裏腹に全く申し訳ないと思っていない顔でアベルはリュシエンヌから壷の代わりに小さな包みと紙切れを渡す。紙切れには手書きで地図が書いてあった。
リュシエンヌは、取り上げられた壷を見て自分が仕事の途中だったことを思い出した。
「えっと、今は仕事の途中なので、この壷を図書室に持って行って終わってからアレクシア様に言って…」
「ああ、アレクシア王女には俺から言っておくし、リュシエンヌちゃんは行ってくれる？ちょっと急ぎなんだ」
アベルはリュシエンヌの言葉を遮り、門の方へ促す。有無を言わせないような強引さにリュシエンヌは少し眉をひそめた。
「この壷もちゃんと持って行くよ。心配しないで割ったりなんかしないよ。リュシエンヌちゃんが持っていくよりも安心だと思うけどね」
さらりと酷いことを言われて拗ねながらリュシエンヌはアレクシア様に言っておいてくださいね、とアベルに念を押し門の方へ歩いた。
しかし、アベルも貴族であるから自分の従者がいるはずなのに何故わざわざ自分に頼んだのだろうか？それとも、たまたま自分を見つけたので頼んだのだろうか？と疑問を浮かべつつ、リュシエンヌは歩く。

このときひとりで城下に出てはいけないときつく言われていたことをリュシエンヌの頭からは完全にすっぽ抜けていた。

「城下も久しぶりだなあ」

前に城下に来たときは賑わっていたのだが、今は閑散としていた。しかし、それも仕方がないことだった。

魔物たちが急激に増加し、死人も出ている。

加えて国を守る騎士が魔物討伐のため半分も城を開けているのだから人々が警戒し外出しなくなるのも無理はないだろう。

人通りのない城下、そしてひとり歩いている自分、まるでこの世界で自分ひとりだけになってしまったような錯覚を受ける。

取り残された自分。それは何かの罰のようにも思えた。

ひとりっきりでいるとどうも考えが後ろ向きになってしまって仕方がない。

リュシエンヌは、何気なく地図を見ると目を見開き、かぶりつくように見つめた。思わず地図を持つ手に力が入ってしまい地図にしわがついてしまったがそんなことよりも重大なことが地図には描かれていた。

「えっ」

地図は、おおざっぱに描かれてはいるが重点はしっかり描きこまれており思ったよりも見やすい。

「西の森の目の前…」

そこに着いたとき、陽は落ちかけあたりは夕闇に呑まれようとしていた。

荒い息を整えリュシエンヌは前を見据える。

「やっと着いた」

目の前に見えるのは簡素な小屋のような家。だが、地図を見る限

りこの家で間違いないだろう。
簡素な家の目と鼻の先には西の森が、その深い闇に繋がる口を開けて構えている。
森の入口を見ていると頭の中にじわりじわりと蘇ってきてリュシエンヌは思わず頭を押さえる。少女を追いかけて魔物対峙した記憶はまだ新しい。
きっとその医者はとんでもなく偏屈な人間に違いない。でなければ好き好んで西の森の近くになど住まいなど構えないだろうとリュシエンヌは、そう思った。
リュシエンヌの頭がズキリと痛む。
「え？」
痛みは一瞬だけでもう痛くはなかった。首を傾げながらリュシエンヌは家に近づいて行った。

とりあえず扉を叩く。
「どうぞ」
中から返事が聞こえた。偏屈な医者と決めつけていたリュシエンヌは思いのほか若い声に扉を開けるのを戸惑った。しかし、すぐ弟子がいることを思い出し、これはきっと弟子の声なのだろうと思い扉を開けた。

中は真っ暗だった。その部屋の中だけが外の世界の仄明るい光さえも遮断しているかのような暗黒。
目の前にはすぐ闇の世界が広がっておりリュシエンヌは顔を強張らせた。足を一歩踏み入れただけで歩みは止まってしまった。
この中に入るのが恐ろしかった。

その闇の中で浮かび上がる赤い二つの目玉を見つけリュシエンヌはとっさに後ずさった。
しかし、無情にも自分のすぐ後ろでけたたましい音を立てて扉が

閉まる。

「こんばんは、リュシエンヌ」

先ほどの声がした。

第３０話　森での攻防

オージュ王国は、国として大陸から孤立している。東と西には魔の森が控え、北には高い山脈が連なっている。そして、南は広大なブレイナール海がある。

オージュを囲む東と西の森の境には双方に砦が置かれている。

東の森は、広大である。西の森と比較するとその約数倍の面積を誇る。

東の森を挟んださらに東に隣国ディオンヴィルがある。西の森ほど危険ではないが、それでも多くの魔物が生息している東の森があるが故に国交もままならず、交流も皆無に等しい。

必然的にオージュの主な交易の相手は、海を隔てた国に狭められていた。

そうした要因があり、大陸では孤立しているといってもいいオージュだが、魔の森が自然の要塞という役割をしているため、他国からの侵略に気を揉む必要がない。他国も魔の森に踏み込むという危険を冒してまでオージュに攻め込むということはしないのでオージュは他国の侵略に脅かされることもなく生活していた。

しかし、民も、貴族も、王族も、忘れてはいけなかったのだ。

自分たちが何に囲まれて暮らしているのかということを。

危険な魔物が多い西の森付近の砦には多くの警備兵が配置され、広大すぎる東の森の魔物は、西の森よろは警備は手薄だが、魔物たちは、わざわざ時間をかけて移動し、砦を乗り越えて城下に入ろうとしてくることはない。それをしなくても生きていけるのだがら。

王国の周りを囲むように置かれる砦に守られ、つい数年前までは王国の民は、魔物を見ることなく暮らしていた。

しかし、他国からの侵略を防いでいた森は、手のひらを返すように王国を狙い襲いかかってきたのだ。命を奪われる民、彼らは日々

魔物たちから脅えて暮らすようになった。
今、国は、脅威に晒されている。

その森の中では、無数の魔物が蠢いてる。しかし、東の森は、広大すぎるせいか、わざわざ魔物が城下の方へ襲いに来ることはあまりない。
だが、魔物が群れをなして襲ってくる可能性が全くないというわけではなかったのだ。

魔物の数を見るに、東の森に面するこの砦付近には、この森に散らばる魔物をすべて一点に集結させた状況といっても過言ではないだろう。討伐出発前にオージュと同じく東の森に隣接しているディオンヴィルに使者を送ったところ、先ほど戻り、東の森に接している砦から魔物の気配が消えたという報告を持ってきた。
そう見て、束になって襲ってきた状況になる。
隣国と交流のほとんどない状況で兵力を借りるわけにもいかずに、広大すぎる東の森では囲い込みなどの戦法は使えず、かといって無謀にも限られている戦力でがむしゃらに攻めるわけにもいかず、砦を拠点として、襲ってくる魔物を迎え撃つしか方法がなかった。
部隊ごとで守備と攻撃を分けつつ、魔物の大群とと衝突してからはや数日が過ぎた。
やっと、魔物の強襲が緩んだところで、部隊が個々に進撃できる状況になったのだ。
強襲は止んだが、未だ魔物は多く残っており、苦戦を強いられている。未だ死人は出ていないが、いつ出てもおかしくない状況なのだ。

リュファスは、何十体目かになる魔物を剣で切り裂いた。
魔物は、その場で跡形もなく蒸発した。

「エミリアン、状況は」
近くで戦っていた部下に状況を尋ねる。エミリアンは肩で息をしながら答えた。
「ルノーが負傷しました。右肩からわき腹付近まで切り裂かれ重症です」
「利き腕だな、下がらせろ。救護班に処置を。エミリアン、お前たち第3部隊も砦で休息を取ってこい。代わりに第4部隊に進撃をするように伝えてこい」
「了解しました……リュファス様もどうかお休みください。ろくに寝ていないじゃないですか」
「ああ、このあたりの魔物を一掃したら休憩を取ろうと思う。お前たちは、一足先に砦に戻っていてくれ」
リュファスの言葉にエミリアンは、頭を下げ姿を消した。
リュファスは、軽く息をつく。
周囲の魔物の気配は薄れてきた。しかし、未だ足を踏み入れていない森の深部からは、濃厚な魔物の気配が漂ってきている。

魔物と部隊が交戦している。この辺りは、ギデオンが率いる第2部隊だったか。
そちらに向かうとギデオンが魔物を二体を相手にしている光景が飛び込んできた。ギデオンの腕ならばこの程度の魔物など大丈夫であろう。
しかし、ギデオンが二体の魔物を倒したと同時に、狙ったかのように後ろからも三体魔物が襲いかかる。
自らに襲い来る魔物を確認し、ギデオンが目を細めた。
リュファスは、体勢の整っていないギデオンと魔物の間に入り、剣でその魔物を両断し消滅させた。
ギデオンは、少し乱れた呼吸を整えリュファスの方に向き直った。
「ありがとうございます」
傍から見ると本当に感謝しているのかわからないような無表情で

声も愛想の欠片もなかった。しかし、リュファスは知っている。ギデオンという男が騎士として誰よりも高潔であろうとしているかを。その冷静であろうと努めている態度の中にリュファスを慕う心が隠れているということを。

彼は、冷厳な態度を保っているが、心の内では、リュファスを敬愛しており、先ほどのことも本当に感謝しているのだ。

「ああ」

リュファスは、頷いた。

ギデオンも含まれているのだが、今回の遠征では、騎士団の中でも信頼の置ける者が比較的多い部隊を連れてきた。それは、今までにない事態に警戒したのともう一つある。今はまだ燻っているだけかもしれないが、煉獄の業火となりうる危険性のはらんだ火種を危惧してのことだった。

リュファスは、王宮にいるリュシエンヌのことを思った。大切な大切な少女。

彼女の傍を離れるのは酷く不安だった。王宮にはリュファスが絶対的な信頼を置いている男がいるので大丈夫だと思うのだが、それでもリュシエンヌのことを考えると心がざわめいた。

リュファスは、唇を噛みリュシエンヌに囚われかけた思考を押し込める。そして、極力冷静な声を意識して今まで頭の念頭にあった疑問をギデオンに尋ねる。

「ギデオン、おかしいとは思わないか」

リュファスの言葉に同意するようにギデオンも頷く。

そう、おかしいのだ。

通常魔物は、単独で生活する。

元来、魔物というものは群れるということをせず、仲間というものを持たないというのが人間の認識である。眷属を持たず、血族を生み出すということもない。たとえ、似たような形状の魔物がいて

も、それば別物であり、仲間ではない。
魔物がどうやって生み出されるのかは知らないが、リュファスは数多くの魔物を相手してきた中で一度も同じ種類の魔物を見たことがなかった。
その魔物が結束し人間を襲うことはまずない。そもそもこの状況が起こりえないものだと思っていた。
リュファスも部下も最初から感じていた違和感はそれだった。
リュファスは、ギデオンが倒した二体の魔物を見る。
二体とも姿かたちは全く違い、一目で異種の魔物とわかる死体だった。
それを見てリュファスは眉を顰めた。その死体から、その死体のものではない微量の魔力を感じたのだ。それも二体とも。その二体の魔物から感じる異質の魔力自体は、同じものであった。

何故、魔物が束になって襲ってきたのか。
そして、魔物から感じる異質の魔力。

リュファスの中に嫌な考えが浮かび上がってきた。

何かが起こっている。尋常ではない何かがこの森で。
魔物が襲撃してきたと報告を受けたときから、リュファスの内に渦巻いていた不安が黒い靄となり心の隙間からふつふつと噴き出してくる。
リュファスは、神経を研ぎ澄ますために目を閉じた。ギデオンが不審そうにリュファスの名前を呼ぶが、それに答えず魔物の死体を探った。
魔物に付着している異質の魔力の気配を絡め取る。そこから魔力の途切れてしまいそうなほど細い線をたどっていく。
聖騎士となってからリュファスは、魔力の流れを感じられるようになった。特に闇に属する魔力には辟易してしまうほど鋭敏に感じ

取ることができる。
捉えた。
リュファスは、目を開いた。そちらに全神経を集中させる。
微細な魔力を感じ取れるが、それでも意識しなければ感じられないほどの小さな魔力が、瞬時に膨らみ、そして破裂する。そのあとに残るのは、嫌というほど知っている気配。その気配に先ほど感じた魔力が絡みついていく。

魔物が生まれている？いや、召喚されているのか。

とにかく小さな魔力の爆発のあとには魔物がいることは、感じとれる。
その魔力の一連の流動はその場所から動く気配はない。その場所で何らかの方法を使い、魔物を造るか呼び出すかして魔力を使い操っているのだ。

その考えに至ったとき、リュファスは、叫んでいた。
「部隊を全て砦に集結させろ！　各々勝手に行動はするな。ギデオン、お前もだ」
そう言い放つとリュファスは、一点を目がけて走り出す。魔力が爆ぜては魔物が生まれるその場所へと。
「リュファス様！　何をっ……」
いきなりのリュファスの突飛な行動に、珍しく焦ったようにギデオンが声を出した。しかし、すでにその声を遠くに聞くほどにリュファスは、常人の数倍の速さで移動していた。
長く続いている戦いに焦りを抱き始めていたのかもしれない。
リュファスは、珍しく後先考えない行動をしていた。

途中途中に出現する魔物を滅しながらいくらか進んだとき、リュ

ファスは、急に足を止めた。そして、気配を極力消し緩慢な動作でそれに近づいていく。
そこには、家ほどにある大きな魔法陣とその周囲を舞うように歩くひとりの人間がいた。いや、姿が人間に見えるだけで正体は人間ではないのかもしれない。その顔は中世的で身体の線も細く性別も定かではない。
リュファスは、鋭い視線を向け、剣の柄に手を添えながら人の姿をしたものの前に歩み出ていく。
それは、リュファスの姿を認めると歩みを止め、艶やかな笑みを向けた。

第３１話　激戦（前書き）

多少の残酷表現があります。ご注意ください。

第３１話　激戦

「来てしまったのね」
中性的な容姿、女性らしい言葉づかいに反して声は、低かった。
「早かったと言うべきかしら？」
それは微笑みを浮かべながら、リュファスに親しさを込めた口調で言う。

近くに来たとき確信した。目の前にいるものは魔族だ。魔物とは比べ物にならないほどの力を持つ魔界の住人。リュファスも魔族は数えるほどしか対峙したことがない。すべて浄化してきたが。
魔族は微笑を浮かべたまま手をかざす。その動作に、リュファスは体を緊張させる。魔物ならばいら知らず、魔族相手では、リュファスも無傷では済まないだろう。
足元の魔法陣が光を放つ。
その光は、徐々に強くなっていきやがてその中から一つの物体が姿を現す。リュファスは、眉をひそめた。
生まれて間もないのか背がリュファスの腰ほどしかない、それでも蝙蝠の翼のような耳を持ち全身を堅そうな毛で覆われた猿、間違いなく魔物だった。
「あら、こんな小さな子を呼び出すつもりじゃなかったのだけど……まあ、いいわ」
些細なことだというふうに言い、魔族は魔物に手をかざす。
魔族の手から発せられた魔力は、その小さな魔物を優しく包み込むようにする。禍々しい灰色の光が辺りを支配する。やがてその光は力を失ったかのように縮んでいく。
その中から出てきたのは、先ほどよりも何倍も成長した大きな体躯と敵意だった。
リュファスは確信する。やはりこの魔族が魔界から魔物を召喚し、

そして魔力で傀儡として砦を襲わせたのだ。
魔族から発せられた魔力は微量だったが、先ほど魔物の死体から確認した魔力とまったく同じだった。
リュファスは、魔族とその魔族に召喚された魔物を冷たい瞳で見つめる。小さかったときの姿を知っている。しかし、この魔物は巨大化し、あからさまな敵意を持ってリュファスと対峙している。敵だ。
微かな憐憫の情が心の中で生まれようともリュファスはこの魔物を斬らなくてはいけない。
リュファスは感情の籠らない瞳で魔物を見つめると剣を鞘から抜きさした。
そして、剣の先端を魔物に向ける。
その魔物は、瞬く間に消滅した。
「どっちが魔物だか」
魔族が蔑むようにリュファスを見る。
（本当だな……）
これは民衆が求める聖騎士の姿ではないことは理解している。優しく、誠実で、強い聖騎士。そんな人間ではないことはリュファスが一番理解している。自分はただの憶病な人間だ。
だから考えるのだ。この魔物は魔族の手によって人間に対しての敵意を植えつけられてしまっている。人間を襲うのは時間の問題だった。もし、この魔物を憐れみ逃がしたあと、この魔物が街に人を襲いに行ったらどうなる。
もしも、そのとき大切な人がその魔物の爪の犠牲になったらと。
それならば目につく魔物はすべて滅ぼしてしまおう。
おおよそ聖騎士としてはあるまじき己の考えにリュファスは、自嘲の笑みを浮かべた。しかし、心のどこかで納得していた。
（これが俺だ）
聖騎士とはやし立てられてもこの矮小な心は、そうは変わらない。
大切な少女と出会って何かが変わったかと思ったが、余計に憶病

になってしまったようだ。少女を失うと想像しただけでも恐怖で背筋が凍りつきそうなのだから。
彼女を護るためなら何でもする。確固たる想いを持って、リュファスは光の名を持つ相棒を構えた。
それに応えるように魔族は両手を合わし、その間から禍々しい細身の剣を出現させる。その柄を握り締めると、リュファスに剣を向ける。
勝手に背負っているだけかもしれないが、騎士として、王族や国民や部下。男として、大切な少女。リュファスが護ろうとするものは大きい。
頭の中でさまざまなものがない交ぜになる。
考えを振り払おうと目の前の魔族を鋭く見据える。リュファスはそのとき、魔族の瞳の中に強い意志を見た。もしかしたら魔族も護りたいものがあるのかもしれない。
魔族は薄い笑みを浮かべる。まるでリュファスの考えを理解しているような笑みだった。
「お互い譲れないものがあるときは話し合いでは解決しないわ」
その言葉にリュファスも微かに笑みを浮かべた。
「そうだな」
二人が同時に動き出す。
鉄同士がぶつかり合う音が森に響き渡った。

砦では重苦しい空気が漂っていた。部隊長であるギデオンを除いた第二部隊が全部隊待機の命を持って帰ってきたからだ。
第二部隊の者も何も知らされてはおらずただ困惑しているだけだった。「部隊長に全部隊待機と言われただけなんです。部隊長もすぐ戻るとおっしゃっていました」と騎士はしどろもどろになりながらエミリアンたちに説明した。
他部隊の出撃の準備を手伝っていたエミリアンにとってその命令

は寝耳に水で理解できないことだったので、当惑しながらリュファスを待っていたのだ。
しかし、帰ってきたのはギデオンだけだった。
「ギデオン！　団長はどうした」
ひとりで戻ってきたギデオンに対して、不審とえもいわれぬ不安を抱きエミリアンは声を張り上げてギデオンに問う。
ギデオンは無言で首を振る。
「団長はひとり奥に向かった。俺はただ全部隊ここで待機を命じられただけだ」
その言葉に、待機していた騎士たちがざわめいた。エミリアンはギデオンの胸倉を掴み、壁に押し付ける。そして低い声で呟く。
「お前、団長をひとりで行かせたっていうのかよ？」
ギデオンは無言でエミリアンを見据える。
「ああ」
「部隊長！」
騎士の声とともにギデオンが床に転がった。
「あの人はオージュの希望だぞ！　何かあったらどうするんだ」
口を拭う仕草をするギデオンをエミリアンは見つめる。年齢が近いということで親しくしており、ギデオンの性格もある程度は把握していると思ったが、今度ばかりはギデオンが理解できなかった。何故平気そうな顔をしているのか。エミリアンはギデオンの無表情にどうしようもない苛立ちを感じて拳を握った。
「あっという間に行ってしまったんだ。あの方を止められる者などいない……あの方は強い。大丈夫だ」
ギデオンの言葉に違和感を覚え、エミリアンは再び振り上げた手を止めギデオンをまじまじと見つめた。
噛みしめられた唇、寄せられた眉、よくよく見るとちゃんと表情はある。そして先ほどの言葉、まるで自分に言い聞かせているようにも捉えることができる。
エミリアンはふと思った。ギデオンが一番この状況に堪えている

のかもしれないと。何も出来ずに団長を行かせてしまったのだから。
ギデオンがひとり遅れて帰ってきたのはもしかしたらリュファスを探していたのかもしれない。
そう思うと途端に頭が冷えてきて手を下し握り締めていた拳の力を緩めた。
そのとき、野太い声が割り込んできた。
「部隊長同士が仲間割れしてどうするんだ」
騎士の間からエミリアン、ギデオンと同じ身分にある第四部隊長が姿を現した。その顔は呆れたような色をしていた。他の部隊長よりも年功でリュファスからの信頼も厚い男の言葉に、二人は黙りこんだ。
自分よりも年長だということを理解はしているのだが同じ身分の男に諭されてしまい苛立ちの色を浮かべてしまうエミリアンを、豪快に笑い言った。
「待とうぜ」
きっと帰ってくる。

「ひどいわ……腕がなくなっちゃった」
言葉の内容とは裏腹に快活とした声だった。しかし、魔族は見るも無残な姿をしていた。
左腕は肘関節から先は消失しており、体に無数の切り傷をこさえている。右足の切り口からは肉、筋、その奥には骨が見えている。それでもその足は大地を踏みしめている。
服も切り裂かれ、そこから薄い胸板が露出している。リュファスはやはり男だったのだと、頭の片隅で思った。
その手に持つ剣も所々刃こぼれをしている状態だが、それに比べてリュファスは多少切り傷などがあるがすべて大したことはなく、自分とは対照の魔族の様子を観察するように見ていた。まばゆい光を放つ剣も刃こぼれひとつない艶やかな刃をさらしている。

大地を踏みしめ立つ様は、感嘆のため息をつくほど高潔で凛々しかった。
その姿に魔族が呆れの混じったため息をついた。
「恐ろしい人。あなた本当に人間？」
姿は満身創痍だったが魔族はそれでも剣を構え、戦う姿勢をとる。
その姿勢に感嘆したのは一瞬で、リュファスは魔族に向かって走りだす。体中に負った怪我のせいか思うように動くことができなかった魔族の剣をすり抜け、その懐に飛び込む。
そしてそのまま魔族の胸を貫いた。
貫いた瞬間、何故か魔族の唇が弓なりになる。それに気づいたリュファスだったが、力は緩めずそのまま貫いた剣を引き抜いた。
勢いのまま大地に倒れこむ魔族を見てリュファスは眉をひそめる。
消滅はしていないが、もはや虫の息であろう魔族の状態を確認しようと近づいたそのときだった。

パキリ。
頭の中で音がした。
リュファスは驚愕に目を見開く。
「っ……なんだと……」
何が起こったのか瞬時に理解した。何故なら、それは自分が制御しておりその状態を常に把握していたからだ。
それの亀裂はどんどん広がっていく。砕け散るのは時間の問題だった。
彼女のためにかけた呪(まじな)いの檻。大切な彼女を護るために、欺くために。
なぜ封印が解けかかっているのか理解できず立ち尽くすリュファスの姿を見て、消えゆく魔族は満足そうに嗤った。
「やはり私程度ではあなたを殺すことはできなかったわね……でも私の役目はちゃんと果たすことができたわ」
その言葉を聞いてリュファスは愕然とし、次に顔を烈火のごとく

怒りに染めた。把握したからだ。この魔族はただ自分を王宮から遠ざけることと自分の足どめの役目を背負っていたことを。その間に彼女に何が起こっているのかを。

魔族の体が端々から砂のように崩れ落ちていく。その顔は満足したような笑みを浮かべていた。

魔族の体が完全に消えたあとも、リュファスはその地面を睨みつけていた。名前も知らずに消えた魔族への憎悪を込めて。

残されたリュファスは剣を握り締める手を震わせる。

「リュシエンヌっ……！」

血を吐くような声が唇から漏れた。脳裏に思い浮かぶのは、辛い境遇の中でも常に前向きに生きようとする愛しい少女。

彼女が危ない。

何故リュシエンヌが危険かという理由は痛いほどよく理解している。もしかしたらという気持ちととうとう来たかという気持ちがあふれてくる。

自分の封印を破れる者はそうそういない。しかも、魔物討伐に出発する前に強固にかけてきたのだから。

もしいるのならばそれは。

走馬灯のように頭をよぎったのは五年前の惨劇。

これから起こりうるであろうことを思うと心臓が凍りついていく。リュシエンヌが危険な目に遭うことは、我が身を切り裂かれるよりも辛い。

リュファスは大地に剣を突き立てた。魔物が消滅したことで、魔方陣は消え去り辺りには魔物の気配はない。しかし、リュファスは、広大な森の中でうごめく無数の魔物の気配を常に感じていた。戻るときに遭遇するかもしれない。

（邪魔だ）

剣を軸に光の粒子が爆発した。

第３２話　邂逅、そして

「なっなに？」

扉が閉ざされ真っ暗になった部屋の中でリュシエンヌは動揺しながら辺りを見回すが、見えるはずもない。

とりあえず扉に張り付き取っ手を掴んで押すが、薄い板の扉はまるで岩に変わってしまったかのようにびくともしない。

自分の置かれている状況を把握できず混乱するリュシエンヌ、しかし、次の瞬間部屋は明るくなっていた。

部屋の隅の埃まで見えるようになり、リュシエンヌは部屋の中を見回す余裕もできた。そこで、悠然とした態度で椅子に座っている人物を確認し、軽く目をみはった。

一言で言うと美しい男だった。美しすぎると言った方がいいのか、どこか人間離れした美しさを持っていた。リュファスも、アベルも美しいと言い表すことができる容姿であるが、かといって女性的ではなく逞しく鍛え上げられた身体を持っている。彼らは、どんなに偏った見方をしても立派な成人男子にしか見えないのに対し、目の前の男は、中性的な姿形をしており、見ようによっては女性だと捉えられてもおかしくはなかった。身体を覆うしなやかな筋肉と薄い胸がかろうじて彼を女性だとは思わせないだけで瞬間で見ただけでは女性ととられてもおかしくない姿かたちをしていた。

顔の全ての部品が無駄なく整えられ顔に収まっている。漆黒の髪に光が反射する様子は、夜空に瞬く星のように輝いていた。髪と同じ色を放つ瞳も艶やかな煌めきを放っている。中性的であるがゆえに持つ、どこか危うい色気も兼ねそろえており、正面から見たリュシエンヌは思わず眩暈を覚える。

まとっている見慣れぬ闇色の装いはよく似合っていた。

しかし、その男の完璧すぎる容姿がリュシエンヌに言い知れぬ不

安を与えた。

「こんばんは」

改めて男は言った。

「こんばんは」

男が言葉を発してくれたお陰でリュシエンヌの緊張が幾ばくか解かれ、返事をすることができた。

そして、当面の目的を思い出し、リュシエンヌは少し汚れのついた包みを相手に見えるように掲げた。

「お弟子さんですねよ？　頼まれていたものを届けに来ました。ちょっと途中で落としちゃったりしたんですけど、中身は多分大丈夫だと思います」

姿の見えない医者にリュシエンヌは首を傾げる。大事をとって他の部屋で寝ているのだろうか。

「うん、そこに置いといて。まあまあ座りなよ、お茶も用意してあるんだよ」

見た目からは想像のつかない砕けた口調で男は、リュシエンヌを椅子に促す。

男の、人の言葉を聞かない態度にリュシエンヌはむっとしたが、お茶という言葉を聞いて軽く頷いた。

「せっかく出会ったのだから少し話をしよう。僕に君のことを教えておくれよ」

弟子のくせに不遜な態度だと思った。

いくらその姿を探しても見当たらない。大抵は王宮内におり、なおかつ目立った行動をするので見つけるのは容易いはずなのだが、何故かその姿を見つけることができなかった。

マテューは小さくため息をついた。調理場にもいない、部屋にも

いない、マテューはお手上げ状態だった。こうして探してみると自分は自分が思うよりもリュシエンヌが行きそうなところを知らないのだと思い知らされる。
しばらく佇んでいたマテューはふと顔を上げる。前方から歩いてくるのは、よくリュシエンヌとともに行動しているメイドだった。
この機会を逃してなるものかと、マテューはメイドの前に立ちはだかる。
「やあ」
怪しい人物さながらの声のかけ方に心の中で苦笑する。案の定、声をかけられた相手も胡散臭そうにマテューを見た。
そして軽く礼をしてマテューの横をすり抜けて歩いて行ってしまった。マテューは慌てて彼女の背中を追う。
「ちょっちょっちょっと待って」
声をかけると相手は振りむいてくれたが、思わず後ずさりしてしまいそうなほど恐ろしい顔だった。
「なんですか？　私急いでいるのですの」
忙しいから話しかけてくるんじゃねえよ、と心の声が聞こえたのはマテューの幻聴だったのか、それでもめげずにマテューはメイドに笑顔を向ける。
「少し尋ねさせてよ。リュシエンヌどこにいるか知らないかな」
リュシエンヌの名前に反応した彼女は胡乱なものを見る目つきでマテューを見つめる。マテューの上から下までまじまじと見詰め、やがて合点がいったような顔をすると、尋ねてきた。
「もしかして、従者とか言っておきながらいつも風来坊のごとく王宮内をうろついているマテューさんかしら」
どういうことだろうね。
リュシエンヌを問いただそうにも当の本人が不在なので責めるにも責められない。後でじっくり聞いてみようか。
乾いた笑いを浮かべるマテューを気にした様子もなく、彼女は不機嫌を隠さずに言った。

「リュシエンヌがどこにいるかですって？　そんなの私が聞きたいくらいだわ……仕事を頼んであったのに」
彼女はそう文句を垂れた。

彼女（ベレニスというらしい）といればリュシエンヌと出会える確率が高くなるかと思い、しばらく後をついていくことにした。迷惑そうな顔をしているとかはこの際なしで。
ベレニスは小さな部屋に骨董品などが置かれている物置のような部屋に入った。マテューもそれに続く。
そしてそこに置かれている壺を見て驚いたように声をだした。
「どうしたの？」
「壺が置いてあるわ……」
彼女は、どうしてここにあるのかしら、と首を傾げる。
そのとき、大きな地図を持ったメイドが部屋の中に入ってくる。
メイドは、ベレニスを見つけると親しい者へ向ける笑みを浮かべた。
「仕事？」
「ええ」
いきなり「あっ」と大きな声を出したメイドは、ベレニスの傍らにある壺を見て指をさす。そして、地図を乱暴に置くと壺に近寄る。その置き方にベレニスの眉が顰められる。
「……この壺がどうしたの」
ベレニスが聞くとメイドはどこかうっとりとした顔になる。
「これ、さっきアベル様が持っていらした壺だわ」
「アベル様が？　それは本当かしら」
「私がアベル様の持っていらした物を間違えるわけないじゃない。こんなところに置かれたのね。せっかくだから触っておこうかしら」
どうやらアベルの追っかけらしい。
「近くで見たけどやっぱり素敵だわ。リュファス様もとってもかっこいいけど、私は優しいアベル様がいいわ。それに、仕草一つ一つに優雅さがにじみ出ているもの。まさに貴族のご子息という感じ。

そう思うでしょう」
興奮しているメイドは自分の意見を押し付けるように話してくる。そんなメイドの態度が気に障り、マテューの機嫌が一気に低下した。ベレニスはそんな彼女に冷静な瞳を向ける。マテューは彼女が目の前のメイドと似たような反応をするかと思っていたので、意外な反応に軽く驚いた。
ベレニスの態度に気にも留めずメイドはアベルの良さについて語ろうとする。長くなりそうだとマテューは覚悟したが、意外とあっけなくその話題は打ち切られた。
「よかったわね。ところで、リュシエンヌは見ていないの？」
彼女がそれを聞くとメイドは嫌そうな顔をした。
「知らないわよ。あの子のことなんて」
リュシエンヌの名前が出たせいで今までの興奮が急激に冷めたようでメイドはそっけなく言い、足早に部屋を出て行った。メイドは最後までマテューの存在には触れなかった。
そんなメイドと地味に落ち込むマテューを気にした様子もなく、ベレニスは不思議そうに呟いた。
「リュシエンヌに図書室に持って行ってくれるように頼んでいたはずだったのだけど」
どうして返されているのかしら、と言う彼女の言葉にマテューは反応し、そして目を細めて壺を見つめた。その瞳は壺を通り越し、どこか遠くを見ていた。

その男はファルと名乗った。
リュシエンヌはファルからいろいろなことを聞きだされた。王宮内でどういうことをしているのか、気になる男はいるか、その男との思い出など。
リュシエンヌがたどたどしく話すのを聞いていてファルはポツリと呟いた。

「リュシエンヌはリュファス様のことが好きなんだね」
改めて言葉にされると照れ臭いが本当のことだったので頷いた。
「でも、今は西の森に行っているんだね」
それを話しているとき、リュファスのことを考えてしまい少し切ない気分になる。離れてしまうとリュファスの存在が、いかに自分に元気を与えていたかわかってしまい寂しさが出てきた。
「でも無事に帰ってこれるかな？」
「どうして」
リュシエンヌが聞くとファルは意地の悪い笑みを浮かべた。
「だって、西の森には魔物だけじゃない、魔族もいるんだよ」
魔族ならリュシエンヌも知っている。もっとも名前だけで、魔族よりももっと凶悪な魔界の住人だという認識しかないが。それでもリュファスたちが対峙しているものの恐ろしさを知ってしまい、リュシエンヌは身体を震わせる。しかし、出向前にリュファスに言った自分の言葉を思いだす。
「でも、信じるって約束したから」
その言葉にファルは面白くなさそうに鼻を鳴らす。
そこでリュシエンヌは疑問が浮かんだ。
何故、一介の医者の弟子である彼が、敵の正体を知っているのだろうか。
そのことを聞こうと思ったが聞く前にファルに遮られる。
「もういいや、遠征のことは」
それよりさ、と彼がまぶしい笑顔を向けてくる。
「ねえ、そのリュファス様にもらったペンダント見せてよ」
「もらったっていうか」
確かあのときリュシエンヌに返すと言っていた。それから尋ねる機会がなかったので、詳しいことはわからない。
だが、リュファスから渡されたということは事実なので、リュシエンヌは照れながら懐の青い石を探る。このペンダントをリュファスにもらってから入浴時と寝るときしか外していなかった。

大切なものなのでチェーンをつけたまま青い石を見せた。ファルは顔を寄せ、ゆっくりと石に触れる。必要以上にファルの顔が近い気がして頭を引こうとしたリュシエンヌだが、ファルが石に触れているせいで動かすことができなかった。

ファルは、眉を寄せたかと思ったら、何故かその石を握り込む。

ファルの不審な行動にリュシエンヌは怪訝な顔をする。

「どうしたの？」

「いや、やっぱり効くね」

そう言ったかと思うと、ファルはその手を自分の方に勢いよく引いた。

「いっ……！」

力任せに引っ張られたせいでチェーンがうなじに食い込み痛んだ。しかし、一瞬でその鋭い痛みから解放された。

何故止んだのかはファルの手の中にある石で分かった。引っ張られる力に負けチェーンが切れてしまったのだ。

疼くような痛みを訴える首を抑え、リュシエンヌはファルを睨みつける。

「何を」

「忌々しい」

リュシエンヌの言葉を遮り、ファルは喉の奥から出すような低い声で呟いた。

そして、石をさらに握りこむ。

それを見たリュシエンヌが止めてと叫ぶ前に、その手の中で鈍い音がして、その手の隙間から床に石の破片がパラパラとこぼれ落ちていった。

青い石の破片が光に反射して輝きを放ちながら床に散らばっていく。

リュシエンヌはその光景を呆然と見つめていた。自分と戦地に赴いているリュファスとの無二の繋がりを断ち切られたような気がした。

しばらく石を砕いた己の掌を見ていた男は、やがて不気味な笑みを浮かべてリュシエンヌを見た。

第３３話　異質

リュシエンヌは、薄気味悪い笑みを浮かべる男から視線を外し床に這いつくばるような態勢をとり、床に散った石の破片を手でかき集める。

泣きそうになりながら唇を噛みしめ、震える手で石の破片を懐の小袋に入れる。最期の一粒を入れた後、その間ずっとリュシエンヌを見下していたファルを睨みつけた。

「何をするの！」

ファルにどうしようもないほどの激しい怒りを感じる。今まで顔を突き合わせて話し込んでいた人物であろうと、王宮のお抱えの医者の弟子であろうと、リュシエンヌにはもうファルを許すことができないかも知れないと思った。

「これであとひとつ」

リュシエンヌの言葉を無視し、ファルは満足そうに言う。

手をかざすように目の前に持ってくる。その拍子に手にへばりついていた石の欠片がいくつか音を立てて落ちる。

「ふふ、久しぶりの痛みだね。あのとき以来だ」

ファルは微笑みを浮かべながら手に付いた残りの石の破片を払い落し、血で滲んだ掌を舌で舐める。その姿がひどく卑猥に見えリュシエンヌはこのような状況にも関わらずどきりとしてしまった。

ファルは座り込むリュシエンヌの前に立つと屈み顔を覗き込むようにする。端正な顔が目の前に来たが、言いも知れない恐怖が先立ちリュシエンヌは顔を俯けた。

そのとき、突然頭の奥が疼きだす。だが、いつものような頭が割れそうな痛みではない。治りかけの傷口を指で押し広げていくようなそんな不快でもどかしさを感じる痛みだった。

呻くリュシエンヌの様子を見てファルは笑みを深める。ファルの

笑みに不穏なものを感じたリュシエンヌは頭を抱えながら身体を強張らせた。
「君と話せてよかったよ。本当に何も覚えていないのがわかったからね」
愉快でたまらないというふうに声を出して笑う。
リュシエンヌはファルを見つめる。まるでリュシエンヌの過去を知っているような言い方に肌が粟立った。自分の過去を知っていたリュファスのときのような安心感は彼から感じ取ることはできなかった。むしろ不信感を募らせる。
「面白い……本当に面白いよリュシエンヌ。こんなに楽しいのは久方ぶりだ」
ファルは前髪をくしゃりと握りながら身体を揺らす。しばらく笑っていたファルだったが、突然動かなくなり目を見開いたまま、ぼんやりと虚空を見つめる。その様子にリュシエンヌは驚き、逃げることもせず見つめてしまう。
「消えるか」
そして、馬鹿にしたように鼻を鳴らすと軽薄な笑みを浮かべてリュシエンヌを見た。
「もう少し楽しみたかったけど、もうそろそろ限界みたいだ」
リュシエンヌには、ファルの言っている意味が全く分からない。それでもひとつだけわかることがある。
ファルはこの状況をとても楽しんでいるということだ。リュシエンヌは信じられない思いでファルを見る。
自分を見ているリュシエンヌのことなど気にした様子も見せず、ファルは再び身体を揺らしながら笑う。
「ふふ、君の大好きなリュファス様が来るかもね」
この場所の正反対にある場所で戦いの中に身を置いているはずの大切な人の名前が飛び出し、リュシエンヌは目を大きく開いてファルを凝視する。

「さあ、早いところ解いてしまわないとね」
改めてリュシエンヌに向かい合うとファルは目を細めた。
「とても強固な護りだね、これは。でも、王国の結界から出し石を砕いた今、解くのはそう難しいことじゃない」
「何を言ってるの？　リュファス様がどうして？」
言っていることが理解できずに顔をしかめた。
「君は先ほどから疑問ばかり口にするね」
それがファルの機嫌を損ねたようで舌打ちをする。その仕草がまたファルの上品な外見に似合わず違和感を与える。
ファルは歌うように声高らかに話し始める。
「いいかい？　魔物より無知な君に教えてあげるよ。この小屋は砦の中に存在こそしているがすぐ横は魔物の巣窟、そして魔物はここに入ることができる。本来ならここも王国の外なんだよ。聖騎士が幾重にもかけた強固な護りの届かぬ魔の世界」
一瞬で辺りの空気が冷えたような気がしてリュシエンヌは身震いをする。

「我らの領域だ」

それは突然やってきた。
まるで雷に打たれたような痛みが頭を襲う。衝撃で視界がぶれ、目が霞む。
視野がおぼろげになり、目の前にいるはずのフィルの姿が正確に捉えることができなくなる。それでも見据えようとすると、ファルを表すであろう黒い塊が、視界の中で小さくなったり大きくなったり交互に変化し始める。
大きい塊はファルだ。リュシエンヌよりも頭ひとつ分高くて横幅は悲しくもリュシエンヌと変わらない。では、小さい、リュシエンヌが持ってきた包み位ほどの小さな塊に見えるそれは一体何なのだろう。

小さな動物だろうか。しかし、先ほどまでこの部屋にはファルの他には何もいなかった。

頭らしき場所にふたつある三角は耳か、それなら犬だろうか。いや、違う。美しい曲線を描くしなやかな肢体にゆったりと揺れる長い尻尾。これは。

全身に鳥肌が立った。この世で最も恐れるべき動物に見えてしまい、リュシエンヌは腰を引きずりながら後ろに逃げる。リュシエンヌは普段からこの生物に対して並々ならない恐怖を持っていたが、黒を持つこの生物をとりわけ恐れているのだ。近寄られた途端失神してしまうほどに。

「ね……こ？」

「えっ」

リュシエンヌが恐怖でひきつりながらも声をだすと、ファルが驚いた声を出した。取り乱したのか視界の中で黒い塊が揺れた。

「そうか、生半可な偽りは見破られるか」

そのとき姿は黒い大きな塊だけになっていた。それからぶれることはなくなった。

しかし、その塊から異質が噴き出す。目には見ることのできない異質で辺りの空気が完全に変わった。周りを正確に見ることができないからさらに恐怖は倍増する。

何かに亀裂が走る音が聞こえた。

突如、脳裏に焼きつくような絵が浮かび上がった。

燃え崩れる家、倒れ伏す大切な人、その上に乗る、黒い黒い――――――。

リュシエンヌは何か恐ろしいことを思い出してしまいそうで頭を

振り乱して、今浮かんだ光景を頭の中から追い出そうとする。
頭を抱えながら歯をカチカチと鳴らす。身体の震えが止まらない。
恐ろしくもおぞましい凄惨な光景が、頭に、瞼の裏に焼きつく。
目をつむっていても迫りくるその光景から逃げるために目を見開いた。そしてファルに視線を移し、呆然としながら震える唇で呟いた。

「……あなたは誰？」

リュシエンヌの口からこぼれた言葉にファルは静止する。この男が医者の弟子であるという考えはとうに捨て去っていた。今、リュシエンヌは、目の前のファルという名前さえもこの男を表す言葉なのかさえ疑わしい。ただ得体の知れない美しい男。
ファルと名乗った男は歪んだ笑みを浮かべながら、リュシエンヌの頭をわしづかみにする。
「うあっ」
唇から悲鳴がこぼれる。感じる痛みが掴まれているからなのか、頭の奥からの痛みなのかわからなくなった。
「僕が誰だとか何だとか、そんなことどうでもいいことだよ。ただ、僕は君が欲しいだけだ。でも君の心がどうなろうと僕には関係ない」
だからしたいようにする、男はリュシエンヌの耳元で甘く囁いた。
何かに走った亀裂がどんどん広がっていく。同時に頭痛も徐々に酷くなり、意識が朦朧としてくる。それに追い打ちをかけるように男はリュシエンヌの頭をつかむ手に力を入れた。
「思いだしなよ。そして壊れてしまえ」
何かが砕け散る音とともにリュシエンヌの視界が真っ白に染まった。

第３４話　美しい夢　１

「よし」
リュシエンヌは自分が作り出した物体を満足げに見つめ頷いた。皿の上に乗っている灰色の塊が微かに震えているのは気のせいだろう。
「お父さん、お昼ご飯置いておくね」
物体を乗せた皿を置くと扉の中に声をかける。返事はなかったが、リュシエンヌは気にすることなく自分も同じものを食べるとすぐさま外に出た。
さんさんと降り注ぐ太陽の光に目を細め、それから軽く伸びをした。

リュシエンヌの日課はアシテの花に水をやることだった。アシテの花は少ない水分でも十分育つが水をやるとより一層美しい花を咲かせるのだ。
日は真上に上り、緩やかな速度で西に傾いていっている。
待ち人はまだ来ない。
しかし、反射する水の光で輝くアシテの花を眺めながら人を待っている時間は、どこにも外出することのないリュシエンヌにとって存外楽しいものなのだ。
「まだかな」
アシテの傍で屈み、リュシエンヌは城下街に続く道を見つめる。
リュシエンヌは従兄を待っていた。
昨日従兄から今日の昼過ぎに来ると連絡が来たのである。リュシエンヌは頻繁にこの家に来てくれる従兄が大好きだった。従兄は来る前に鷲で手紙をくれる。そのほとんどが一行のみの簡素な内容だったが、リュシエンヌは従兄が来てくれるだけで嬉しかった。
昨夜鷲がリュシエンヌのもとに手紙を届けに来てから、リュシエ

ンヌはわくわくしながら待っていたのだ。従兄からの手紙はリュシエンヌの部屋の棚に全てしまって保存してある。

従兄は来るとき大抵土産を持ってきてくれる。リュシエンヌの部屋には熊の木彫りの置物や国花を描いた布など従兄からもらったさまざまな物が飾られている。

それも楽しみの一つだが、リュシエンヌが一番楽しみにしているのは従兄が語ってくれる物語だった。

博識な従兄は家に訪れるたびに童話、歴史物語、伝奇、民話などをリュシエンヌに語り聞かせてくれる。この前は「聖なる騎士」について語ってくれた。この世を闇に覆おうとしていた魔王を封印した二代目の聖なる騎士の武勇伝は、聞いているだけでとても興奮した。

前回の最後に歴代の聖騎士は6人いると聞き、今日は他の聖なる騎士の物語をねだろうと意気込んでいるのだ。

一年前騎士団の副隊長に昇進してからは忙しいようでなかなか来れなくなってしまったが、それでも忘れずに来てくれるのが嬉しい。

花壇の前でいつ来るとも知れぬ従兄を待っている。それしかリュシエンヌはすることがない。

いるはずの父はあの日から一度もリュシエンヌの前に姿を現さなくなってしまった。食事のときは堅く閉ざされた扉の前に置いておく。そうしてまたしばらくして扉の前の皿を見ると綺麗に平らげてあるのだ。

何故このような状況になってしまったかリュシエンヌにはわからない。そのときからただ流されるように日々を生きている。

リュシエンヌに母はいない。亡くなったわけではない。そう信じている。しかし出て行ったのかと問われるとそれに対する明確な答えをリュシエンヌは持っていない。物心ついたときにすでにいなかったわけでなく、母と父と楽しく過ごしてきた記憶は今だリュシエ

ンヌの中から色あせずに残っている。しかし、優しく明るかった母は何気ない日常の中で忽然と消えてしまった。

ある穏やかな昼のさなか、リュシエンヌが昼寝から起きたとき母はいなくなっていた。居間に行くとテーブルが倒れ物が散乱し、部屋が酷く荒らされていたような記憶がある。母の姿が見えなかったので、その部屋の中でうずくまっている父に母のことを聞こうと声をかけると大げさな動作でリュシエンヌを仰ぎ見た。

ぽっかりと空いた空洞のような虚ろな目、リュシエンヌの存在を確認すると父は表情を変えた。そのとき見る父の顔は初めての表情でどんな感情なのかうかがい知ることは出来なかった。ただ、そのときから歪んだ顔と見開かれた瞳に映る感情のゆらめきがリュシエンヌの瞼の裏から離れることはない。

父は立ち上がるとリュシエンヌを避けるようにして父母の使っていた寝室に飛び込み内側から施錠した。それから一度も姿を見ていない。

部屋が片付けられるとそこは日常のように戻っていた。

使い古されたテーブルに椅子、色あせたマットは見慣れた光景で。確認したところ何も盗られてはいない。そもそも、慎ましやかに暮らしていた家族の家には金目になるようなものがあるはずはない。だから物盗りは諦めたのかもしれない。

しかし日常に戻ると思い知らされる。日常から母という存在だけが切り取られてしまっていた。

父も母の喪失に呼応するかのようにリュシエンヌの前には姿を現さなくなってしまったのだ。しかしリュシエンヌが日に二度作る料理は食べているようなので無事ではいるのだろうが、部屋の中で何をしているのかわからない。

母が消えたあのとき、リュシエンヌを救ってくれたのは従兄だった。父が部屋に閉じこもり荒れ果てた部屋の中で呆然と佇んでいた

リュシエンヌだったが、いつの間にか家に入ってきた従兄に抱きしめられていた。
従兄はしきりにリュシエンヌの無事を確認すると安心したようにその場に膝をついた。リュシエンヌは、従兄が来たことに安堵し姿の見えない母のことを聞いた。すると、従兄は顔を悲しそうに歪ませ、何も言わなかった。
その表情があまりにも苦しそうだったのでリュシエンヌはそれから従兄に母のことを尋ねることはなかった。
母が消えた理由はわからない。その日からリュシエンヌは一度も母とは会っていない。
母が出て行ってから、月に一度姿を見せるか見せないかくらいの従兄の訪問数が劇的に増えた。一時期は二日に一度は顔を合わせていたこともあった。
そのせいか、リュシエンヌはそこまで寂しいと思うことはなかった。また、リュシエンヌが寂しくないと思う理由は、いつか母が帰ってくると心で思っているからである。
奔放で放浪癖のある母は父やリュシエンヌと違い、よくひとりで旅行に行っていた。帰ってくるたびに土産を持って、そう、まるで現在の従兄のように。リュシエンヌが現在も身につけている青い石のペンダントも母の土産だった。ただ、他の土産と違うのは絶対に手放してはいけないときつく母に言われたことだった。
何年も家を空けるなどということはなかったが、そういった性癖のある母だからこそ、きっと母が帰ってくると思っているのかも知れない。
昔はつけない日もあったペンダントだったが、今は常に身につけている。

昔の記憶に思いはせているとリュシエンヌは顔を上げた。
視線の先にはまだ点にしか見えないような人影があった。顔も分

からないが従兄のレイナルドであるとリュシエンヌは確信した。
影が近くになるにつれリュシエンヌははやる気持ちがわきあがる。そして、レイナルドがリュシエンヌを見て微笑む程の距離になったとき、リュシエンヌは従兄に走り寄りそのままの勢いで抱きついた。ふんわりと笑って従兄レイナルドはリュシエンヌを抱きとめる。
「リュシエンヌ」
慈しみを込められ呼ばれた自分の名にリュシエンヌは顔をほころばせた。
「兄さまっ待ってたよ」
「リュシィ、悪かったね二週間も来れなくて」
困った顔で謝る従兄にリュシエンヌは首を振った。
「今日はストールを買ってきたんだ」
そう言ってレイナルドは小包から淡い黄色のストールを取り出し、リュシエンヌの肩を包んだ。ストールに身を包んだリュシエンヌを見ると満足そうに頷いた。
「よく似合う」
「ありがと」
従兄にもらったストールを嬉しそうに抱きしめるともうひとつリュシエンヌが楽しみにしていたものをねだった。
「兄さま、今日はまた聖なる騎士様のお話が聞きたいの」
リュシエンヌが言うと、レイナルドは困った顔をしてリュシエンヌを見た。
「ごめんな、今日はこの後また仕事があるんだ。すぐに帰らなくちゃいけない」
つまり従兄はただストールを届けに来てくれただけなのだった。
「そっか、じゃあ次に楽しみにしてるね」
リュシエンヌはあからさまに落ち込むことはせず、そう言って笑った。その笑顔が微かに引きつってしまったのがレイナルドに気づかれてしまったのか、レイナルドは辛そうな顔をする。そして申し訳なさそうにリュシエンヌの頭をなでた。

「本当にごめんな。俺はいることができないんだけどな……」
そう言ってレイナルドは言いにくそうに頬をかく。
「連れがいるんだ」
そう言ってレイナルドは後ろを振り向く。そこで初めてリュシエンヌはレイナルドの後ろにもう一人いることに気付いた。
レイナルドの声に反応し、後ろにいた人物は前に出てくる。そのとき、リュシエンヌは辺りの空気が張り詰めるのを感じた。
リュシエンヌは、燃えるような鮮やかな赤い髪、澄んだ川の水のような瞳にくぎ付けになった。
「紹介するよ」
レイナルドが微笑みながら言う。
「リュファス・ブランヴィルだ」
紹介されたリュファスという青年は不機嫌そうにリュシエンヌを見た。

第35話　美しい夢　2

頭上に浮かぶ太陽は容赦なく光を降り注ぎ、動かなくてもじっとり汗ばむほどの陽気だった。

しかし温度を感じさせない男の氷の瞳に見つめられリュシエンヌの周囲が冷え冷えとし、滲んでいた汗も引っ込んだ。男のえも言われぬ威圧感にリュシエンヌは驚き身体を竦ませた。

しかし、リュシエンヌはやはりリュシエンヌだった。すぐさま身体の緊張を解くと一歩前に出た。唐突に現れた見知らぬ無愛想な男に恐怖を抱くことはなく、初めて会った家族以外の人間に興味を持ったのだ。

従兄や自分の持つ暗い紺色の髪とは違う周囲を照らしてくれる炎のような真っ赤に燃えあがる髪、それとは正反対で真冬の川の流水のような澄んだ淡い水色の瞳、そのような対照の色を持つ男の姿にリュシエンヌの視線はくぎ付けになる。

今のリュシエンヌには従兄のことやそれ以外のことが全て頭から吹き飛び、ただ目の前に立つ男だけに意識が注がれていた。

黙って男を見つめてる姿が男の存在に怯えていると思ったのか、動かないリュシエンヌの頭を撫でてレイナルドはリュシエンヌを守るようにリュファスの前に出てその端正な顔を睨みつけた。その際レイナルドでリュファスの姿が隠されてしまい見ることができなくなったリュシエンヌが不満そうにしたのはレイナルドは気づいていない。

「おいリュファス、お前が凄むせいでリュシエンヌが怖がってるじゃないか。少しは笑え」

「別に凄んではいない」

リュファスと呼ばれた青年はレイナルドの言葉に耳を貸した様子もなく憮然とした態度を崩さない。

形の良い唇から紡ぎだされた声は低く、周りの空気を振動させ耳に伝わる。その心地の良い声にリュシエンヌは聞き惚れた。

「おい、リュファス」

レイナルドが苛立ちを込めて名を呼ぶ。リュファスは何も言わず視線をレイナルドに向けるだけだった。リュファスの反応にレイナルドが苛立たしそうに舌打ちをする。

周りを気にせずリュファスの持つ色彩に見とれていたリュシエンヌだったが、ふと気付くとリュファスの先ほどよりも機嫌の悪そうな態度にレイナルドの目に灯った剣呑な光、鈍いリュシエンヌでもわかるほど場の空気が重くなっていた。

リュシエンヌは咄嗟に庇うように肩に置かれていたレイナルドの手を解き、リュファスの前に出る。そして丁寧に頭を下げた。

「こんにちは、兄さまのお友達のリュファス様」

物心ついたときにはすでに他人とは接していなかったのでほぼ初めてと言っていいのか、家族以外の人間と対面し緊張しながらも挨拶して頭を下げ顔を上げると、リュシエンヌを見ていたリュファスと目が合った。

リュファスは驚いたように軽く氷の瞳を見開きリュシエンヌを見る。次の瞬間には逸らされていたが。

そしてリュファスは何かを思案するように視線を地面に落とす。

顔を上げ再びリュシエンヌを見たとき、その硬い表情は崩れ眼差しも和らげられていた。その柔らかな眼差しにリュシエンヌは驚くが、それを気にすることなくリュファスは澄ました顔でレイナルドに視線を移した。

レイナルドはリュシエンヌの動作を見て多少の苛立ちはおさまっていたようだが、リュファスの視線を受けるとまた厳しい表情をした。

レイナルドを見てリュファスは唇の端を歪める。そのリュファスをレイナルドは訝しげに見つめた。

「兄さま……か」
リュファスがからかうように言うとレイナルドは途端に頬を赤らめてリュファスを睨みつける。先ほどとは違い、どこか照れと羞恥を含んでいた。
「黙れ、お前が呼ぶな」
リュファスは軽く笑う。
「柄じゃないな」
「なんだとこの野郎」
先ほどまでの剣呑な空気はすでに霧散していた。
いきなり雰囲気の変わった二人にリュシエンヌは驚く。レイナルドの乱暴だがその言葉使いが相手に気を許しているようで、またリュファスもレイナルドに親しみを込めて接しているように見える。
「副部隊長殿とあろう者がそんな甘ったるい呼称があるとはね」
「黙れってんだよ。リュシエンヌはいいんだよ。俺の可愛い従妹なんだから」
断言する男をリュファスは微妙な顔をして見る。
「……傍から見ると危ない奴だぞ」
「うるせえよ」
リュシエンヌは目の前で交わされていく会話に入ることもできず、ただ聞いていた。拒絶されているわけではないのだが、自分が入り込めない何かが二人の間にはあった。そもそも会話に入り込むつもりもなかったのだが。
「まあ、いいがな」
リュファスは会話を中断させリュシエンヌに向き直った。
「先ほどは悪かったな。こいつに無理やり連れてこられたもんでな」
眉はひそめられ不機嫌そうに見えるが、どこか困っているようにも見える。もしかしたら周囲が感じているほどには機嫌が悪いわけではないのかもしれないとリュシエンヌは思った。

「改めて紹介するよ。この男はリュファス・ブランヴィルといって俺と同じ騎士をしてる」
「レイナルド副部隊長の部下にあたる」
そうリュファスが付け加えるとレイナルドはじとりとリュファスを睨んだ。
「何が部下だ。俺の言うことなんか聞かないだろうが」
「本当のことを言っただけだろう」
「でも、本当に仲が良さそう」
同年代の子供たちとましてや家族以外の人間との交流がないリュシエンヌが羨ましそうに言うと二人は黙って小さな少女を見た。そして顔を見合わせる。
「まあ、年はリュファスの方が下だけど同期だし、気も合ったしな」
「腐れ縁だ」
そうして二人は再びリュシエンヌを置き去りにして話し出す。それでもリュシエンヌはその会話を聞いているだけで楽しかった。

傾いた太陽を見てレイナルドが呟いた。
「ああ、もうそろそろ行かなきゃなあ」
気付くとほぼ真上にあったはずの太陽は西へだいぶ傾いていた。二人といるのが楽しくて忘れていたが、レイナルドには仕事があったのではないのだろうか。
心配そうに見るリュシエンヌの視線に気づきレイナルドは曖昧に微笑んだ。
「あー、大丈夫だから」
「何が大丈夫なんだ？　仕事があるのに抜け出してきた奴が」
その言葉にリュシエンヌが反応する。
「兄さま……お仕事すっぽかしてきたの」
リュシエンヌに指摘をされてレイナルドが言葉に詰まるのをリュ

ファスは面白いものを見るように傍観していた。
「駄目だよ」
リュシエンヌが困った顔で言う。自分に会いに来てくれるのは確かに嬉しいのだがそのためにレイナルドが仕事を放棄するのは心苦しい。
「お前が余計なこと言うから」
レイナルドはお前が失言をしたというふうに恨めしそうにリュファスを見る。それを受けてリュファスは軽く肩をすくめた。
「リュファス」
唐突にレイナルドが真面目な顔になりリュファスの名を呼ぶ。リュファスはその声にすぐに振り向いたが、レイナルドが次の言葉を発するまで微かな間があった。そして神妙な顔をして呟く。
「先ほどの話、受けてくれるか？」
いきなり振られた話にリュファスは眉を寄せ、
「いつか理由を聞かせろ」
たったそれだけ言った。
レイナルドは無言で頷く。
リュファスが了承したのを確認してレイナルドはリュシエンヌに向き直った。そしてリュシエンヌの前にしゃがみこみ、紺の髪を優しくなでた。
「リュシエンヌ、俺はもう行くよ」
リュシエンヌは寂しい気持ちを抑えて笑顔で頷いた。しかし、その寂しさはレイナルドの次の一言で消し飛んだ。
「その代わり今日はリュファスに残ってもらう。こいつは今日非番だからな」
最初レイナルドが何を言ったかわからずにリュシエンヌは首を傾げたが、意味を理解すると驚愕の表情でレイナルド、次いでリュファスを凝視した。目を向けられたリュファスは腕を組んで視線をリュシエンヌに向けず、他方を見ていた。
「これからは、本当に時々たがリュファスもここに来る。ひとり

で来るときもあるかもしれない……そのときは、奴を迎えてやってくれないか」
従兄の口から飛び出す信じられない言葉の数々にリュシエンヌはただただ驚いたが、従兄の真剣な表情を見て自分も神妙な顔になり頷いた。昔から従兄は間違ったことをリュシエンヌには言わない。
「じゃあ俺は行く。リュシエンヌ、またな。リュファス……よろしく頼む」
そう言って手を挙げると従兄は嵐のように去って行った。
未だほとんど会話をしたことがない男と少女を残して。

さすがにリュシエンヌもこの後どうしていいのかわからなかった。
従兄は晴々とした顔で帰って行ったが、自分が去った後の展開は考えなかったのだろうか。一言二言しか言葉を交わしていないリュシエンヌたちがすぐに打ち解けるとでも考えているのだろうか。
リュシエンヌは遥か遠くなったレイナルドの後姿を見つめる。
昔から知っている従兄のことが少々分からなくなったリュシエンヌだった。

しかしいつまでもこうして突っ立っているわけにはいかない。自分が話しかけなければ無言で一日が終わってしまいそうだったので、リュシエンヌは思い切って切り出した。
「えと、まず呼び名を決めた方がいいと思うんです」
そんなリュシエンヌをリュファスは不審げに見る。それを見て慌てて「愛称ですかね」と付け加えた。
「呼び名？　そのままでいいだろう」
「親しくなるにはまず呼び名からって本に書いてあったんです」
間違ってなくもないが、とリュファスは小さく呟きながらなおも訝しげな顔をした。リュファスの顔にリュシエンヌは自分の知識が間違っていたのかと急に不安になってきた。自分の知識は本と従兄から聞いただけの狭い視野しか持っていないのであまり自分でも自

信はもっていない。
「もしかして違いました？　私、家族以外の人とこうしてお話しすることがなかったから……間違ってたら言ってほしいです」
「いや、いいだろう別に」
思わぬリュファスの肯定の言葉にリュシエンヌは勢いよくリュファスを見ると嬉しそうに微笑んだ。
リュファスを見ると目を細めながらリュシエンヌを見つめている。
「じゃあ考えますね」
そう言ってリュシエンヌは腕を組んで目を閉じた。険しい表情を顔に張り付けながら考える。
「リュファス様だから……」
「いや、無理して考えなくても」
「あっ」
気遣うリュファスの声を遮りリュシエンヌは声を上げた。
「リュー様」
我ながら良い呼び名だと思いリュファスの方を見ると、何故か唖然とした顔でリュシエンヌを見ていた。
「リュー様？」
リュシエンヌはにこにこしながらたった今決まった愛称で問いかけると、リュファスははっとし顔を引き締め、そして苦笑する。
「自分の名前がそこまで省略されるとは思っていなかった。だが、それでいい」
リュファスの反応に不安げに揺れた顔に気付いたのか、リュファスはリュシエンヌが口を開く前に頷いた。
初めてできた家族以外の親しい人にリュシエンヌは嬉しくなって、たった今できたリュファスの愛称を連呼する。
「今日、リュー様に会えてよかった」
「そうか」
早くもリュファスの存在に安心感を覚え始めているリュシエンヌはリュファスの周りをくるくると回る。

「リュー様はどうしてここに来たの？」
「さあな。俺もレイナルドにいきなり連れてこられたからな。ただ、あんなに切羽詰まった様子のあいつは……いや、なんでもない。きっとどこにも出かけないお前の話し相手として連れてこられたんだろう」
その言葉にリュシエンヌは考えるように俯き、そして顔を上げ懇願するように言った。
「リュー様は騎士様だから強いよね」
「どうした？　いきなり」
「リュー様がいれば、兄さまは私がこの家から出ても怒らないかな」
「どこか行きたいところがあるのか」
「この家と城下の間の林を奥に入っていくと琥珀色に輝く湖があるって兄さまが言ってて」
話を無言で聞くリュファスの目を見ることができず俯き加減でリュシエンヌは言いにくそうに言葉を紡いだ。
「でも、兄さまは危険だからってひとりではもちろん兄さまが一緒でも行ってくれなくて」
出来れば行きたいなあ、とリュシエンヌはリュファスを恐る恐る見上げる。そして目を見開いた。
リュファスは淡く微笑んでいたのだ。口の端を軽く上げる程度だったが、不機嫌そうではなく目も柔らかく細められていた。初めて見るリュファスの笑みにリュシエンヌは何故か鼓動が激しくなり心臓が破裂してしまいそうになる。
「……リューさま」
リュファスはリュシエンヌに背を向けて歩き出す。しばらく歩くと振り返り、動けないでいるリュシエンヌを見て顎を引いて合図をした。
「それなら今から行くか……リュシィ」
慌てて後を付いて行ったリュシエンヌは歩いている途中で自分の

愛称が呼ばれたことに気づき、幸せそうに微笑んだ。

第３６話　美しい夢　３

それからリュシエンヌの楽しみは倍以上になった。レイナルドだけではなくリュファスも仕事が休みのとき、非番のときに来てくれるようになったのだ。

それぞれがひとりで訪れてくれることもあれば本当に稀だが二人で一緒に来てくれることもあった。

レイナルドは訪れる前日に鷲を飛ばして知らせてくれるが、リュファスは前もって来るということを言わないので毎日期待しながら過ごすことができた。

リュファスといるときはレイナルドの話、レイナルドといるときはリュファスの話、二人がいるときはリュシエンヌが二人の会話を聞くということが当たり前になった。しかし、リュファスと一緒のとき色々な所に連れて行ってもらっているのはレイナルドには内緒だった。

リュファスと一緒なら許してくれるかもしれないと思ったが、心のどこかで反対されるのが怖かったのかも知れない。そう思ったリュシエンヌはレイナルドに内緒にしてほしいとそれとなくリュファスにも口止めをしてしまった。

湖に行った後何度かレイナルドが来たが、何も言ってこないところを見るとリュファスも内緒にしてくれているのだろう。

従兄に出来た初めての秘密にリュシエンヌはドキドキした。

「お久しぶりです、リュー様」

忙しかったのか、半月ぶりにリュファスの姿を見たリュシエンヌは飛びつくような勢いで駆け寄った。リュファスの前に着くなりリュシエンヌは言う。

「また湖行ってもいいですか」

リュファスは呆れたようにリュシエンヌを見た。
「本当にあの湖が気に入ったんだな」
「はいっ私あんなにたくさんの水の塊を見たのは初めてです」
林の中にある琥珀色の大きな湖、前にリュファスと一緒に行ったとき一周したのだが、ゆっくり歩いていたとはいえ二十分もかかってしまったのだ。
リュシエンヌの裏に流れているのは小川で歩いて渡れてしまうほど浅いのだ。料理や洗濯にはそれで十分なのだが、湖を見てしまうと何となく小川では物足りなくなってしまった。
久しぶりに湖へ行けることに興奮しているリュシエンヌを見てリュファスはぽそりと呟く。
「……海を見たらどうなるか」
リュシエンヌはリュファスが苦笑しながら言った言葉に目を輝かせる。
「海！　海ですか。大陸を囲む水の塊。絵でしか見たことがないんですが、この湖よりも広いなんて想像もつかないです」
「いつか、連れて行こう。ここからは近いから」
「本当ですか！」
期待を込めた眼差しを向けられリュファスの瞳は柔らかく細められる。
「ああ」

細い道に入った。もうそろそろで緩やかな勾配が見えてくる。
ようやく見慣れてきた道、その上に今日は見慣れぬ鳥がいた。赤く炎のような身体に翼の先に行くにつれ緑に変化している酷く不思議な色彩をした鳥だった。
「綺麗な鳥」
「ああ、パァンだ」
「パーン……」

初めて見る美しい鳥にリュシエンヌは見とれる。威厳すら感じられる鳥はリュシエンヌの不躾な視線など気にした様子もなく、空を見ていた。

よそ見をしながら歩いていたせいか、足を動かす意識が疎かになり、靴の底を変な擦り方をしてしまった。がくんと前のめりになる。いつもならそのまま転んで済んでいたのだが、倒れそうになったところに生まれて間もないだろう子犬がよたよたと歩いていたのだ。なんという嫌な偶然なのか、咄嗟に避けようと身体をひねると足元から鈍い音がした。

痛みに顔を顰め、そのまま重力に従って地に倒れこむ。気付いたとき目の前は湖に向かう坂道だった。

「あっ」

「リュシエンヌっ」

リュファスが手を伸ばす。しかしリュシエンヌの身体には届かず、無情にも坂道を転がり落ちて行った。

横向きで回りながら転がっていくリュシエンヌは、完全に目が回ってしまい自分で止まることができない。

そのまま派手な音を立てて湖に落ちる。

リュファスとともに何度か湖に来ても、今までは足を浸すだけで身体ごと水の中に入ったことはなかった。思いのほか深い湖と転げ回ったせいで今だ戻っていない平衡感覚、極めつけにリュシエンヌは一度も泳いだことがなかった。

リュシエンヌは無我夢中でもがくが一向に浮かび上がることができない。むしろ上がっているのかさえも判断できなかった。

絡みつく水の塊、重くなる衣服、手や足をがむしゃらに動かしながらこんなにも水というものは恐ろしいものだったのかと思い知った。

薄れゆく景色の中で母の顔が思い浮かんだ。

「リュシエンヌっ」

転げて行ったリュシエンヌの後を追ってきたリュファスが激しい水音を聞き、慌てて湖の傍に駆け寄った。
浮かんでこないリュシエンヌにリュファスは眉をひそめ、マントの留め具を素早く外すと湖の中に飛び込んだ。
冷たい水中に眉をひそめる。地上から見ると琥珀色に輝く湖も底に近づくにつれ暗くなっていく。リュファスは目を凝らしながらリュシエンヌの姿を探した。
闇の中でぼんやりと浮かび上がる白。リュシエンヌが来ていたワンピースの色だった。リュファスはそこに手を伸ばしリュシエンヌの身体を引き寄せると勢いよく浮上した。
水面から顔を出すとリュシエンヌの身体を抱えながら岸へと泳ぐ。
リュシエンヌの身体を湖の傍に横たえると様子をうかがう。
しかし、その顔色は青白く、ピクリとも動かなかった。
リュファスは慌ててリュシエンヌの息を確認する。そして顔を歪めた。
「リュシエンヌ」
リュファスはリュシエンヌの名を呼ぶと頭に手を添え、軌道を確保し少し空いた唇に自分の唇を押しあて息を吹き込む。
唇を離すと心臓の上に手をあてる。一定の間隔で衝撃を与える。
「リュシィ……リュシエンヌ！　起きろ」
もう一度唇を押しあて息を吹き込む。
リュシエンヌに微かな反応があった。水を吐き出すと咳をする。
「リュシエンヌ」
軽く頬を叩きながら呼び掛ける。
うっすらと目を開けたリュシエンヌにほっと息をつく。開けられた瞳はリュファスを映してはいるが、まだ思考が働いていないようでその中に感情を読み取ることができない。
「大丈夫か」
リュシエンヌの喉が震えた。何かを言っている。リュファスは耳を近づけ言葉を聞き取ろうとする。

「子犬は……大丈夫でした？」
掠れた声で紡いだ言葉はすでに逃げてしまった子犬の心配だった。
そのどこかずれた言葉にリュファスは烈火のごとく激しい怒りがこみ上げる。
「お前は死にかけたんだぞ！　分かっているのか。犬のことよりも自分の心配をしろ」
あまりの危機感のなさに、思わず大きな声でリュシエンヌを責めてしまう。それにリュシエンヌは情けない顔をする。
「だって一番最初に思い浮かんだのが、子犬のことだったんです」
そして苦い笑みを浮かべるリュシエンヌ、しかしその言葉や表情にリュファスは胸が締め付けられた。
「お前に何かあったら残された者たちのことを考えてくれ」
リュファスは諭すように言った。
「レイナルドはきっと号泣してお前を守ってやれなかったと、これから悔やみ続け一生を過ごすだろう。想像してみろ」
想像した結果可笑しかったのだろう、リュシエンヌが笑いをこらえるように唇を引き結んだ。その表情にリュファスは呆れ、そして幾らかの安心をおぼえる。自然とリュファスの表情も緩んだ。
「俺もお前の息がなかったとき心臓が止まるかと思った」
傍らに置いてあったマントっで身体を包んでやりながら渋い顔を作り、リュシエンヌを見る。
「だから自分を大切にしてくれ」
リュファスがそう言うとリュシエンヌは不思議そうに首を傾げ、そして悲しそうな顔をする。
「ごめんなさい」
きっと自分が伝えたいことはこの少女にはあまり伝わっていないのだろうなと思いながら不安そうにしているリュシエンヌの濡れた頭を乱暴にかき混ぜた。
特殊な環境に身を置いていた少女にすぐに理解してもらおうなどとは思っていなかった。自分よりも他のことを優先させることを悪

いことだとは言わない。自分の利益や保身のことしか考えない人間をリュファスは嫌というほど知っている。ただ、少しずつでいい、自分が他人から必要とされているのだと知っていってほしい。

リュファスは帰り道ずっと何かを考えているようで、リュシエンヌが話しかけてもうわの空だった。

怒らせてしまったのかと思ったが、そういう感じではなかった。

リュシエンヌが湖に落っこちるという出来事があったが、思い返してみると今日会ったときからどこか様子がおかしかったかも知れない。

リュシエンヌたちは家に帰るとリュファスにレイナルドが泊まりに来たとき用の着替えを渡し、自分も着替えた。

何か豆のようなものが浮いている深緑のお茶をリュファスに出し、リュシエンヌも椅子に座り一息つく。

今だリュファスはずっと何かを考えているようだった。

「お前は他人の為に懸命になれるのだな」

そして、ふと声を漏らす。

いきなり呟かれた言葉にリュシエンヌは反応することが出来なかった。

「犬の為にその身を投げ出す。きっと困っている奴がいたらどんな人間の為にでも簡単にその身を投げ出すんだろうな」

「私、そんなすごい人間じゃ」

「言っておくが、褒めてるわけじゃない」

リュファスの言葉に「そうですか」と言ってリュシエンヌは肩を落とす。

「俺はあまり他人のことをよく考えたことがない」

唐突にリュファスは話し始めた。リュファスを見るとその瞳は揺れ、何かを懸命に耐えているように見えた。

「どこかで壁を作っているのかもしれない。だから、他人に何か

があっても所詮他人だから自分には関係ないと割り切っているのだろうな。だからあまり他人を助けるといったことを思い浮かばない」
初めてリュファス自身のことを聞いた気がして、リュシエンヌの鼓動が速くなる。しかし、投げやりな言葉と自嘲しているような表情にすぐに悲しくなった。
「それってなんか寂しいですよね」
思わず出てしまった言葉に、リュファスが顔をしかめたのでリュシエンヌは身を縮こまらせた。しかし、リュファスが続きを促す。
「続けろ」
「……だって知らない人でも困っていて、手助けしてあげたらそこから知り合いになれるじゃないですか。もしかしたら自分が困っているときに助けてくれるかもしれない。変な言い方ですけど、人を助けて得はすれども損はしないと思うんです」
リュファスは何かを言おうと口を開く。しかし、それには気付かずにリュシエンヌは言葉を続ける。
「他人に関わらなかったらそれで終わってしまいます。もしかしたらその人が自分に大切なことを伝えてくれるかもしれない。そう考えたら苦じゃなくなりませんか？　リュー様ならきっと色々な人のお役に立てると思うんです」
ただリュファスに人と接して欲しいだけなのだ。自分は他人とは関わることができないから、せめてリュファスやレイナルドには多くの人間と関わってほしい。
「人と関わることができないから……動物や植物たちが私の前で犠牲になるの嫌なんです」
うまく言葉にすることができなかった。自分の考えが伝わっているのか分からず、リュシエンヌは不安そうな顔でリュファスを見る。
否定されてしまったら多分何も言い返すことができない。
「人の為に、自分の為に、そうすれば苦じゃない……か」
リュファスは目を伏せ、その言葉をかみ砕くように復唱する。
「そうか……大きいな」

そう言ってリュファスは淡い笑みを浮かべる。
「何か、可笑しいですか？」
「いや、そのままでいい」

「お前と話していると時間を忘れるな」
（これは褒めてる気がする！）
拳を握り静かに喜びを表す。
不審な動作をするリュシエンヌを気にせずリュファスは立ち上がり、家の外に出る。もう陽は完全に落ちていた。
「リュシエンヌ……」
「はい」
名を呼ばれリュファスを見ると戸惑いの表情を浮かべていた。躊躇うように口を開き、言葉を発する前につぐんだ。
「いや、なんでもない。また来る」
そう言ってリュシエンヌから顔を逸らし、背を向けた。

第37話　美しい夢　4

リュファスが帰った後しばらくしないうちに鷲がレイナルドの訪問を伝えてきた。
ワクワクしていたリュシエンヌだったが、着替えて床に就こうとしたとき、あるはずのものがないことに気付き、身体から音を立てて血の気が下がった。
「ない……」
いつも肌身離さず付けていた母からもらった青いペンダントがなかったのだ。

落としてしまったと諦めるにはペンダントは大切すぎて、ないことに気付いてからリュシエンヌはずっと落ち込んでおり、レイナルドが来てもなかなか会話に集中することができなかった。
それでもレイナルドが語る「4代目聖なる騎士の嫁取り珍道中」は面白く一瞬でもリュシエンヌの頭からペンダントのことを忘れさせた。
物語を語り終えるとレイナルドは一息つく。
「リュファスは昨日来たのか」
「うん、リュー様って来るときは兄さまにも言わないの？」
「ああ」
「あいつはそういうことは言わない奴だからな」とレイナルドはぶっきらぼうに言った。

心に灯る不安を消し去るように今日は珍しくリュシエンヌからたくさん話しかけるがレイナルドはどこか上の空だった。昨日のリュファスといい、今日のレイナルドといい、二人ともどこか様子がおかしい。
リュシエンヌの方もレイナルドの様子に比例して気持ちが不安定

になっていく。
　レイナルドには常々ペンダントを手放してはいけないと言われていた。なくしてしまったと言ったときのレイナルドの反応が分からず、伝えていいのか思いあぐねていた。
　ペンダントを失くしたことを言おうか言うまいか葛藤しているリュシエンヌにも気付かないレイナルドが机に肘をついたままぽつりと呟いた。
「リュファスはしばらく来れないと思う」
「へぃ？」
　思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。言われたことを理解できず考え込んでしまった。
　そういうことは昨日リュファスは言っていなかった。リュシエンヌはそう思ったがリュファスのことだからリュシエンヌにわざわざ言う必要もないと判断したのかもしれない。それをわざわざレイナルドが伝えてくるのか分からなかった。リュファスのことも毎日待っていると知って気を使ったくれたのだろうか。
　不思議そうな顔をしたリュシエンヌに気付いているのかいないのかレイナルドは疑問に答える形で話し始めていく。
「あいつのことだからリュシエンヌには言ってないと思ってな」
　レイナルドは苦笑する。
「これから日が近づいてきたから式の準備で忙しくなるだろうし」
　一体何の式だろうと、首を傾げるリュシエンヌにレイナルドは意味深な笑みを浮かべる。
「何の式だと思う？」
「えー私に分かるわけないよ。何かお祝いごと？　結婚式？」
　自分で言っておいてリュファスが結婚するということを想像すると少しへこんだ自分を不思議に思った。レイナルドなら寂しいけれど嬉しい気持ちの方が強いのだが、リュファス相手だと悲しい気持ちが勝ってしまう。
　頭の中でぐるぐると考え落ち込んでいるリュシエンヌに気付かず

レイナルドは衝撃的な一言を発する。

「リュファスの聖騎士の任命式だ」

その言葉にリュシエンヌの動きが止まる。頭も真っ白になり動きだけでなく息が止まりそのまま心臓も止まるかと思った。

「リュファス様が……聖なる騎士様？」

しばらくしてやっと出すことができた声は震えていた。

「そう、第９代……８２年ぶりの聖騎士の誕生だ」

心臓が高鳴る。聖騎士という言葉を多く聞いてきたがこれほど感情を動かすその言葉は初めてだった。

幼いときから聖なる騎士の武勇伝を聞き、リュシエンヌにとって夢のような存在で憧れだった。でも、大昔に存在していた人物で所詮物語の中での話であり、従兄がなってくれたら嬉しいと思ったこともあったが、やはり想像するだけだった。そんなおぼろげな存在が突如輪郭を持ったのだ。リュシエンヌの中で聖なる騎士とリュファス・ブランヴィルという存在が結びついた。

「リュシエンヌっ……」

レイナルドの慌てた声にリュシエンヌは我に返った。どうしたのだろうと従兄を見ると心配そうな顔をしてリュシエンヌを見ていた。頬に違和感を感じ、触れてみると濡れていた。

「これは」

何故濡れているのかと思った。

「泣いてる」

泣いている、これが涙。これが涙というものか。

「どうしてだろ……悲しくないのに」

涙は悲しいときに流すものだと母が教えてくれた。しかし、今リュシエンヌは悲しくはない、むしろ。

不思議に思うリュシエンヌに言い聞かせるようにレイナルドは言う。

「涙は悲しいときだけ流すものじゃない」
そう言われてもよく分からなかった。ただ心の底から湧きあがるこの不可思議な気持ちと関係しているのかもしれない。
「リュファスがお前の……騎士になってくれることを」
レイナルドが言った言葉の後半は聞きとることができなかったが、リュシエンヌは聞き返さなかった。
「じゃあリュファス様はしばらく来れないんだね」
リュファスが自分の口から直接伝えてくれなかったことに多少の寂しさを感じながら言った。それでもリュファスが聖騎士に任命されたということは嬉しかった。

「これであいつも一気に俺の上司なんだよな」
レイナルドが複雑そうな顔で呟いた。
「どうして？」
「ん？　ああ、聖騎士は結界を維持し、騎士を束ね民を守る役目にある。聖騎士になったら問答無用で騎士団長になるんだよ。まあ、あいつは若いし今の騎士団長の下で経験を積むためにしばらくは副団長だがな」
いずれ団長になるということは現在の団長はどうするのだろう。
「今の団長さんは……」
「現団長はいいお年だからな、これで次期に悩まなくて済むと豪快に笑っておられた」
苦虫を噛み潰したような顔になってレイナルドは言う。
「まあもともとは実力があったし人望も何故かある。反発する奴なんてそうそういないだろう……というかこの国では聖騎士は絶対的存在だから否定の言葉なんか上がらないだろうな」
今日のレイナルドはいつになく饒舌だった。リュファスを褒めたくないと嫌そうな顔をしているが、きっとリュシエンヌと同様にリュファスが聖騎士になることに感銘を受けているのだろう。

そこからはほぼリュファスの話だった。王宮でのリュファスの生活態度、女性遍歴、あんなんだが実は貴族の端くれなんだとか、本人がいないのにこんなことを知ってしまっていいのだろうか、ということも話してくれた。

それでもリュファスは自分のことをあまり話さないので少しリュファスのことを知れてよかった。

レイナルドは帰り際リュシエンヌを見て言う。

「ああ、任命式のとき民も貴族もみんな浮足立つだろう。その日は決して外に出てはいけないよ」

「私は見に行けないんだね」

残念な気持ちが顔にも出てしまったのだろう、レイナルドは辛そうな顔をしてリュシエンヌの頭を撫でた。

「悪い。俺もその日は任命式に出席しなきゃならないし、もしリュシエンヌに何かあったら守ってやることができないんだ」

「私なんか誰も襲わないよ」

それはずっと思ってた疑問だった。どうもこの従兄は自分に対する態度が過保護すぎる気がする。あまりにも当たり前すぎて気付かなかったのだが、リュファスと接するようになって従兄の異常なまでの過保護さに気が付いたのだ。

「リュシエンヌ」

レイナルドは少し咎めるようにリュシエンヌの名前を呼ぶ。レイナルドは屈みこみリュシエンヌの両肩を掴むと言う。

「俺はお前が大切だから言っているんだ。お前の身に何かあってからじゃ遅いんだよ」

レイナルドの指が肩に食い込み、痛みでリュシエンヌは顔をしかめる。

「外の世界はお前が考えているよりもずっと危険なところなんだ」

「うん」

リュシエンヌは頷いた。レイナルドは安心したように胸のところに手を置いた。そして何かを掴む仕草をする。

「窮屈な思いをさせているのは分かってる。ただ、外に出たらあらゆるものがお前に牙を向くかもしれない。正直言ってここも安全とは言い難い」
レイナルドが何かを伝えたがっているのは分かる。しかし抽象的すぎてリュシエンヌには理解することができなかった。
「だから、石を手放すな。それはお前の一番のお守りだ」
心臓が跳ねる。鼓動が激しくなるのを感じながら、ないペンダントの石を掴むような仕草をしてリュシエンヌは俯き小さく頷いた。
「俺もお前を守る……さん」
誰かの名前を小さく呟いたが、リュシエンヌには聞き取れなかった。
「じゃあ、俺は行くよ」
家から離れるレイナルドの後姿を見送っていた。その姿が不意に陽炎のように揺らぎリュシエンヌは目を見開く。
「兄さま！」
リュシエンヌの声にレイナルドは優しい顔で振り向いた。
「ううん、なんでもない……また来てね」
この不安な気持ちを表す言葉が思い浮かばず、それだけしか言えなかったリュシエンヌにレイナルドは可笑しそうな顔をする。
「当り前だろう、近いうちに来るよ」
そう言って再びレイナルドは背を向けて歩き出した。
何も伝えることができなかった。ペンダントをなくしてしまったことも、言いも知れない不安を感じたことも。
レイナルドは近いうちに来ると言っていた。しかし、やはりレイナルドも任命式の準備で忙しかったのだろう、リュファス同様任命式の日までとうとう姿を見せなかった。

リュファスの任命式の日、自分は行くことができないのだが興奮していたせいか朝早くに目が覚めた。　リュファスはもちろんのこ

と騎士団の一員であるレイナルドも式に出席するため、今日はどちらも来ることはない。
あの日からあらゆるところを探して見てみたが、ペンダントは見つかることはなかった。しかし、まだ行っていない場所がある。ひとりでそこに行くのは従兄やリュファスに対する後ろめたさも手伝って今まで行かなかったが、落とした可能性があるのはもうあそこしかない。
今日はひとりで湖の方へ行こうと決意し、リュシエンヌは準備を始めた。

第３８話　美しい夢　５

王宮から聖騎士が誕生したと発表がなされ、国内は一瞬のうちに歓声に包まれた。
光の化身、守護騎士、天より降臨せし使者。
この国の繁栄をもたらす存在と人々はまだ見ぬ聖騎士を噂し夢をはせる。一夜のうちに国内には聖騎士リュファス・ブランヴィルの名を知らぬ者はいなくなった。
そして、子供から老人までありとあらゆる国民が聖騎士の姿が見ることができる任命式を心待ちにしていた。

リュファスは半ば強制的に王宮に拘束され任命式の準備に追われていた。
任命式のときに着用する聖騎士の礼服は代々決まっていたが、仕立て屋がリュファスを一目見て飾りたを付け加えたいと言ったのがことの発端だった。あれやこれやとリュファスを見ながら仕立て屋が悩み、挙句の果ては同業を呼んで意見を交換しあう始末で、たかが寸法を測ると軽く見ていたリュファスが辟易するくらいの時間がかかってしまった。
長い地獄のような時間から解放され、自室に戻る途中でリュファスは一息ついた。頭を悩ませるのは任命式自体ではなくそれまでの数日間である。
任命式など早く過ぎ去ればいいと切実に思う。
「どうした、酷く疲れているな」
気付くと傍らには現騎士団長ジェルマンがいた。リュファスは近付いてきたジェルマンの気配に気づかなかった自分に内心舌打ちをする。
「団長」

「お前は次期団長になる男だ。弱い姿を部下にも気取られるな」
リュファスは無言で頷く。聖騎士という自分に対して向けられる視線の大半は尊敬といった好意的なものだが、その中には嫉妬といった敵意も含まれていることに気付いている。
だからこそ、隙を見せてはいけない。
ジェルマンはその鋭利な瞳を細めてリュファスを観察するように眺めた。
「少しの時間をやろう。おの腑抜けた面をどうにかしてから訓練所に来い。お前はいつでも見られている」
強い口調で諌められる。それはとても老いたと陰口を言われている人物の迫力ではない。リュファスはまた負の気持ちが湧きあがってくるのを感じる。
立ち尽くすリュファス、気付いたらジェルマンは後ろを向けていた。

あの日。
訓練に打ち込んでいるリュファスの周りが突如眩いばかりの光に包まれた。煌々たる光の中心に剣の存在を認めたとき何かの間違いかと思ったが、光の剣はまるで自らを手に取れと言わんばかりにリュファスを導くように輝きを放っている。
誘われるまま剣を手に取るとその光は徐々に収まっていった。光によりくらんだ眼が回復したとき、周りの全ての騎士やメイドが跪いていた。
すぐさま王の元に呼ばれ、あれよあれよというちに任命式の日取りも決まっていた。
ふと自分を選んだ光の剣の姿を思い出す。柄には簡素だが見事な細工がされ細かい光の粒子を纏い現れたそれは光の剣の名に恥じない堂々とした姿だった。
国宝である光の剣は今はリュファスの傍にはない。王宮の奥の宝庫に保管されており、任命式で王の手から正式に賜るのだ。もっと

もリュファスが呼べば光の剣は現れるという。
任命式が終わればいずれ光の剣を持つことが日常となってくる。
正式に聖騎士となる前の今もその見えない重圧がのしかかってくる。
今まで人の上に立つことをしたことがなく、そんなことに興味もなかったのでいきなりふって湧いて出たその重すぎる立場から逃げたかったのかもしれない。

リュシエンヌに会いに行った日、本当はあの日もやらなければならないことがあった。しかし、無理やり休みを作り、リュシエンヌに会いに行くことにしたのだ。そのときリュファスの胸中には不安が渦巻いており半ば縋るような気持ちで行ったという事実は誰にも言わず墓まで持っていくつもりである。
自分よりもずっと年下の少女の言葉に勇気づけられて自信を持つことができた情けない自分の姿は誰にも見せられはしない。これを少女の従兄が知ったら笑われ一生からかわれ続けるだろう。それだけは避けたい。
それでもリュシエンヌに会いに行ったことは後悔していない。あの日リュシエンヌに会いに行ったことで動揺していた内面は湖の水のように穏やかになった。彼女はもちろん意図したわけではないがリュファスの不安を取り払ってくれた。
リュファスは自分が聖騎士になったことをリュシエンヌに正直に言えばよかったと帰ってから後悔をした。もし、あのとき伝えていたらどんな反応をしたのか、あんなに聖騎士に憧れを持っているリュシエンヌのことだから、あの白い頬を薔薇色に染め興奮した目で自分を見てくれるのだろうか。
酷く残念なことをした、とリュファスは軽くため息を吐いた。
本当は少女にも見せてやりたいと思っていた。あんなにも聖騎士に対して思いをはせていた少女ならば、それが聖騎士とあれば自分でも少女は喜ぶだろう。任命式も見てみたいだろうに。

だが、彼女が城下に来ることはない。彼女の従兄であるレイナルドが許さないからだ。レイナルドはリュシエンヌが家から離れることも許さない。行けないと知っているから少女は任命式を見ることは叶わない。悲しむ少女を見たくなかったというのもリュファスがリュシエンヌに対して口が重くなった原因である。

だからリュシエンヌとリュファスが湖に言っていることはレイナルドには言わない。言ったらレイナルドはきっと家からもリュシエンヌを出さなくなるだろうから。

過保護すぎると思わないでもないが、その理由は薄々と分かっている。初めてレイナルドにリュシエンヌを紹介されたとき、その美しい瞳に魅入った。古文書で調べてみたが、リュファスが思っていたよりもリュシエンヌは危うい存在なのかもしれない。

レイナルドは詳しいことはリュファスには言わない。いや、言うつもりなのだろうが、まだ時期ではないと思っている節がある。肝心なことは話さない。

しかし、きっとレイナルドはリュファスに話すはずだ。レイナルドはリュファスをリュシエンヌの守護者にしようとしているから。最初は反感を覚えたが、リュシエンヌと深く付き合っていくうちにその気持ちは消えた。リュシエンヌという存在に魅せられたのかも知れない。

純真な心、自分よりも他を優先させる優しさ、そしてあの美しい

―――

「ブランヴィル様……」

遠くに意識を飛ばしていたリュファスは突然割り込んできた声によって我に返る。

メイドが遠慮がちにリュファスに話しかけてきた。考えていたことを隅に追いやり、そちらを向くと怯えながらも頬を赤く染めたメイドが立っていた。

「あの、これがお召し物の中に入っておりました」

おずおずと手に持った物を差し出し、リュファスが受け取るとメイドは一礼をして風のように去って行ってしまった。終始赤い顔をしていたメイドにリュファスは軽く眉をひそめた。

渡された物をまじまじと見つめる。自分の服の中から出てきたと言われたが物ではなかった。しかし、見覚えのあるその石はリュファスが時折会いに行く少女がいつも大切そうに首から下げている青い石だった。

きっと少女が湖に落ちたのを引き上げたとき紐が切れてリュファスの服のポケットに入ってしまったのだろう。

肌身離さず身に着けていたものだ、今頃必死で探しているのかもしれない。

きっと彼女の従兄であり、リュファスの友人に預けたら仕事を投げてでも届けてくれるだろう。

そう思いながらも、リュファスは石を丁寧な動作で小袋の中に入れた。何故だか、自分が直接届けたいと思ったのだ。

紐ではなく切れにくいように鎖をつけて渡してやろうか、喜ぶかもしれないと考えつつ意外にあの少女に会うのを楽しみにしている自分に気付いた。

あの美しい瞳に見つめられると何もかもが見透かされているように感じる。本人はとても鈍くそんなことは全然ないのだろうが。あの瞳に自分だけが映されるのは悪くない。

少女に会いたいと思った。

早く終わらせてレイナルドを連れ二人でリュシエンヌのところに行くのもいい、と考えながらリュファスは訓練場に向かった。

白に包まれた戴冠式などに使用される協会はそれだけでも荘厳な雰囲気を漂わせていた。騎士たちは整列し、より厳かな空気を醸し出している。

この場に参上している誰もがこのときに居合わせることができた

ことを誇りに思い、最高の名誉を感じているだろう。
その中で、レイナルドは不機嫌だった。
従妹であるリュシエンヌに会いに行くと約束したのに何故かレイナルドの周りも忙しくなり、リュファス同様、結局任命式まで会いに行くことができなかった。
リュファスに八つ当たりしつつ、レイナルドはリュシエンヌを心配していた。
大切な大切な従妹。
愛しい人によく似た面影を持つ従妹は彼女の忘れ形見。これ以上彼女を悲しませたくない。今でも十分あの場所へ縛りつけ寂しい思いをさせているのだから。
思えばあの時から少女は全くわがままを言わなくなった。今までもドジだが聞き分けの良い子だったが、自分の手を煩わせることのないようにリュシエンヌは我慢していたような気がした。
そう思うと何もできない自分がもどかしくなった。自分だけでは少女の命をみすみす散らすことになるだけなのだから。

思いを巡らせていると定時になったのか、この式の主役であるリュファスが現れた。
白を基調とし、金の刺繍を施された礼服を着て、青いマントを揺らしながら歩くリュファスの雄姿に誰しもが感嘆のため息を零す。
男の自分から見ても惚れ惚れとする。リュシエンヌが昔言ってくれたように自分が聖騎士になれなかったことを悔しく思わないでもないが、友人がその大役を任せられるのは誇らしい。
リュシエンヌがいたら泣いて喜ぶのだろうか。リュファスが聖騎士になると言ったときも涙を零していたリュシエンヌのことだから、感動して声も出ないかもしれない。
レイナルドは笑みを浮かべた。隣にいた部隊長が訝しげにレイナルドを見ていたが素知らぬ顔をして前を見る。

リュファスが階段の下に跪く。王はまだ現れない。
それは突然だった。
胸のあたりに熱を感じてそこを押さえる。熱い。胸のあたりが酷く熱を持っていた。
熱源を確認してレイナルドの鼓動が早まる。
後先考えずにレイナルドは騎士たちを押しのけて「レイナルド！」と叫ぶ部隊長の怒鳴り声を背に聖堂を出て行った。
今は式から遁走した自分がこれからどうなるかなどなりふり構っている場合ではなかった。
走りながら襟から飛び出してきた赤い石を握り締める。握った手が爛れてしまいそうなほどそれは熱く、危険を知らせるようにレイナルドに警告している。
多分奴が来たのだ。
大切な人が自分に遺した従妹の持つ青い石と対になる赤い石。
恐怖、憎悪といったあらゆる負の感情が混ざり合いレイナルドの心を浸食していく。
「リュファス、リュシエンヌを頼む」
彼ならば大切な従妹を守ってくれると信じて、レイナルドはリュシエンヌの元に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4852j/

闇に惑う

2011年10月10日14時48分発行